

解題

錦天山房詩話

一一冊 教二上冊

友野 煥 著

友野煥、字は子玉、霞舟と號す、幼名は安太郎、雄助と稱す、江戸の人、昌平黌の教官たり、天保弘化の頃、命ぜられて甲府黌典館の學頭と爲る、館の教則は皆其の手に成れり、嘉永二年六月二十四日歿す、享年五十有八、谷中宗林寺に葬る、詩集あり、奉檄集、借綠軒集、西咲集及び峽役遺稿の四つに分てり。

此篇は、熙朝詩蒼に就きて、其の列舉せる所の詩を省きて、作者の小傳と諸家の評論及び霞舟の詩話とを採録して、上下二冊とせしものなり、熙朝詩蒼は、霞舟が林大學頭輝(復齋)の命を受けて、二十年の星霜を費し、刻々勵精して成したるものにして、體を朱竹垞の明詩綜に取れり、故に始めは熙朝詩綜と名づけたりしが、後に熙朝詩蒼と改めたり、全部一百十卷にして、上は源義直、賴宣、光圀の諸公より、伊達政宗、細川藤孝等の武人に及び更に藤原愷、鴛、林羅山、石川丈山、木下順庵、物徂、伊藤仁齋の儒先より、近世の柴栗山、古賀精里、賴春水、賴山陽等に至

るまで、無慮二百餘家の所作を列し、一々之れが小傳を附し、各家の評論を哀録し、最後に錦天山房詩話と題して、自家の所見を掲げたり、錦天山房とは、霞舟の齋號なり、實に我邦未嘗有の一大詩史なり、原書は寫本にて、紅葉山文庫の舊藏に係り、今、内閣文庫に在り、而して霞舟自筆の原稿本は、今尙ほ曾孫森田實氏の家に之を保管せらる、余今此篇を本叢書に收むるに際し、森田氏に就いて其書を借り、以て之を校訂せり、卷頭に掲げたる寫真は、即ち是れなり。

熙朝詩薈序

夫詩者言志也，志有邪正，故言有美惡。古昔盛時，自公卿大夫至田父紅女，莫不各言其志。三百篇所載是已。由是考之，則時之治亂，政之佳惡，事之得失，人之賢否，千載之下，瞭若目覩焉。漢魏六朝唐宋金元，以逮乎明清，靡不世有作者。一代自有一代之詩，指歸雖同，氣格各異。且以唐一代，猶有初盛中晚之別。王孟章柳李杜韓白，皆異其撰。宋元以下，莫不悉然矣。此豈有法令驅之賞罰導之哉。風氣所趨，雖作者亦有自不知其然而然者也。古云：詩道與政升降，信不誣矣。我大東靈淑所鍾，風氣淳厚，鴻荒之世，諾冊天橋之歌，素尊叢雲之詠，風雅之興，實胚于此。自神后西征，三韓率化，獻經貢儒，文運漸關，五言之作，防于大友大津，盛于大同弘仁，懷風凌雲諸編所載，粲

然可觀。菅江二氏世濟其美，彬彬焉可謂盛矣。然爾時文崇駢儷，詩宗白傅，末流之弊，終于萎。茶不振，加之保平以還，皇綱解紐，干戈相尋，海嶽鼎沸，靡有寧歲，人不聊生，何有於文辭？天悔禍延，篤生東照大君，經文緝武，撥亂反正，稼民樂業，大君以馬上得之，不以馬上治之。尊道禮儒，誕敷文教，首擢用羅山林子，以參帷幄，由是經藝之士，紛然見於世。延至元祿享保，作者林立，就中木門護社之徒最盛，人口開天而不舍，羞用唐以後之事。雖持論過高，用典太隘，均不免摸擬餽釘之病，動招後人刺譏。然其有切於藝苑，亦不可廢也。總而論之，建囊以後之詩，尚沿五山緇徒之陋習，一變於享保，又一變於寬政，又一變於近今，要之風氣之所趨，豈專人力乎哉？此可以觀世道之升降矣。余幼嗜吟詠，以披覽諸家集爲娛，常謂偃武以來，詩道之盛，迥邁前古。其間雖雅鄭竝奏，利鈍雜陳，性情所發，斐然成章，皆

足_一以鳴_一一代之盛矣、間有_一選本、或止_一一時、或限_一一州、未聞有能網羅二百餘年之作者、薈萃菁英、以成_一一代之鉅典者也、爰不自揣、有志編綴、而家貧、篋衍綦少、所費復多、以故因循未果、後入泮宮、獲_一遍窺_一祕府之富、蓄念復動、一日謁祭酒樸宇林公、語次及之、公殷懃、洎之、且許_一諸官給_一其紙筆之費、於是講肄餘暇、專事編纂、除_一祕府所藏家篋所貯外、或借_一鈔交友、或購_一收市肆、故紙殘編、搜求摘錄、不遺餘力、然一人之耳目有限、恐所漏尙衆、心常欲然、顧瞻_一遲久、河清無期、是以不得_一已、苟完竣功矣、又倣_一明詩綜、湖海詩傳例、名氏之下、繫以_一小傳、附以_一詩話、使覽者得論_一其時世、辨_一其源流、此亦所以考_一世道之升降之一端也、自惟雖謏陋不足、揚於風雅、亦庶_一幾乎有裨_一鳴盛之萬一云爾。

弘化四年丁未秋八月

江都友野璵撰

凡例

一錢牧齋列朝詩集採錄本朝帝王詩沈歸愚譏之固當矣如朱竹垞明詩綜則撰在異代似無不可者也我天子大君篇什煥如日月爛如河漢固非草茅微臣所敢議也故是編槩乎不錄如天朝公卿亦準此例。

一是編所錄上始于元和下迄于已故者見存者不收然歲月如流逝者相踵苟不爲限斷將無所終極故斷以天保之初。

一作者次序大率以時代前後年齒長幼然亦有不拘此例者或以譜第或以門派或以氣類如林氏子孫附羅山後木門護社之支流係錦里徂徠下列國群辟自爲一編是也。

一國初諸老大抵專意於經學不屑繪章琢句故所得不多間有所得亦多鄙言累句固不足傳焉然是編因人而傳詩不專因詩而傳人也故略採入焉。

一元祿以前因人而傳詩者十之七享保以後因詩而傳人者十之九何則當初風俗淳厚士氣剛勁苟志斯文者皆尙道義故其嘉言偉行自卓卓於世固不待辭章而傳也。

爾後累熙重洽，文運日融。至近世，閭里小民，深閨弱女，亦知弄文墨。至有挾其技而翫口於四方者，此亦足以見文質之消長，世道之升降矣。

一 是編專主於表章前賢，不致湮滅。故所採寧寬勿嚴，有失入而無失出，竊存發潛幽之微意。況獨出手眼，別裁僞體，定衆作之權衡，揭詩道於日月者，自有其人。如是編者，特查萃諸家，以俟後賢裁定爾，豈選之云乎。

一 各家詩有一聯警策而全篇不稱者，收之不可，棄之亦所不忍，故摘句附各人後，舍朽取用，庶無棄材。

一 古人詩中或有「一二字不妥帖，或平側失粘者，白璧微瑕，亦屬可惜，竊倣陳臥子明詩選例，改易數字，意在爲古人忠臣，覽者幸恕其僭妄。然此特在小家數中爾，如名公鉅卿，則不在此例。

一 是編所採，專據各家全集，全集不傳者，便採各選本，其散見諸選，互有異同者，從其義長者，校讐雖勤，魯魚猶多，覽者爲正其訛誤，補其差脫，則幸甚。

一 所繫小傳，一以家牒碑誌爲據，傍採錄日本詩史、先哲叢談、日本儒林傳、近世叢語等，而節刪之，不可考者闕。

一從前選本所取不一，或取格調，或宗神韻，或尙性靈，各據偏見，去取前賢，未免削趾適履之弊也。是編專就各集，務取其長，不立意見，不循門戶，竊庶幾無枉前賢之苦心矣。

一從前選本互有出入，如樂泮集，絃歌餘響，南紀風雅類，所收限一州，固亡論已。至歷朝詩彙，日本詩選等，採擇頗廣，然詳於本州，而略於他邦，理勢不得不然矣。今也諸家全集，采布海內者，何止數十百家，故雖寡陋如余，亦不難薈萃，所以有是舉也。然耳目所不及，遺漏猶多，嗣後雖有所獲，既難更定，又無補例，俟編續集，以成完璧。

錦天山房詩話上冊目次

源義直卷一	一	林靖卷七	二七	菊地東勾卷十三	六四	淺井忠	一〇〇
源賴宣	一	林懋卷八	二七	菊地武雅	六六	澁谷方均	一〇一
源光圀	四	林懋卷九	二八	中江原卷十四	六八	安東守約卷十七	一〇二
藤原政宗卷二	五	林懋卷十	二八	熊澤伯繼	七〇	安東守經	一〇三
源藤孝	五	林懋卷十一	二九	山崎嘉	七二	村上友佳卷十八	一〇四
藤原治茂	七	林懋	二九	米川一貞	七三	伊藤宗恕	一〇五
藤原肅卷四	九	林懋	三〇	藤井誠	七五	熊谷立閑卷十九	一〇六
豐臣勝俊	一五	林懋	三〇	仲村之欽	七六	仲村興	一〇七
菅玄同	一五	林懋	三一	貝原篤信	七八	渡邊宗臨卷二十一	一〇七
松永遐年	一六	林信有	三一	宇都宮三近	八〇	笠原龍鱗卷二十一	一〇八
堀正意	一七	林信有	三二	三宅重固	八二	餘澄卷二十二	一一一
那波颯	一九	林信隆	三三	三輪希賢	八四	莊田靜	一一二
那波守之	二〇	石川四卷十一	三五	朱之瑜卷十五	八六	大高坂季明	一一三
永田道慶	二二	人見壹卷十二	三五	陳元贊	八八	五井純頌	一一五
板飯如春	二二	人見節	三六	何情	九〇	堀正修	一一六
林忠卷五	二三	人見沂	三六	洪浩然	九二	堀正超	一一七
		佐藤筠	三六	李全道	九四	寺田革	一一八
				田村圃方卷十六	九六	森尙謙卷二十三	一二二

錦天山房詩話上冊目次

安積覺	一三二	木下園堅	一四九	祇園瑜卷三十四	一七九
大申元善	一三三	新井君美卷三十	一四九	雨森東卷三十五	一八三
松平義堯卷二十四	一三三	室直清卷三十一	一五五	松浦儀	一八六
德力良弼	一三五	高玄岱卷三十二	一六一	石原學魯	一八七
伊藤維楨卷二十五	一三五	高但賢	一六三	岡島達	一八八
伊藤長胤卷二十六	一三九	三宅正名	一六四	岡田信威	一八八
伊藤長堅	一三五	三宅緝明	一六五	堀山順之	一九八
荒川秀卷二十七	一三五	三宅維祺	一六六	梁田邦彦卷三十六	一九〇
小河成章	一三七	服部保庸	一六六	桂山義樹卷三十七	一九五
北村可昌	一三六	向井三省	一六九	湖岳	一九九
大町質	一三九	兒島景范	一六九	細井知慎卷三十八	一九九
蔭山元質	一四〇	西山順泰卷三十三	一七一	柳里恭	二〇〇
松岡成章	一四〇	榊原玄輔	一七一	岡島璞	二〇一
松下見樂卷二十八	一四二	榊原延壽	一七三	中野繼壽	二〇二
木村之漸	一四二	南部草壽	一七四	水足安方	二〇四
奥田士亨	一四三	南部景衡	一七四	中根若恩	二〇四
大井守靜	一四四	南部昌明	一七六	伊藤祐之卷三十九	二〇六
木下貞幹卷二十九	一四五	南部景春	一七六	物茂卿卷四十	二〇六

錦天山房詩話 上册

江都 友野喚子玉輯

源義直卷一

東照大君第九子、母志水氏、甲斐守宗清女、慶長五年生於伏見、八年封甲州、十一年叙正五位下、任左兵衛督、未幾轉四位少將、十二年封尾州、食六十一萬九千五百石、十六年叙從三位、參議兼右中將、元和三年任權中納言、寬永三年叙從二位、任權大納言、慶安三年五月七日薨、諡曰敬。

源義直卷一

東照大君の第九子、母は志水氏、甲斐守宗清の女なり、慶長五年伏見に生る、八年甲州に封ぜられ、十一年正五位下に叙し、左兵衛督に任ず、未だ幾ばくならずして四位少將に轉じ、十二年、尾州に封ぜられ、六十一萬九千五百石を食む、十六年、從三位に叙し、參議兼右中將たり、元和三年、權中納言に任じ、寬永三年從二位に叙し、權大納言に任ず、慶安三年五月七日薨す、諡して敬と曰ふ。

源賴宣

源賴宣

錦天山房詩話上册

日本時話叢書

二

東照大君第十子、母正木氏、左近太夫康永女、蔭山長門守氏廣養爲女、慶長七年生於伏見、八年封常州水戸、食二十萬石、明年增封五萬石、十一年叙正五位下、任常陸介、叙四位、任少將、十四年更封駿遠二州、食五十萬石、十六年轉從三位參議、兼右中將、元和五年定封紀州、食五十五萬五千石、寬永三年叙從二位、任權大納言、寬文十一年薨。

錦天山房詩話、保平以還、海寓鼎沸、干戈相尋、文運掃地、至足利氏之季、而極矣、然軍帥武夫、間有知弄文墨者、其篇章流傳者、亦往往在焉、然皆在慶元以前、不便輯錄、故附一二於左、以見文運之所自來、源

東照大君の第十子、母は正木氏、左近の太夫康永の女なり、蔭山長門守氏廣養ひて女と爲す、慶長七年、伏見に生る、八年、常州水戸に封ぜられ、二十萬石を食む、明年五萬石を増封し、十一年正五位下に叙し、常陸介に任じ、四位に叙し少將に任ず、十四年、更に駿遠二州に封じ、五十萬石を食む、十六年從三位參議に轉じ、右中將を兼ね、元和五年封を紀州に定め、五十五萬五千石を食む、寬永三年從二位に叙し、權大納言に任ず、寬文十一年薨す。

錦天山房詩話、保平以還、海寓鼎沸し、干戈相尋ぎ、文運地を掃ふ、足利氏の季に至りて極まれり、然るに軍帥武夫間、文墨を弄するを知る者あり、其篇章流傳する者、亦往々にして在り、然も皆慶元以前に在りて、輯錄に便ならず、故に一二を左に附して、以て文運の自りて來るところを見ず、源義昭一に義輝に作る亂を避けて舟を江州湖上に泛ぶに云ふ、落磯、江湖暗に愁を結ぶ、孤

義昭一作義輝 避亂泛舟江州湖上云、落魄
 江湖暗結愁、孤舟一夜思悠悠、天公亦慰
 吾生否、月白蘆花淺水秋、源賴之海南行
 云、人生五十愧無功、花木春過夏已中、滿
 室蒼蠅掃難去、起尋禪榻掛清風、山名時
 照是、永源寺松嶺和尚云、李將當年參藥
 山、指雲臨水兩重關、今朝特特枉台駕、賓
 主談鋒一點間、武田晴信新正口號云、淑
 氣未融春尙遲、霜辛雪苦豈言詩、此情愧
 被東風笑、吟斷江南梅一枝、上杉輝虎九
 月十三夜軍中作云、露下軍營秋氣清、數
 行過雁月三更、越山并得能州景、遮莫家
 鄉念、遠征直江兼續有、鴻雁似人人似雁、
 洛陽城裡背花歸、句惜不見其全。

錦天山房詩話上冊

舟一夜思悠悠、天公亦吾生を慰むるや否や、月は白し
 蘆花淺水の秋と、源賴之海南行に云ふ、人生五十功な
 きを愧づ、花木春過ぎて夏已に中す、滿室の蒼蠅掃へ
 ども去り難し、起ちて禪榻を尋ねて清風に掛けん」と、
 山名時照永源寺の松嶺和尚に呈するに云ふ、李將當
 年藥山に參す、雲を指し水に臨む兩重關、今朝特々台
 駕を枉ぐ、賓主談鋒一默の間と、武田晴信新正口號に
 云ふ、淑氣未だ融けず春尙遲し、霜辛雪苦豈詩を言は
 んや、此の情愧づ東風に笑はれん、吟斷す江南の梅一
 枝と、上杉輝虎九月十三夜軍中の作に云ふ、露は軍營
 に下りて秋氣清し、數行の過雁月三更、越山并得す能
 州の景遮、莫家郷の遠征を念ふを」と、直江兼續、鴻雁
 は人に似たり人は雁に似たり、洛陽城裡花に背いて歸
 るの句あり、惜むらくは、其全を見ず。

源光圀

字子龍、號西山、又號梅里、水戸威公第二子、東照大君孫、母谷氏、寬永五年生於水戸、九年叙從五位上、十年叙從四位下、任左衛門督、十七年任右中將、叙從三位、寬文元年、襲封水戸、食二十八萬石、元祿三年、任權中納言、十三年十二月六日薨於水戸、年七十八歲、諡曰義。

錦天山房詩話、義公以宗藩之重、懷英特之資、崇道敬儒、禮賢下士、政事文章、卓越前古、至今人尚稱其賢不衰、河間東平不啻也、所著大日本史、禮儀類典、常山文集、等若干部、鬱然成家、照映千古、亦二漢宗英之所無也。

源光圀

字は子龍、西山と號す、又、梅里と號す、水戸威公の第二子にして、東照大君の孫なり、母は谷氏、寬永五年、水戸に生る、九年從五位上に叙し、十年從四位下に叙し、左衛門督に任ず、十七年、右中將に任じ、從三位に叙す、寬文元年、水戸に襲封す、二十八萬石を食む、元祿三年、權中納言に任ず、十三年十二月六日、水戸に薨す、年七十八歲、諡して義と曰ふ。

錦天山房詩話、義公、宗藩の重きを以て、英特の資を懷き、道を崇め、儒を敬ひ、賢を禮し、士に下る、政事文章、前古に卓越す、今に至りて、人尚其賢を稱して、義へす、河間東平も、不啻ならず、著す所、大日本史、禮儀類典、常山文集、等若干部、鬱然として、家を成し、千古に照映す、亦二漢宗英の無き所なり。

藤原政宗 卷二

中納言山蔭後、大膳太夫政宗八世孫、世食奥州伊達郡、因氏伊達、父輝宗、爲二本松義繼被襲殺、政宗時在米澤城、聞之即馳赴、擊義繼殺之、終滅輩名盛隆、併會津仙道、移居黒川、威震鄰國、豐太閤東征、政宗往謁焉、後徙於仙臺、朝鮮之役、數有功、任少將、慶長十三年、賜族松平、寛永三年、任權中納言、十三年夏五月病篤、大猷大君再詣其家訪病、其月卒、年七十二歲。

源藤孝

三淵宗薫子、細川元常養爲子、因稱細川、任兵部太輔、永祿八年、三好松永等謀反、弑光源大君、藤孝奉大君弟一乘院主覺

藤原政宗 卷二

中納言山蔭の後にして、大膳太夫政宗八世の孫なり、世、奥州伊達郡を食む、因りて伊達を氏とす、父輝宗、二本松義繼の爲めに襲殺せらる、政宗時に米澤城に在り、之れを聞きて即馳せ赴き、義繼を撃ちて之れを殺す、終に蘆名盛隆を滅ぼし、會津仙道を併せ、居を黒川に移し、威、鄰國に震ふ、豐太閤東征し、政宗往きて謁す、後、仙臺に徙る、朝鮮の役、數、功あり、少將に任ず、慶長十三年、族、松平を賜ふ、寛永三年、權中納言に任ず、十三年夏五月病篤し、大猷大君再其家に詣り病を訪ふ、其月卒す、年七十二歲。

源藤孝

三淵宗薫の子にして、細川元常、養ふて子と爲す、因りて細川と稱す、兵部太輔に任ず、永祿八年、三好松永等謀反し、光源大君を弑す、藤孝、大君の弟一乘院主覺を奉じ、出で、江に奔る、髮して名を義昭と更む、復

慶出奔于江、髮而更名義昭、復奉適、若及越、遂通於織田信長、信長迎而立之、後義昭與信長有隙、藤孝數諫不聽、信長終放之於若江、藤孝及子忠興從信長、數有大功、天正九年封丹後、尋薙髮號玄旨、又號幽齋、關原之變、留守田邊、賊數萬圍守數旬、玄旨防禦甚力、初玄旨以國詩名世、嘗受古今集於西三條氏、悉得其祕、蓋王室自中葉、學廢、專尊國詩、託祖宗之道於詞學、授受爲訣、以古今集爲最重、時公卿以下無知其說者、僉恐玄旨死其傳、泯、天皇乃詔前田玄以和解、天使蒞之、賊乃罷歸、玄旨移龜山、尋聞關原報、遂遁高野、事平、東照大君念其勞、召歸、老于京師、天皇擇

六

た奉じて若及び越に適き、遂に織田信長に通ず、信長迎へて之れを立つ、後、義昭、信長と隙あり、藤孝數、諫むれども聽かず、信長終に之れを若江に放つ、藤孝及子忠興、信長に従ひ、數、大功あり、天正九年、丹後に封ぜらる、尋で薙髮して玄旨と號す、又幽齋と號す、關原の變、田邊に留守す、賊、數萬、圍守數旬、玄旨、防禦甚だ力む、初め玄旨、國詩を以て世に名あり、嘗て古今集を西三條氏に受け、悉く其祕を得たり、蓋、王室、中葉より學廢れ、專ら國詩を尊び、祖宗の道を詞學に託し、授受、訣を爲し、古今集を以て最重しと爲す、時に公卿以下、其說を知る者なし、僉、玄旨死じて、其傳の泯びんことを恐る、天皇、乃、前田玄以に詔し、和解せしむ、天使之れに莅み、賊乃ち罷め歸る、玄旨、龜山に移る、尋で關原の報を聞き、遂に高野に遁る、事平きて、東照大君其勞を念ひ、京師に歸老せしむ、天皇、公卿の詞學に長ずる者を選び、其業を受けしむ、大君も亦永井直勝をして就いて室町氏の制度を訪はしむ、慶長十五年病んで卒す。

公卿長詞學者受其業、大君亦使永井直勝就訪室町氏之制度、慶長十五年病卒。葦原子厚曰、我先君玄旨公之於和歌、上續千載將絕之緒、下垂萬世無窮之統、此乃天下衆人之所知、而無待微臣私言之爲徵也、夫和歌漢詩異體同工、則我藩風雅之興、實胚胎于此。

藤原治茂

一名公愨、字君續、鍋島氏、始封□□侯、後橫封佐貫侯。

錦天山房詩話侯、即今祭酒林公之妹夫也、故與林公交善、余嘗觀其與林公書、足見其襟度、因附于左、云、雲濤脩隔、睽如參商、戀戀襟抱、耿耿不寐、忽龍脫高和一律、

錦天山房詩話上冊

葦原子厚曰、我先君玄旨公の和歌に於ける、上は千載將に絶えんとするの緒を續ぎ、下は萬世窮り無きの統を垂る、此れ乃ち天下衆人の知る所、而して微臣私言の徵を爲すを待つ無し、夫れ和歌漢詩は、異體にして同工なり、則、我藩風雅の興る、實に此に胚胎す。

藤原治茂

一名は公愨、字は君續、鍋島氏、始め□□侯に封せられ、後ち封を佐貫侯に續ぐ。

錦天山房詩話、侯は即ち今の祭酒林公の妹夫なり、故に林公と交り善し、余嘗て其林公に與ふる書を觀るに、其襟度を見るに足る、因て左に附す、云ふ、雲濤脩く隔りて、睽くと參商の如し、襟抱に戀々として、耿耿として寝ねられず、忽、高和一律を龍脱せらる、恍として面晤の如し、不俟、闕高として簡牘を裁せずと雖、屢、室家

恍如面晤不佞雖闕焉不裁簡牘屢託室家致聲因審足下優游之樂清逸之適擣鼎康健之狀懽慰緬懷曩者在東辱蒙延納揚扈風雅商榷今古愉快曷勝雖然不佞間歲述職公事靡盬加旃以備禦瓊浦故僅三閱月輒西歸是以不能朝昏援臂以畢餘誨何其相得之曠而相違之濶也遺憾遺憾東武爲天下都會富商大賈星錯閭閻舞妓歌童趨踰承奉豪奢相競以爲娛樂而足下於其間乃能脫然獨異流俗簡靜儉素唯學爲嗜日與翰卿墨客徜徉于蕉樹下是可以見其有大過人者矣彼類所謂大隱在朝市耶○彼類二可歌牛恐互倒可羨又承徵鄙詩侏離之言奚足以贖清

に託して聲を致し、因りて足下の優游の樂清逸の適、擣鼎康健の狀を審にし、緬懷を懽慰せり、稽者東に在りしとき、辱く延納を蒙り、風雅を揚扈し、今古を商榷す、愉快曷ぞ勝へん、然りと雖、不佞間歲述職、公事靡盬なす、旃に加ふるに、瓊浦に備禦するを以てす、故に僅に三閱月にして輒ち西歸す、是を以て朝昏臂を援りて以て餘誨を畢す能はず、何ぞ其れ相得るの曠にして、相違の濶なるや、遺憾々々、東武は天下の都會たり、富商大賈閭閻に星錯し、舞妓歌童、趨踰承奉し、豪奢相競ひ、以て娛樂を爲す、而して足下其間に於て、乃能く脫然として獨流俗に異なり、簡靜儉素、唯學を嗜むを爲す、日に翰卿墨客と蕉樹の下に徜徉す、是れ以て其大に人に過ぎたる者あるを見るべし、彼は謂はゆる大隱朝市に在に類するか、歌すべし羨むべし、又鄙詩を徵するを承く、侏離の言、奚ぞ以て清聰を贖すに足らんや、且夫れ飢を操り藜を摘は、學者の廢せざる所、然れども一に意を斯に溺せば、則徒に靡蟲の末技に比す、有識者其れ之れを何とか謂はん、是を以て時々險哦する所、一瞥を需むる者あるも、峻拒して赦さず、其の眩翳に近きを恐るゝなり、然るに業に婚媾の好を叨にす、

聰哉、且夫操觚擲藻、學者所不廢、然一溺意於斯、則徒比雕蟲之末技、有識者其謂之何、是以時時所唵哦、有需一瞥者、峻拒弗赦、恐其近眩黷也、然業叨婚媾之好、則不謝、燕墮、近稿數首、繕寫錄呈、莞存幸甚、鴻便酷遽、不罄所欲言、統禱諒齎、不贅。

藤原肅卷四

字斂夫、播磨人、中納言定家十二世孫、父參議侍從爲純、生數子、肅乃第三子也、幼而穎悟、人呼爲神童、左肩傍有黑野、三寸餘、眼有重瞳子、初爲僧名舜、後悟其非、遂歸於儒、時海內騷擾、文教掃地、而卓然獨唱道于其間、嘗欲遊西土、觀其文物、至筑陽、泛溟渤、逢颶風、漂著鬼海島、乃喟然曰、

則燕墮を謝せず、近稿數首、繕寫して錄呈す、莞存せば幸甚し、鴻便酷だ遽にして、言はんと欲する所を罄くさず、統べて諒齎を禱る、贅せず。

藤原肅卷四

字は斂夫、播磨の人、中納言定家十二世の孫、父は參議侍從爲純といふ、數子を生む、肅は乃第三子なり、幼にして穎悟、人呼んで神童と爲す、左肩の傍に黒野あり、三寸餘、眼に重瞳子あり、初僧と爲り舜と名づく、後、其非なるを悟り、遂に儒に歸す、時に海内騷擾し、文教地を掃ふ、而して卓然として獨道を其間に唱ふ、嘗て西土に遊び其文物を觀んと欲し、筑陽に至り溟渤に泛び、颶風に逢ひ、鬼海が島に漂著し、乃喟然として曰、聖人には常師なし、吾れ諸を六經に求めて足れりと、赤松廣通は素より肅を重んじ厚く之れを遇し、學校を勸

聖人無常師、吾求諸六經足矣、赤松廣通素重肅、厚遇之、勸學校、行釋奠、朝鮮姜沆亦來寓於赤松氏、見肅歎曰、三百年來不見如此人也、石田三成居佐和山、使入聘之、欲往不果、廣通有故、自双肅哭之、慟慶長五年、東照大君入洛、肅深衣道服謁焉、後隱居於洛、弟子益進、林道春等請建庠序、邀肅教授生徒、會有大阪之役、事遂寢、元和五年九月十二日病卒、年五十九、自號惺窩、北肉山人、柴立子、廣胖窩、竹處、都句墩皆其別號、所著惺窩文集、十七卷、行于世、後光明帝賜以御製序、學者榮之、子爲景、任圖書頭、初定家食邑於播磨三木郡細河莊、至爲純時爲土豪別所長治所、

し、釋奠を行ふ、朝鮮の姜沆も亦來りて赤松氏に寓し肅を見て歎じて曰、三百年來此の如き人を見ずと、石田三成、佐和山に居り、人をして之れを聘せしむ、往かんと欲して果さず、廣通故ありて自双す、肅之れを哭して慟す、慶長五年、東照大君洛に入る、肅深衣道服して謁し、後、洛に隱居し、弟子益、進み、林道春等、庠序を建て、肅を邀へて生徒を教授せんことを請ふ、會、大阪の役あり、事遂に寢む、元和五年九月十二日病んで卒す、年五十九、自ら惺窩と號す、北肉山人、柴立子、廣胖窩、竹處、都句墩、皆其別號なり、著す所惺窩文集十七卷世に行はる、後光明帝賜ふに御製の序を以てす、學者之れを榮とす、子爲景、圖書頭に任す、初め定家邑を播磨三木郡細河の莊に食む、爲純の時に至りて、土豪別所長治に侵掠せらる、爲純、長子左近衛權少將爲勝と、之を禦げども利あらずして、皆死す、織田右府、覇を唱ふ、其臣羽柴秀吉方に事を用ふ、肅乃秀吉に告ぐるに將に復讐せんとするを以てす、秀吉答ふるに時を持つに如かざるを以てす、肅母を奉じ兄弟と京師に來る、是に於て其邑を亡ふ、正保中に至り、昭して爲景を以て左近衛權少將に任じ、尋で中將に轉じ、數、顧問を蒙

侵掠爲純與長子左近衛權少將爲勝、禦之、不利皆死、織田右府唱霸、其臣羽柴秀吉方用事、肅乃告秀吉以將復讎、秀吉答以不如待時、肅奉母與兄弟來京師、於是亡其邑、至正保中詔以爲景任左近衛權少將、尋轉中將、數蒙顧問、侍講經筵、爲景善詩歌、所著有白鷗文集若干卷。

林忠羅山曰、惺窩先生幼學至壯不怠、出入於釋老、閱歷于諸家、習日本紀萬葉集、歷代倭歌詩文等、其後讀聖賢書、而後棄異學、醇如也、故精義析理殆如破竹、未嘗勞其力也、凡知先生者、推稱中興之明儒、不知先生者、妄以爲無師無傳、夫道一而已矣、人能弘道、道不可須臾離也、○舊本不說道字、

錦天山房詩話上冊

り、講經の筵に待す、爲景詩歌を善くし、著十所、白鷗文集若干卷あり。

林忠羅山曰、惺窩先生、幼にして學び、壯に至りて怠らず、釋老に出入し、諸家を閱歷し、日本紀萬葉集、歷代倭歌詩文等を兼習し、其後聖賢の書を讀み、而して後異學を棄て、醇如たり、故に精義析理、殆んど破竹の如し、未だ嘗て其力を勞せず、凡そ先生を知る者、中興の明儒と推稱す、先生を知らざる者は、妄りに以て無師無傳と爲す、夫れ道は一のみ、人能く道を弘む、道は須臾も離るべからず、見て知る者あり、私淑する者あり、百世の下にして興起する者あり、千里の遠きにして、揆を一にする者あり、昔、仲尼没して千有餘年、周茂叔、

今、有見而知者、有私淑者、有百世之下而興起者、有千里之遠而一揆者、昔仲尼沒、千有餘年、周茂叔獨接不傳之統、道不在茲乎、若先生則是歟、是又我朝之景運、天下文明、五星聚奎之際歟、不亦盛乎。

堀正意 敬夫曰、先生奮然以興起斯文爲己任、得不傳之學於遺經、斫邪說之荆棘、開正路之茅塞、教學者於道知所向矣、因是時人知先六經而後詩文、始自學庸語孟、家傳戶誦、意領心會、而終服于濂洛關閩之說、其功豈在程朱之下乎。

林信澄 東舟曰、先生淑質貞亮、英才卓犖、九流七略、六藝百家、泊我國史家乘、及西域迦維之書、南蠻耶蘇之法、無書不讀、無

獨不傳の統を接す、道茲に在らずや、先生の若きは則是れか、是れ又我朝の景運、天下文明、五星奎に聚るの際か、亦盛んならずや。

堀正意 敬夫曰、先生奮然として斯文を興起するを以て己れの任と爲し、不傳の學を遺經に得、邪說の荆棘を斫りて、正路の茅塞を開き、學者をして道に於て向ふ所を知らしむ、是れに因て時人六經に先にして、詩文を後にすることを知り、學庸語孟より始め、家傳戶誦、意領心會、而して終に濂洛關閩の說に服す、其の功豈程朱の下に在らんや。

林信澄 東舟曰、先生淑質貞亮、英才卓犖、九流七略、六藝百家、泊我國史家乘、及西域迦維の書、南蠻耶蘇の法、書として讀まざるはなく、義として通ぜざるはなく、理として窮めざるはなし、博聞強記、天下其術に抗

義不通、無理不窮、博聞強記、天下無抗其衡者也、先生發明性理、而四書六經盡以程朱之意講之、攘斥佛老、而三綱五典、悉以聖賢之道教之、於是人知漢儒之淺陋、而宋儒之深遠、是先生之力也。

江村綬君錫曰、惺窩已以斯文自任、人憚其端嚴、而亦能風雅、不廢文字之業、嘗花時遊大原、訪豐臣長嘯、席上賦云、君是護花花護君、有花此地久留君、入門先問花無恙、莫道先花更後君、一時遊戲之言、體格亡論、已、然意致曲折、足證溫藉。

原善公道曰、此邦講宋學者、以僧玄惠爲始、爾後有間唱之者、其學不振、至惺窩、專奉朱說、林羅山、松永昌三、那波活所諸賢、

する者なし、先生性理を發明し、而して四書六經盡く程朱の意を以て之れを講じ、佛老を攘斥し、而して三綱五典、悉く聖賢の道を以て之れを教ゆ、是に於て、人、漢儒の淺陋にして宋儒の深遠なるを知る、是れ先生の力なり。

江村綬君錫曰、惺窩已に斯文を以て自ら任ず、人、其の端嚴を憚る、而して亦能く風雅にして、文字の業を廢せず、嘗て花時、大原に遊び、豐臣長嘯を訪ひ、席上賦して云ふ、「君は是れ花を護り、花は君を護る、花あり此地久しく君を留む、門に入りて先づ問ふ花恙なきや」と、道ふ莫れ花を先にして更に君を後にすと」と、一時遊戲の言、體格は論するなきのみ、然も意致曲折にして溫藉を證するに足る。

原善公道曰、此の邦、宋學を講ずる者、僧玄惠を以て始めと爲す、爾後間、之れを唱ふる者あるも、其學振はず、惺窩に至り、專朱說を奉じ、林羅山、松永昌三、那波活所の諸賢、皆其門より出で、各、時の歸仰する所と爲

皆出於其門、各爲時所歸仰、繼之山崎闇齋、獨立自振、亦宗洛闈、於是乎、朱學始大行。

錦天山房詩話、國初諸老皆專攻經學、不復留意於詞章、雖間有所作、多以語錄爲詩、或以國雅爲詩、若非白沙定山之遺、則亦五山禪衲之餘也、已、惺窩稟問出之質、紹不傳之統、揭斯道於既墜、啓來學於無窮、其功偉矣、然爾時文運始胚、而未融、故其詩句俚淺、未免齷者所謂之弊也、其後詩道日昌、月熾、至元祿以後、而始極其盛矣、蓋氣運之所使然、豈特人力乎、且始作者、難爲力、繼起者、易爲功、安得既享三牲八珍之美、而忘汗尊杯飲之朔乎哉、故錄

る、之れに繼いて山崎闇齋、獨立して自ら振ひ、亦、洛闈を宗とす、是に於てか、朱學始めて大に行はる。

錦天山房詩話、國初の諸老は、皆専ら經學を攻め、復た意を詞章に留めず、間、作る所ありと雖、多くは語錄を以て詩と爲し、或は國雅を以て詩と爲す、若し白沙定山の遺に非ざれば、則亦五山禪衲之餘のみ、惺窩は問出の質を稟け、不傳の統を紹ぎ、斯道を既墜に掲げ、來學を無窮に啓く、其功偉なり、然るに爾時文運始めて胚して、未だ融せず、故に其詩句俚淺にして、未だ齷者謂ふ所の弊を免れず、其弊、詩道日に昌に月に熾に、元祿以後に至り、而して始めて其盛を極む、蓋、氣運の然らしむる所、豈特に人力のみならんや、且始めて作る者は力を爲し難く、繼いで起る者は功を爲し易し、安ぞ既に三牲八珍の美を享けて、而して汗尊杯飲の朔を忘るゝを得んや、故に其詩を錄し、以て諸を編に冠し、以て國家文明の源の由りて興る所を示す。

其詩、以冠諸編、以示國家文明之運所由興矣。

豐臣勝俊

本姓平氏、杉原、父家定、尾州人、豐太閤妣之兄、少仕太閤、任肥後守、賜姓豐臣、氏木下、領播州姫路、食二萬三千石、有子六人、勝俊則其長也、任少將兼若狹守、食若州萬石、慶長五年、石田三成等、攻伏見城、勝俊在城中、不知所與、去而入京、天下已平、勝俊失封邑、退隱東山、自號長嘯、又號天哉翁、又號西山樵夫、與藤原惺窩、石川丈山、交厚、善國雅、有舉白集、傳于世。

菅玄同

字子德、號得菴、又號生白堂、播磨人、年二

豐臣勝俊

本姓は平氏、杉原、父家定、尾州の人、豊太閤の妣の兄なり、少ふして太閤に仕へ、肥後守に任じ、姓を豊臣、氏を木下と賜ふ、播州姫路を領し、二萬三千石を食む、子六人あり、勝俊は則ち其長なり、少將兼若狹の守に任ず、若州五萬石を食む、慶長五年、石田三成等、伏見城を攻む、勝俊、城中に在りて與る所を知らず、去りて京に入る、天下已に平きて、勝俊封邑を失ひ、東山に退隱し、自ら長嘯と號す、又天哉翁と號し、又西山樵夫と號す、藤原惺窩、石川丈山と交厚く、國雅を善くし、舉白集あり世に傳はる。

菅玄同

字は子德、得菴と號す、又、生白堂と號す、播磨の人、年二

十四、入京從曲直瀬玄朔學醫、後登惺窩門、專修儒學、久之名聞遠邇、來學者甚衆、嘗獨居讀書、倦而假寐、弟子安田安昌、潛來刺之、聞者識與不識、莫不嘆惋、實寬永戊辰六月十四日也。

江村經君錫曰、惺窩門人有菅原玄同、字得菴、有鶴飼信之、字子直、羅山門人、有人見友元、永田道慶、活所門人、奥田舒雲、昌三門人、野間三竹等、當時並有聲譽、爾時詩論未透、雅音罕振、今閱諸人遺稿、雖各有低昂、大較魯衛之政。

松永遐年

字昌三、稱昌三郎、號尺五、又號講習堂、平安人、貞德子、從惺窩學、博覽強識、年十八、

十四、京に入りて曲直瀬^{キマセ}玄朔に從ひて、醫を學び、後惺窩の門に登り、專儒學を修む、之れを久よして名遠邇に聞ゆ、來り學ぶ者甚衆し、嘗て獨居、書を讀み、倦んで假寐す、弟子安田安昌、潛に來りて之れを刺す、聞く者識ると識らざると、嘆惋せざるは莫し、實に寬永戊辰六月十四日なり。

江村經君錫曰、惺窩の門人に菅原玄同、字は得菴あり、鶴飼信之、字は子直あり、羅山の門人に、人見友元、永田道慶あり、活所の門人に奥田舒雲、昌三門人、野間三竹等、當時並に聲譽あり、爾時、詩論未だ透らず、雅音振ふ罕れなり、今、諸人の遺稿を閲するに、各、低昂ありと雖、大較、魯衛の政なり。

松永遐年

字は昌三、昌三郎と稱す、尺五と號す、又、講習堂と號す、平安の人、貞德の子なり、惺窩に從つて學ぶ、博覽強識、年十八、豊臣秀頼に見え、大學を講じ、既にして加賀に

見豐臣秀頼講大學既而至加賀加賀侯異禮待之晚還京教授承保中勅以布衣召講春秋經因名其居爲春秋館館在西洞院時板倉侯爲京師所司代好學雅重之數延聽其說書遂爲請地於堀川創一堂於是從游甚多木下順菴侯都宮遜菴安東省菴等皆出其門明曆中卒年六十六歲二子長昌易次永三昌易居春秋館無嗣永三居講習堂子孫能守其緒業。

堀正意

字敬夫號杏菴又號杏隱近江人少師事惺窩篤行博學與林羅山松永尺五那波活所齊名世曰爲四天王嘗游事安藝侯時尾張敬公好學求士使人請之乃徒仕

至る加賀侯禮を異にして之を待つ、晩に京に還りて教授す、承保中、勅して布衣を以て召して春秋經を講ぜしむ、因て其居を名けて春秋館と爲す、館は西洞院に在り、時に板倉侯京師の所司代たり、學を好み、之れを雅重す、數延いて其書を説くを聽く、遂に爲に地を堀川に請ひ、一堂を創す、是に於て從游甚多し、木下順菴宇都宮遜菴安東省菴等皆其門に出づ、明曆中に卒す、年六十六歲、二子、長は昌易、次は永三、昌易は春秋館に居る、嗣なし、永三は講習堂に居る、子孫能く其緒業を守る。

堀正意

字は敬夫、杏菴と號す、又、杏隱と號す、近江の人、少くして惺窩に師事す、篤行博學にして、林羅山、松永尺五、那波活所と名を齊くす、世に目して四天王と爲す、嘗て安藝侯に游事す、時に尾張敬公、學を好み士を求む、人をして之れを請はしむ、乃徙りて尾張に仕ふ、初め法

尾張、初爲法橋、後進法眼、寛永中來、江戸、謁台徳大君、賜衣服酒食、且奉旨入弘文院、與諸家系、圖傳編修、別自撰武家系圖、案富詞彙、韓人來聘者、稱爲文苑老將、又精於方技、書愛陶淵明爲人、常懸其像于壁間、曰、對此則使人頓消塵慮、與石川丈山林春齋兄弟交尤親、丈山送其歸、尾陽詩、有學養、鄒柯氣、術包廬扁傳句、函三曉詩、亦有筆評、邪正臨、洙水、藥辨、君臣、汲上池句。

室直清子禮曰、先生少遊於惺窩之門、學博而聞多、凡禮樂刑政、典章文物、無不講究而明其道、其於文章之所以爲文章者、蓋深知之、故其辭簡易平實、自有條理、豈

橋と爲り、後、法眼に進む、寛永中、江戸に來り、台徳大君に謁す、衣服酒食を賜ひ、且、旨を奉じて弘文院に入り、諸家系圖傳編修に與る、別に自ら武家系圖を撰す、案より詞藻に言む、韓人の來り聘するを、稱して文苑の老將と爲せり、又、方義に精し、嘗て陶淵明の人と爲りを受し、常に其像を壁間に懸けて曰、此れに對すれば人をして頓に塵慮を消せしむと、石川丈山林春齋兄弟と、交り尤親し、丈山の其尾陽に歸るを送る詩に、學は鄒柯の氣を養ひ、術は廬扁の傳を包ぬの句あり、函三の曉詩にも亦、筆は邪正を評して洙水に臨み、藥は君臣を辨じて上池に汲むの句あり。

室直清子禮曰、先生少ふして惺窩の門に遊び、學博くして聞多し、凡そ禮樂刑政、典章文物、講究して其道を明にせざるは無し、其文章の文章たる所以の者に於ては、蓋深く之れを知る、故に其辭、簡易平實にして、自ら條理あり、豈、今世の文の務めて粉飾を爲して、以て

若今世之文務爲粉飾、以投時好者、說。

物茂卿曰、余若年時、聞之先大夫、昔洛有、
惺窩先生者焉、其高弟子、若羅山、活所、
諸公者五人、名聞海內、皆務以辯博相高、
而屈先生者、獨爲溫厚長者、乃調然於四、
人之間、退謙自將、不求名高、夫儒者、斷斷、
自古爲然、而乃能爾者、千百人中一人耳、
錦天山房詩話、杏菴撰、惺窩集序、辭理條、
暢、能脫當時陋習、可以知其所、得者深、而、
所傳詩殊不稱。

那波 颯

字道圓、初名方、稱平八、號活所、播磨人、家、
世服、質、颯幼好學、澹然不專營利、年十七、
入京、明年執弟子禮、謁惺窩、作杜鵑詩、際、

錦天山房詩話上冊

時好に投する者の若くならんや。

物茂卿曰、余若年の時、之れを先大夫に聞けり、昔、洛に、
惺窩先生といふ者あり、其高弟子、羅山、活所諸公の、
若き者五人、名、海内に聞ゆ、皆務めて辯博を以て相高、
ぶる、而して屈先生は、獨温厚の長者たり、乃ち四人の、
間に謙然たり、退謙自ら將いて、名高を求めず、夫れ儒、
者は断々たり、古より然りと爲す、而して乃能く爾る、
者は、千百人中に一人のみ。

錦天山房詩話、杏菴、惺窩集の序を撰す、辭理條暢にし、
て、能く當時の陋習を脱す、以て其の得る所の者深き、
を知る可し、而して傳ふる所の詩殊に稱はず。

那波 颯

字は道圓、初の名は方、平八と稱す、活所と號す、播磨の、
人、家世、質に服す、颯幼にして學を好み、澹然として營、
利を事とせず、年十七京に入る、明年弟子の禮を執り、
惺窩に謁す、杜鵑の詩を作り、之れを際す、惺窩大に稱、

之、惺窩大稱賞、由此早有重名、年二十九、應辟肥後加藤侯、不遇而去、後出仕紀藩、歲祿五百石、爲人不求苟合、事上有謔詩之風、寬永中林學士奉命撰諸家系譜、召與其事、適患眼辭歸、正保戊子卒于京師、年五十四、晚改姓祐氏、因王父字、所著有活所遺稿、備忘錄、帝王曆數圖等。

那波守之

字元成、號木菴、活所子、襲父官祿、爲人強毅、諒直、不改家風、數往來京、紀祗役、東都後遂賜恩暇、歸京、終身不絕祿、年七十沒、所著有老圃堂集、伊藤坦菴、有哭祐木菴詩、曰、南紀委身道尤直、北邙埋骨事空傳、江村綏君錫曰、那波氏世住播州、家資鉅

賞す、此れに由りて、早くよりして重名あり、年二十九、辟に肥後の加藤侯に應ず、不遇にして去る、後紀藩に出仕す、歲祿五百石なり、人と爲り苟合を求めず、上に事へて謔詩の風あり、寬永中林學士、命を奉じて諸家系譜を撰す、召されて其事に與る、適、眼を患ひ辭して歸る、正保戊子京師に卒す、年五十四、晚に姓を祐氏と改む、王父の字に因るなり、著す所、活所遺稿、備忘錄、帝王曆數圖等あり。

那波守之

字は元成、木菴と號す、活所の子なり、父の官祿を襲ぐ、人と爲り強毅諒直にして、家風を改めず、數、京紀に往來し、東都に祗役す、後遂に恩暇を賜はり京に歸り、終身祿を絶たず、年七十にして沒す、著す所老圃堂集あり、伊藤坦菴、祐木菴を哭する詩あり、曰く、南紀に身を委ぬ道尤直し、北邙に骨を埋む事空しく傳ふと。

江村(綏)君錫曰、那波氏世住播州に住す、家資鉅萬、活所

萬迄活所事紀藩、歲俸五百石、家道益饒、是以極力典書、至數萬卷、我義祖全菴先生、以同學故、唱和殊多、至今、余家藏木菴詩數紙、筆力遒勁、字字飛動。

永田道慶

字平安、號善齋、一號石蘊、又號平菴、京師人、幼而事藤、惺窩與林道春有師友之契、從道春赴駿府、仕紀州南龍公、爲儒官、從徒于紀、其學宏博、異端方技之書、莫不該通、所著膾餘雜錄行于世。

伊藤弘朝海藏曰、永田道慶、所著有善齋集、逸落罕傳、余偶得見之、屬文殊爲富贍。

板阪如春

□□□、號意齋、世通稱卜齋、家本甲州武

に迄りて紀藩に事ふ、歲俸五百石、家道益饒なり、是を以て極力書を典し、數萬卷に至る、我が義祖全菴先生、同學の故を以て、唱和殊に多し、今に至るまで、余が家に木菴の詩數紙を藏す、筆力遒勁にして、字々飛動す。

永田道慶

字は平安、善齋と號す、一に石蘊と號す、又、平菴と號す、京師の人、幼にして藤、惺窩と林道春とに事へ、師友の契あり、道春に従ひ駿府に赴き、紀州南龍公に仕へて、儒官と爲り、從つて紀に徙る、其學宏博にして、異端方技の書も該通せざるはなし、著す所、膾餘雜錄、世に行はる。

伊藤弘朝海藏曰、永田道慶、著す所、善齋集あり、逸落して傳ふること罕なり、余偶、之れを見ることを得たり、文を屬すること殊に富贍と爲す。

板阪如春

□□□、意齋と號す、世ト齋と通稱す、家本ト、甲州武

田氏臣、意齋仕東照大君、爲侍醫、甚被親近、後從紀南龍公、遷于紀、其著注大君起居者數種、又嘗按刻宋人馬仲虎編年互見圖、行于世、永田道慶、李眞榮皆作之跋、

林忠卷五

一名信勝、字子信、號羅山、稱又三郎、其先加賀人、後徙紀伊、及父信時、住平安、因爲平安人、生而秀偉、幼卽齋學、年八歲、時甲斐德本過父、讀太平記、在傍聞之、卽背誦數十張、又嘗造某許、講論語集注、中脫一葉、乃操筆補寫、不差一字、其強記率此類也、十四寓建仁寺、讀書、衆僧皆歎異、勸以出家、不可、竟去歸家、時世未有奉宋說者、始讀朱注、心甚好之、遂聚徒講之、學士清

田氏の臣なり、意齋、東照大君に仕へ、侍醫と爲り、甚親近せらる、後、紀の南龍公に従ひ、紀に遷る、其著大君の起居を注する者數種、又嘗て宋人馬仲虎の編年互見圖を按刻し、世に行はる、永田道慶、李眞榮皆之れが跋を作る。

林忠卷五

一に信勝と名づく、字は子信、羅山と號す、又三郎と稱す、其先は加賀の人、後、紀伊に徙り、父、信時に及で平安に住す、因て平安の人と爲る、生て秀偉、幼にして卽ち學に嚮ふ、年八歲、時に甲斐德本父に過ぎりて、太平記を讀む、傍に在りて之を聞き、卽數十張を背誦す、又嘗て某の許に造り、論語集注を講す、中に一葉を脱す、乃筆を操りて補寫し、一字を差へず、其強記率、ね此の類なり、十四にして、建仁寺に寓し、書を讀む、衆僧皆歎異し、勸むるに出家を以てす、可かず、竟に去りて家に歸る、時に、世、未だ宋說を奉ずる者あらず、始めて朱注を讀み、心に甚之れを好みし、遂に徒を聚めて之を講す、學士清原の宣賢、其異を擧するを惡み、之れを罪せんことを請ふ、東照大君、其議を難け而して、忠を稱して見

原宜賢、惡其標異、請罪之。東照大君黜其議、而稱忠爲有所見、於是益攻其學。時藤惺窩以性命學聞、乃介吉田玄之入其門、業大進、二十三歲謁大君、應對稱旨、大被寵任、起朝議、定律令、大府所須文書無不經其手者。薙髮稱道春、爲民部卿法印、明曆丁酉正月病卒、年七十五、私諡曰文敏、所著書凡百有餘部、文集百五十卷、羅浮山、羅洞、四維山、長胡蝶洞、梅村苑、夕顏巷、顏巷、瓢巷、麝眠、雲母溪、尊經堂、皆其別號云。

林恕之道曰、先考齡七十五而終、東舟五十四而終、二先生偶與明道伊川同其壽、但其先後之異耳、不亦奇乎、若論其氣象

る所ありと爲せり、是に於て益、其學を攻む、時に藤惺窩性命の學を以て聞ふ、乃、吉田玄之を介して其門に入り、業大に進む、二十三歳、大君に謁し、應對して旨に稱ふ、大に寵任せらる、朝儀を起し律令を定む、大府須ふる所の文書、其手を経ざる者なし、薙髮して道春と稱す、民部卿法印と爲る、明曆丁酉正月病んで卒す、年七十五、私に諡して文敏と曰ふ、著す所の書凡そ百有餘部、文集百五十卷、羅浮山、羅洞、四維山、長胡蝶洞、梅村苑、夕顏巷、顏巷、瓢巷、麝眠、雲母溪、尊經堂、皆其別號と云ふ。

林恕之道曰、先考齡七十五にして終る、東舟五十四にして終る、二先生は偶、明道伊川と其壽を同うす、但其先後の異なるのみ、亦奇ならずや、若し其氣象を論ずれば、則先考の和は明道に似たり、東舟の嚴は伊川

則先考之和似明道、東舟之嚴似伊川、其所學之優劣、世皆知之、不待余言也。

稻葉正信、默齋曰、羅山年十三元服、稱又三郎、信勝慶長中蒙神祖召、歷仕四朝、即位改元行幸入朝之禮、及宗廟祭祀之典、外國蠻夷之事、莫不典議焉。○典議、與之語。正保中病在家、執事元老承旨寄書或就論事、令官醫看病、時有事、日光召見便殿、聽乘輿入城、有旨以其齡漸高、令朝朔望云。

江村毅君錫曰、關東古稱用武之地、猛將勇士、史不絕書、而文雅之士、不少概見、迄于神祖營建東都、置弘文院、設學士職、文教興、武德竝隆、終成人文淵藪、羅山林先生、際會風雲、首唱斯文於東土、芝蘭奕葉、

に似たり、其學ふ所の優劣、世皆之れを知る、余が言を待たざるなり。

稻葉默齋曰、羅山年十三にして元服し、又三郎と稱す、信勝、慶長中、神祖の召を蒙り、四朝に歴仕し、即位改元行幸入朝の禮、及び宗廟祭祀の典、外國蠻夷の事、典議せざるはなし、正保中、病みて家に在り、執事元老旨を承け書を寄せ、或は就ひて事を論ず、官醫をして病を看せしむ、時に事あり、日光、便殿に召見し、輿に乗りて城に入るを聽す、旨あり、其齡漸く高きを以て、朔望に朝せしむと云ふ。

江村毅君錫曰、關東、古は武を用ふるの地と稱す、猛將勇士、史に書するを絶たず、而して文雅の士、少概も見えず、神祖東都を營建するに起りて、弘文院を置き、學士の職を設け、文教、武徳と竝に隆に、終に人文の淵藪と成る、羅山林先生は、風雲に際會し、斯文を東土に首唱す、芝蘭奕葉、長く海内の儒宗と爲る、曹邱生を俟つことなきなり。

長爲海内儒宗、無俟曹邱生也。

原善公道曰、羅山爲詩文、揮翰如飛、頃刻成千言、明曆乙未朝鮮信使愈秋潭、發歸前一夕、寄扶桑壯遊百五十韻、以求廣詩、時內子荒川氏、罹重疾、護視在側、而夜間口和、乃使男春德錄之、至曉稿成、不加一點、即使入齋、追及小田原驛、致之、秋潭大驚、羅山暮年視聽不衰、勤力猶少年、二十一史、自少讀之者數過、而晉書以下未句、及年七十四、欲遍句之、是歲晉書宋書南齊書畢業、翌年蓋棺。

錦天山房詩話、羅山先生父子、天資既高、學殖亦至、博聞強識、海内無敵、但氣運所拘、未能全脫、當時陋習、往往招後輩譏刺、

原善公道曰、羅山詩文を爲るに、翰を揮ふこと飛ぶが如し、頃刻にして千言を成す、明曆乙未朝鮮の信使、愈秋潭、發歸前一夕に、扶桑壯遊百五十韻を寄せて、以て廣詩を求む、時に内子荒川氏、重疾に罹る、護視して側に在り、而して夜間口づから和し、乃ち男春德をして之れを錄せしめ、曉に至りて稿成りて一點を加へず、即、人をして齋らし追はしめ、小田原驛に及びて之れを致す、秋潭大に驚く、羅山、暮年に視聽衰へず、勤力、猶少年のごとし、二十一史、少きより之れを讀むこと數過、而して晉書以下未だ句せず、年七十四に及び、遍く之れに句せんと欲す、是の歲、晉書宋書南齊書業を畢へ、翌年棺を蓋ふ。

錦天山房詩話、羅山先生父子、天資既に高く、學殖も亦至る、博聞強識、海内敵なし、但、氣運の拘はる所、未だ全く當時の陋習を脱する能はず、往々、後輩の譏刺を招く、然るに著述の夥き、雄健富麗、其言、徴するに足る

然著述之夥、雄健富瞻、其言足徵者甚多、不啻當世所無、實曠古罕見、其比矣、假令出享元之際、遇文運丕闡之時、則其所造詣、豈如此而止哉。

林信澄

號東舟、又號樗墩、羅山同母弟也、慶長戊申、始謁東照大君及台徳大君、明年奉命往長崎、壬子仕大府、削髮稱永喜、寬永己巳、叙刑部卿法印、食秩八百石、戊寅八月病卒、年五十四歲、東舟博洽群籍、羅網百氏、名與羅山齊、子永甫、號寒江、早卒、無嗣、林恕之道曰、先考齡七十五而終、東舟五十四而終、二先生偶與明道伊川同其壽、但其先後之異耳、不亦奇乎、若論其氣象、

者甚多し、嘗に當世に無き所なるのみならず、實に曠古、其比を見ること罕なり、假令享元の際に出でて、文運丕に闡くの時に遇はば、則其造詣する所、豈此の如くにして止まんや。

林信澄

東舟と號す、又樗墩と號す、羅山の同母弟なり、慶長戊申、始めて東照大君及台徳大君に謁す、明年命を奉じて長崎に往き、壬子、大府に仕へ、髮を削り、永喜と稱す、寬永己巳、刑部卿法印に敘し、秩は百石を食む、戊寅八月病んで卒す、年五十四歲、東舟、群籍に博洽し、百氏を羅網し、名、羅山と齊し、子、永甫、寒江と號す、早く卒して嗣なし。

林恕之道曰、先考、齡七十五にして終り、東舟五十四にして終る、二先生偶、明道伊川と其壽を同うす、但、其先後の異なるのみ、亦奇ならずや、若し其の氣象を論ずれば、則先考の和は明道に似たり、東舟の嚴は伊川に

則先考之和似明道、東舟之嚴似伊川、其所學之優劣、世皆知之、不待余言也。

錦天山房詩話、余每怪、東舟與兄羅山俱以博洽著名當世、而至其著述多寡、甚不相均、假令其早世無嗣、遺集散佚、想其生平所著、應不下數千百首、而無隻句傳後、何也、搜訪多年而未得也、頃日、種宇林公獲諸篋衍中、見貽、同登載、附于羅山後。

林恕卷六

字之道、初名春勝、字子和、稱春齋、號鷲峯、幼名吉松、又稱又三郎、羅山第三子、平安人、幼時羅山來江戶、恕與母氏、留居平安、學文詞於那波活所、筆札於松永貞德、年十七、始來江戶、日趨家庭、學益進、及其登

似たり、其學ぶ所の優劣は、世皆之れを知る、余の言を待たざるなり。

錦天山房詩話、余毎に怪む、東舟、兄羅山と俱に博洽を以て名を當世に著はす、而して其著述の多寡に至りては、甚相均しからず、假令ひ其早世して嗣なく、遺集散佚、想ふに其生平著す所、應に數千百首に下らざるべし、而るに隻句の後に傳ふるなきは何ぞや、搜訪多年而かも未だ得ざるなり、頃日、種宇林公、諸れを篋衍中に獲て貽らる、同じく登載して羅山の後に附す

林恕卷六

字は之道、初の名は春勝、字は子和、春齋と稱し、鷲峯と號す、幼名は吉松、又三郎と稱す、羅山の第三子にして、平安の人なり、幼時、羅山、江戶に來る、恕、母氏と平安に留居し、文詞を那波活所に、筆札を松永貞德に學ぶ、年十七、始めて江戶に來り、日に家庭に趨り、學益進む、其登用せらるゝに及んで、等機を造るの議に與かる、眷遇甚渥し、後數、旨を奉じ、編著極めて夥し、五經

用與造等儀之議、眷遇甚渥、後數奉旨、編著極夥矣、五經皆有私考數十卷、其他小品極多、其最大者、如本朝通鑑諸家系圖傳、皆三百餘卷、鷲峯全集二百四十卷、卷

帙浩瀚、邦人所未曾有也、襲父職、任治部卿法印、延寶庚申卒、年六十三、私諡文穆。

林鷲直民曰、我祖羅山子、抱非世之才、應必復之運、興起學道、隆成文物、我父鷲峯先生、克繼志業、辱賜學士、其家傳蓋有所職之由也、其天質蓋有所稟之異也、而又沈潛乎群經、開其蘊奧、蒐獵乎諸史、通其歷蹟、翱翔乎藝苑、誦百家之言、馳騁乎詞林、窮衆體之法、有所增之、有所廣之、先生於學於識、可謂博而大深而遠也、特立儒

は皆、私考數十卷あり、其他小品極めて多し、其最大なる者、本朝通鑑諸家系圖傳の如き、皆三百餘卷、鷲峯全集二百四十卷、卷帙浩瀚、邦人未だ曾て有らざる所なり、父の職を襲ぎ、治部卿法印に任ず、延寶庚申卒す、年六十三、私に文穆と諡す。

林鷲直民曰、我祖羅山子、非世の才を抱き、必復の運に應じ、學道を興起し、文物を隆成す、我父鷲峯先生、克く志業を繼ぎ、辱くも學士を賜ふ、其家傳、蓋職とする所の由あり、其天質、蓋稟る所の異あるなり、而して又群經に沈潛し、其蘊奧を開き、諸史を蒐獵し、其歷蹟に通じ、藝苑に翱翔し、百家の言を誦し、詞林に馳騁し、衆體の法を窮む、之れを増す所あり、之れを廣むる所あり、先生の學に於ける識に於ける博にして大に、深にして遠と謂ふ可きなり、儒術に特立し、公事に諮詢す、族譜を考撰し、氏流の出づる所を辨じ、國史を編輯し、皇紀の闕くる所を補ひ、天下の務に應じ、天下の人に接し、

闢、咨詢公事、考撰族譜、辨氏流之所、出編、
 韓國史、補皇紀之所、闕、應天下之務、接天
 下之人、有所資之、有所益之、先生於才於
 氣、可謂英而華精而粹也、其本立而其用
 廣矣、故平生所著、出于性情之正、不求藻
 飾之巧、下筆不休、長短互體、動作有文、喜
 罵成章、不淺而深、不暗而明、不艱而安、不
 靡而實、

錦天山房詩話、鷺峯兄弟、以名父之子、志
 氣高爽、學問淵博、其詩皆雄邁縱恣、掉脫
 羈束、未易軒輊也、近世噉名之徒、動云鄙
 俚不足觀、蓋厭其浩瀚、未嘗窺全豹者之
 論爾、今就鷺峯讀耕兩集、芟其繁蕪、擷其
 菁英、庶幾乎以間執輕薄子之口矣、其他

錦天山房詩話上冊

之れに資する所あり、之れを益する所あり、先生の才
 に於ける氣に於ける、英にして華、精にして粹と謂ふ
 可し、其本立ちて其用廣し、故に平生著す所、性情の正
 しきに出で、藻飾の巧を求めず、筆を下して休まず、長
 短體を互にし、動作文あり、喜罵章を成す、淺からずし
 て深く、暗からずして明に、艱ならずして安く、靡なら
 ずして實なり。

錦天山房詩話、鷺峯兄弟、名父の子を以て、志氣高爽、學
 問淵博、其詩皆雄邁縱恣にして、羈束を掉脱し、未だ軒
 輊し易からず、近世噉名の徒、動もすれば鄙俚、觀るに
 足らずと云ふ、蓋其浩瀚を厭ふて、未だ嘗て全豹を窺
 はざる者の論のみ、今鷺峯讀耕兩集に就き、其繁蕪を
 芟り、其菁英を擷く、庶幾以て輕薄子の口を間執せん、
 其他鷺峯五言に、朝鮮洋溟公に呈するに、魚は縦にす
 千尋の壑、鵬は飛ぶ萬里程、源尙舍忠房淺草別業に、水

○按雁迷
言、句、七
下、宜、移

鷲峯五言、呈朝鮮淨溪公、魚縱千尋壑、鵬
飛萬里程、源尙舍忠房、淺草別業、水混太
虛瀾、舟追斜照移、途中作、晴雲追我至、野
鳥見人驚、芝濱勝集、林疎奇石出、鐘遠夕
陽收、雁迷寒雨、寒影失、先後雲間亂、弟兄、
次、三浦乘賢客舍即興韻、一鞭鞍背雪、三
尺劍頭霜、孟夏七日遊、建丹牧染井別墅、
賦、卽景、草分平野綠、楓借晚秋紅、送、林泰
歸省京師、夢覺西堂草、望、迷東阜花、忍闕
春遊呈、勿齋藤君、井不投、陳轉、園猶停卻
車、花下吟、畫明星萬點、日暖雪千株、七言、
和金池老禪、梅樹影移清淺水、松堂雨對
寂寥燈、詠、雪示讀耕子、不日、白乎半庭光、
可謂、明也、一夜影、和、虎林西堂琵琶湖韻、

は太虚に混じて瀾く、舟は斜照を追ふて移る、途中の
作、晴雲我を追ふて至り、野鳥人を見て驚く、芝濱勝集
「林疎にして奇石出で鐘遠くして夕陽收まる」、雁は寒
雨に迷ふて寒影失し、先後雲間弟兄亂る、「三浦乘賢客
舍即興の韻に次す、一鞭鞍背の雪、三尺劍頭の霜」、孟夏
七日、建丹牧染井別墅に遊び、卽景を賦す、草は平野を
分ちて緑に、楓は晩秋を待りて紅なり、「林泰の京師に
歸省するを送る、夢は覺む西堂の草、望は迷ふ東阜の
花、忍闕春遊、勿齋藤君に呈す、井、陳轉を投ぜず、園、猶
邵車を停む、花下の吟、晝は明なり星萬點、日は暖なり
雪千株、七言に、金池老禪に和す、梅樹影は移る清淺の
水、松堂雨には對す寂寥の燈、雪を詠じて讀耕子に示
す、白きを曰はすや、半庭の光、明と謂ふべきなり、一夜
の影、虎林西堂の琵琶湖の韻に和す、燼燐光を爍らし
て畫幅を開き、夕陽影を涵して漁舟を逐ふ、中秋、千里
の金波、海嶠に通じ、上方の銀界、郊原を照らす、金立寮
阿、宮は阿房に構ふ、纒に二世、祠は殊域に存す、巳に千
年、五十川、梅菴來り、帆ふ、時運推し、移る雲の變態、擔階
竝び坐す、兩同參、櫻花晚歩、雪は紛たり、白髮三千丈、浪
は涌く、銀河一派の流、加賀羽林君に贈る、威風瀾く及

「煙黛凝光開畫幅、夕陽涵影逐漁舟、中秋千里金波通海嶠、上方銀界照郊原、金立秦祠、宮構阿房纔二世、祠存殊域已千年、五十川梅庵東訊、時運推移雲變態、檐階竝坐兩同參、櫻花晚步、雪紛白髮三千丈、浪涌銀河一派流、贈加賀羽林君、威風逼及加越能、儒派追尋濂洛闕、紅梅花下吟、花外雲飄裁彩錦、杖頭星落掛明珠、和呈藤孟幹、玉露林間飄鶴鬢、白衣衣上點烏巾、讀耕五言雜言人名體、落岑參、露色、廣野展禽聲、春孟郊、園裡芳林放絳英、山中早行、輕雲初出岫、宿鳥未離枝、次武田杏仙雅丈自京師所寄詩韻、離恨水無盡、幽情雲有期、哭伊達君、生涯雖有命、洪造似

錦天山房詩話冊上

ぶ加越能、儒派追ひ尋ね濂洛闕、紅梅花下の吟、花外雲飄りて彩錦を裁し、杖頭星落ちて明珠を掛く、藤孟幹に和呈す、玉露林間鶴鬢を飄へし、白衣衣上烏巾を點す、讀耕、五言雜言人名體、落岑露色を參へ、廣野禽聲を展ぶ、春孟郊園の裡、芳林絳英を放つ、山中早行、輕雲初めて岫を出で、宿鳥未だ枝を離れず、武田杏仙雅丈の京師より寄せらるゝ詩韻に和す、離恨水盡くるなく、幽情雲に期あり、伊達君を哭す、生涯命ありと雖、洪造情なきに似たり、登眺泉細くして溪腰を繞り、雲落ちて山足を擁す、向陽君に次韻して敬義齋藤君に贈る「忠義誠より生ず、孝情恩の爲めに使ふ、伯元中秋に次韻す、清夜偷句なければ、蒼長定めて何と謂はん、詠懷、心を寛くす何ぞ必しも酒ならん、性を寫す豈詩なからんや、金節の詠雪に次韻す、獨飢えて將に地に墮ちんとす、鶩凍りて梢を離れず、梅聖俞の雪の韻に追和す、魚潛んで喙口縮み、龍戰ふて敗隣多し、春興「勝遊約あるが如く、幽意更に他なし」雲子に示す、江瀾く

日本詩話叢書

無情、登眺、泉細繞溪、腰雲落擁山足、次韻
 向陽兄贈敬義齋藤君、忠養自誠生、孝情
 爲恩使、次韻伯元中秋、清夜倘無句、蒼旻
 定謂何、詠懷、寬心何必酒、寫性豈無詩、次
 韻金節詠雪、鴉飢將墮地、鷲凍不離梢、追
 和梅聖俞雪韻、魚潛喙口縮、龍戰敗鱗多、
 春興、勝遊如有約、幽意更無他、示雲子、江
 澗漁翁聚、雲晴雁陣隨、七言、詠懷、炊稀厭
 見塵生飯、財匱愁無天、雨珠、竊月念六日
 赴尙舍奉御石川君之亭、芳草旣添塘上
 綠、殘花猶發樹頭紅、庭際牡丹盛發、細雨
 滴瀝、數枝國色受餘潤、便是楊妃賜浴時、
 悼正意、筆評邪正臨洙水、藥辨君臣汲上
 池、寄石丈山、退廬風靜讀書處、淨几雲飛

三二

して漁翁聚まり、雲晴れて雁陣隨ふ、七言、詠懷、炊稀に
 して塵の飯に生ずるを見るを厭ふ、財匱ふして天の珠
 を雨らす無きを愁ふ、竊月念六日、尙舍に赴き、石川君
 之の亭に奉御す、芳草旣に塘上の緑を添へ、殘花猶樹
 頭の紅を發す、庭際牡丹盛に發き細雨滴瀝たり、數枝
 の國色餘潤を受く、便ち是れ楊妃浴を賜ふ時、正意を
 悼む、筆は邪正を評して洙水に臨み、藥は君臣を辨じ
 て上池に汲む、石丈山に寄す、退廬風は靜なり讀書の
 處、淨几雲は飛ぶ筆を揮ふ時、杜鵑、飛來萬里雲間の路、
 啼いて三更月下の枝に在り、口を減し須く逃るべし金
 彈の害、何ぞ求めん辛苦歸期を勸むるを、園外の松聲
 「盤枝露重し四時の色、直幹風高し十里の聲、藤廣賢君
 雜日試毫の芳韻に和す、唯、鄉書を待つ去雁に憑る、先
 づ斗酒を携へて嬌鶯を訪ふ、感懷、枯腸須く拄ふべし
 五千卷、山口何ぞ求めん三百盃、端午の雨、等閑にす幕
 地湘江の雨、洗はず懷沙千歳の冤、八月六日淺草河上
 舟中卽事、志和養は冷なり苔溪の浪、魯望牀は涼し笠

揮筆時、杜鵑、飛來萬里雲間路、啼在三更
 月下枝、緘口須逃金罈害、何求辛苦勸歸
 期、園外松聲、盤枝露重四時色、直幹風高
 十里聲、和藤廣賢君雜日試毫之芳韻、唯
 待鄉書憑去雁、先攜斗酒訪嬌鶯、感懷、枯
 腸須拄五千卷、饒口何求三百盃、端午雨
 等閑驀地湘江雨、不洗懷沙千歲冤、八月
 六日淺草河上舟中卽事、志和菱冷荇溪
 浪、魯望牀涼笠澤雲、遊上野別築、木樨花
 明含宿露、梧桐葉動向朝陽、山家、閑人獨
 坐雲窓下、不識塵埃滿九衢、雪中梅竹、阿
 猷只怕千竿折、君復先吟半樹纔、苦熱、唯
 有寒蟬能耐暑、風梢露葉盡情啼、寄石丈
 山、相依須是擇仁里、忍渴何爲飲盜泉、舟

錦天山房詩話上冊

澤の雲、上野別築に遊ぶ、木樨花明に宿夢を含み、梧桐
 葉動いて朝陽に向ふ、山家、閑人獨坐す雪窓の下、織ら
 す塵埃の九衢に滿つるを、雪中梅竹、阿猷只怕る千竿
 折るゝを、君復先づ吟す半樹纔に、苦熱、唯、寒蟬の能
 く暑に耐ふる有り、風梢露葉情を盡くして啼く、石丈
 山に寄す、依を相る須く是れ仁里を擇ぶべし、渴を忍
 ぶ何爲れぞ盜泉を飲まん、舟中秋景、舒兔浪を穿つて
 行々亂れ、旅雁雲を衝いて陳々連る、西場村、寒露碎く
 る時霜氣早く、世塵遠き處野情多し、昴々、凄涼たり燕
 子樓中の月、猶遊人の涙を帯びて看るあり、疊山北行
 の詩に次韻す、鶴翼排摩して九霄瀾く、鴻毛葉擲して
 一身輕し、金節の春日閑坐の詩韻に和す、陽和醴郁酒
 に關するに非ず、太藤正聲何ぞ琴を假らん、二月二十
 六日、金節の竹洞に遊ぶ、晚來向陽子一律を寄せらる、
 乃卒に之れを和す、千年の古道琴書あり、一座の風流

中秋景、舒卷穿浪行行亂、旅雁衝雲陳陳、
 連、西場村、寒露碎時霜氣早、世塵遠處野
 情多、盼盼、凄凉燕子樓中月、猶有遊人帶
 淚看、次韻疊山北行詩、鶴翼排摩九霄澗、
 鴻毛棄擲一身輕、和金節春日閑坐詩韻、
 「陽和韻郁弄關酒、太蕪正聲何假琴、二月
 二十六日遊金節竹洞、晚來向陽子被寄、
 一律乃卒和之、千年古道琴書在、一座風
 流詩酒俱、別墅既月、雲缺廣寒宮裡影、秋
 疎武野莽中煙、呈朝鮮螺山居士、千年高
 挂雞林月、萬里遙傳鯤壑風、皆佳句也、惜
 夫體段雖具、烹煉未至、故鄙言累句、層見
 錯出、瓊瑜不相掩、若加以細心鍛鍊、則雖
 與古作者竝駕而馳、可也。

三四

詩酒俱にす、別墅に月を翫ぶ、雲は缺く廣寒宮裡の影、
 秋は疎なり武野莽中の煙、朝鮮螺山居士に呈す、千年
 高く挂く雞林の月、萬里遙に傳ふ鯤壑の風、と、皆佳句
 なり、惜いかな體段具はれりと雖、烹煉未だ至らず、故
 に鄙言累句層見錯出し、瓊瑜相掩はず、若し加ふるに
 細心鍛鍊を以てせば、則古作者と駕を並べて馳すと
 雖、可なり。

林靖卷七

字彥復、初名守勝、字子文、稱右兵衛、又稱右近、景陶、函三、考槃、邁、讀耕齋、剛訥子、欽哉、享靜慮、皆其別號也、羅山、季子、幼而穎悟、一覽輒誦、性高尚、不樂仕官、叔父永喜卒、無子、官欲以靖爲後、賜其采地、執政數諭之、固辭不受、正保三年、命賜祿、祝髮號春德、非其素志、父兄強之、不得已而應命、明曆元年、韓使來聘、靖與李石湖會、唱和至十數篇、石湖歎其敏捷、曰、我不及子、爲子須避一頭地、二年、任法眼、三年三月卒、年三十八歲、私諡貞毅、靖博學洽聞、多所纂述、讀耕齋集六十卷、行於世。

錦天山房詩話、函三、素性高尚、不樂仕官、

錦天山房詩話上冊

林靖卷七

字は彦復、初の名は守勝、字は子文、右兵衛と稱す、又、右近と稱す、景陶、函三、考槃、邁、讀耕齋、剛訥子、欽哉、享靜慮は、皆其別號なり、羅山の季子なり、幼にして穎悟、一覽輒ち誦す、性高尚、仕官を樂はず、叔父永喜卒して子なし、官、靖を以て後と爲し、其采地を賜はらんと欲し、執政數、之れを諭す、固辭して受けず、正保三年、命じて祿を賜ふ、祝髮して春德と號す、其の素志に非ず、父兄之れを強ひ、已むを得ずして命に應ず、明曆元年、韓使來聘す、靖、李石湖と會し、唱和十數篇に至る、石湖、其敏捷を歎じて曰、我れ子に及はず、子の爲めに一頭地を避くべしと、二年、法眼に任ず、三年三月卒す、年三十八歲、私に貞毅と諡す、靖、博學洽聞、纂述する所多し、讀耕齋集六十卷世に行はる。

錦天山房詩話、函三、素性高尚、仕官を樂はず、且、當世儒

且惡當世儒者皆剃髮、而外逼朝命、內礙父兄、不得遂其志、鬱鬱而沒、故憂時嫉俗之旨、間發乎言詠、率多悲壯激越之音、百世之下、讀其詩而悲其意矣、人皆以官爲喜、今獨以爲憂、世之貪進患失者、視此亦可以媿死矣、嗚呼、可謂卓立獨行之士矣哉。

林憲卷八

字孟著、一名春信、號勉亭、又號梅花洞主、鷺峯長子、幼而聰慧、祖父羅山甚奇愛之、十一歲知賦詩、徧通四書六經、明曆元年、朝鮮信使來聘、羅山往會、憲請從行、卽席賦一絕、以示李明彬、明彬大嘆異矣、羅山語人曰、嫡孫年僅十三、其所讀書、比我幼

者之皆剃髮するを惡む、而して外、朝命に逼られ、内、父兄に礙へられ、其志を遂ぐることを得ず、鬱々として沒す、故に時を憂ひ俗を嫉むの旨、間、言詠に發す、率ね悲壯激越の音多し、百世の下、其詩を讀みて其意を悲む、人皆官を以て喜と爲す、今獨以て憂と爲す、世の進むを貪り失ふを悲む者、此れを觀ば亦以て媿死す可し、嗚呼、卓立獨行之士と謂ふ可きかな。

林憲卷八

字は孟著、一名は春信、勉亭と號す、又、梅花洞主と號す、鷺峯の長子なり、幼にして聰慧、祖父羅山甚之れを奇愛す、十一歳にして詩を賦することを知り、徧く四書六經に通ず、明曆元年、朝鮮の信使來聘す、羅山往いて會す、憲從ひ行かんことを請ひ、卽席一絶を賦し、以て李明彬に示す、明彬大に嘆異す、羅山、人に語けて曰、嫡孫、年僅に十三、其の讀む所の書、我が幼時に比すれば、則ち十倍なり、我家の主器と謂ふべしと、明年始め

時、則殆十倍焉、可謂我家之主器也、明年始謁大君、既長學益進、寬文二年、賜學料若干、明年賜宅地、鷲峯修本朝通鑑、懇與有力焉、六年八月病卒、年二十四、私諡、穎定、所著梅洞集四十卷。

林懋直民曰、亡兄梅洞、自幼有岐嶷之譽、及長、顯主器之名、幹父之靈、繩祖之武、於是顯祖之道、彌爲大矣、性嗜著述、往往吟風弄月、遣興抒情、其長其短、開口成章、漢魏質直、六朝華美、唐宋大家、無不窺測焉、飄逸警策、清雅精緻、眞率豪縱、綺靡對偶、自然閑適等之體、各應時得、其妙也、至其神速、則或刻燭立成、或對客揮毫也、至其鍛鍊、則旬煉月煉、或擁衾腐毫也、有不稱

て大君に謁す、既に長じて學益進む、寬文二年、學料若干を賜ふ、明年宅地を賜ふ、鷲峯の本朝通鑑を修するや懇與りて力あり、六年八月病んで卒す、年二十四、私に穎定と諡す、著す所梅洞集四十卷あり。

林懋直民曰、亡兄梅洞、幼より岐嶷の譽あり、長するに及んで主器の名を顯し、父の靈を幹し、祖の武を繩ぐ、是に於て祖を顯すの道彌大と爲す、性嗜著述を嗜み、往々風に吟じ月を弄し、興を遣り情を抒ふ、其長其短、口を開き章を成す、漢魏の質直、六朝の華美、唐宋の大家、窺測せざるはなし、飄逸警策、清雅精緻、眞率豪縱、綺靡對偶、自然閑適等の體、各、時に應じて其妙を得たり、其神速に至りては、則或は燭を刻して立どころに成る、或は客に對して毫を揮ふなり、其鍛鍊するに至りては、即旬に煉り月に煉る、或は衾を擁し毫を腐するなり、其意に稱はざる者あれば、則削りて之れを去る、故に其格律日に新に月に盛に、當時其秀逸に推服し、皆之れを師範とす。

其意者、則削而去之、故其格律、日新月盛、當時推服其秀逸、皆師範之。

野節宜卿曰、君生而骨秀聰悟、長而神奇、該博夙辨、三墳五典之義、粗通百家諸子之言、聞者以爲神童、觀者以爲偉器、鷄林信使稱、犀角之豐盈、翰苑洪業、彰鳳毛之美質、其爲人也、溫和春風、杲如冬日、清如冰壺、肅如玉山、居家有孝弟、接人有仁愛、奉上之誠、盡百鍊於寸丹、惜日之勤、競分陰於尺璧、於是負笈之生、自成桃李之蹊、侍席之徒、得入芝蘭之室、故學術日興、教育月盛、人皆仰其德、懷其化、而謂都郁文彩、該日東之四道、煌煌德輝、類斗南之一人、固是希世之傑也、君平日有行之餘力、

野節宜卿曰、君生れて骨秀聰悟、長じて神奇該博、夙に三墳五典の義を辨じ、粗に百家諸子の言に通ず、聞く者以て神童と爲し、觀る者以て偉器と爲す、雞林の信伊稱す、犀角の豐盈、翰苑の洪業、鳳毛の美質を彰すと、其人と爲りや、溫和春風、杲として冬日の如く、清きこと冰壺の如く、肅として玉山の如し、家に居るに孝弟あり、人に接するに仁愛あり、上に奉ずるの誠は、百鍊を寸丹に盡し、日を惜むの勤は、分陰を尺璧に競ふ、是に於て笈を負ふの生は、自ら桃李の蹊を成し、席に待するの徒は、芝蘭の室に入ることを得たり、故に學術日に興り、教育月に盛にして、人皆其德を仰ぎ、其化に懷く、而して謂ふ都々たる文彩は日東の四道を該し、煌々たる德輝は斗南の一人に類す、固に是れ希世の傑なり、君、平日行の餘力、官の休暇あれば、則、清風に嘯き、朗月に吟じ、岡花に坐し、窓雪に對す、幽邃の境、寂寞の濱、以て四時の佳興を寓し、以て六義の遺風を臨す、其敏捷は則七步八叉を論するに足らず、其精鍊は則能

官之休暇則嘯清風、月坐岡花、對窓雪、幽邃之境、寂寞之濱、以寓四時之佳興、以臨六義之遺風、其敏捷則不足論、七步八又、其精鍊則能有盡千彙萬狀、故其文物多皆警策奇章、而天然之妙、洞達之識、炳如矣。

錦天山房詩話、梅洞少服家庭之訓、耳染目濡、自能斐然成章、況雋逸之才、辭旨清麗、直欲超父祖而上焉、惜恨於年耳、鳳岡所撰、穎定事實、載梅洞病中譚話、唯談學業、無一言及他、往往得句、曰、忽從落葉山中去、恰似全椒山上行、曰、萬綠叢中一老松、曰、風騒壇上一好物、曰、月似趙家傳國璧、曰、新鴻響曙雲、又唱曰、似拙不拙、似弱

く千彙萬狀を盡くすあり、故に其文物多くは皆警策奇章、而して天然の妙、洞達の識、炳如たり。

錦天山房詩話、梅洞少ふして家庭の訓に服し、耳染目濡して、自ら能く斐然として章を成す、況や雋逸の才、辭旨清麗、直に父祖を超えて上らんと欲す、惜むらくは年に限らるるのみ、鳳岡の撰する所の穎定事實に載す、梅洞病中の譚話、唯、學業を談じて、一言の他に及ぶなし、往々句を得たり、曰、忽ち落葉に従つて山中に去る、恰似たり全椒山上行くに、曰、萬綠叢中の一老松、曰、風騒壇上の一好物、曰、月は趙家傳國の璧に似たり、曰、新鴻曙雲に響く、と又唱へて曰、拙に似て拙ならず、弱に似て弱ならず、と、其餘猶多し、野竹洞私談議に載する所、畧同じ。

不弱其餘猶多野竹洞私詮議所載略同。

林憲

字直民一名信篤號鳳岡又號整字春齋
第二子初稱春常爲大藏卿法印承襲父
祖業通博多識爲一代碩儒爲人豪俊雄
邁當天和新政之時夙夜在公殆無虛日
元祿中文教大熙家讀戶誦初羅山剋先
聖祠於忍岡鑿奉旨移之湯島臺其經營
規畫更加弘麗大君親書大成殿三字揭
之又賜宅地于郭內以便朝參先是邦俗
儒者皆禿其顛不列士林自爲制外之徒
此戰國之類俗未及革也懸以爲儒之道
卽人之道人之外非有儒之道而斥爲制
外者可謂敵俗矣時大君崇儒術蒙命種

林憲

字は直民、一名は信篤、鳳岡と號す、又、整字と號す、
春齋の第二子なり、初の春常と稱す、大藏卿法印と爲
り、父祖の業を承襲し、通博多識、一代の碩儒たり、人と
爲り豪俊雄邁、天和の新政の時に當り、夙夜、公に在り
て、殆ど虚日なし、元祿中、文教大に熙まり、家讀戶誦す、
初め羅山、先聖の祠を忍岡に搦む、憲旨を奉じて、之れ
を湯島臺に移す、其經營規畫、更に弘麗を加ふ、大君親
ら大成殿の三字を書して之れを掲ぐ、又宅地を郭内に
賜ひ、以て朝參に便にす、是より先き邦俗儒者は皆其
顛を禿にし、士林に列せず、自して制外の徒と爲す、此
れ戰國の類俗、未だ革むるに及ばざるなり、懸以爲へ
らく儒の道は卽人の道、人の外に、儒の道あるに非ず、
而して斥けて制外と爲す者、敵俗と謂ふ可し、時に大
君儒術を崇ぶ、命を蒙り髮を種え、大學の頭に任ず、從
五位下に敘し、大内記に轉じ、凡、五君に歷事し、前後六
十年、元祿享保、最信任せらる、正徳中に方り、新井白石
事を用ふ、議頗諳はず、數、致仕を乞ふ、而して尤され

髮任大學頭、叙從五位下、轉大内記、凡歷事五君、前後六十年、元祿享保最被信任、方正德中、新井白石用事、議頗不諧、數乞致仕、而不允、以其名望之隆也、其有所專掌者三、曰官爵、曰譜系、曰喪服、此係事體之最大者、其餘機務無不與聞、年八十一、致仕、後八年以病沒、實享保十七年六月朔也、私諡正獻、所著鳳岡全集百二十卷、行于世。

參議正三位藤原宗家曰、鳳岡服膺家訓、顯揚先業、其學以經術爲本、而博涉群籍、尤能屬文、而言論風旨、發揮施設、皆出於其學、爵祿優加、名德益邵、蔚然爲士大夫所矜式、負笈踵門者、數百人、及其老也、淡

ず、其の名望の隆なるを以てたり、其專掌する所の者三あり、曰く、官爵、曰く、譜系、曰く、喪服、此れ事體の最大に係る者、其餘機務與り聞かざるなし、年八十一にして致仕す、後八年、病を以て沒す、實に享保十七年六月朔なり、私に正獻と諡す、著す所、鳳岡全集百二十卷、世に行はる。

參議正三位藤原宗家曰、鳳岡家訓を服膺し、先業を顯揚す、其學經術を以て本と爲す、而して博く群籍に涉り、尤能く文を屬す、而して言論風旨、發揮施設、皆其學に出づ、爵祿優に加はり、名德益、邵し、蔚然として士大夫の矜式する所と爲る、笈を負ひ門に踵る者、數百人、其老に及ぶや、淡退して自ら將ゆ、環堵の室、圖史を左右にし、坡閣辭對し、此れを以て娛と爲す、其學者に

退自將、環堵之室、左右圖書、披閱讎對、以此爲娛、其接學者、諄諄以答問、與賓客談論、援據經史、商榷古今、人未見有倦色、吁偉哉。

林信充士儔曰、我先考正獻先生、爲人剛直、有大志、嗣父祖之遺業、而研覃儒經、遇風雲之盛會、而議定政術、然不挾權勢、不貴阿順、仕於四主、及今朝、召對有常、顧問不已、祿爵之崇、聲稱之盛、出入內外者、七十餘年、皤然眉髮、在就室之間、遂乞骸骨、而告存、享壽八十有九、不亦非常之人乎、天之和之初、常憲殿下深思、使天下之人游泳於道德仁義之澤、流國華於千萬無窮之年、先生日夕在御、盡言無隱、執聖經而

接する、諄々として以て答問す、賓客と談論す、經史を援據し、古今を商榷し、人未だ倦色あるを見ず、吁偉なるかな。

林信充士儔曰、我が先考正獻先生、人と爲り剛直、大志あり、父祖の遺業を嗣ぎ、而して儒經を研覃し、風雲の盛會に遇ひ、而して政術を議定す、然も權勢を挾まず、阿順を貴ばず、四主に仕へて今の朝に及ぶ、召對常あり、顧問已まず、祿爵の崇聲稱の盛、内外に出入する者、七十餘年、皤然たる眉髮、就室の間に在り、遂に骸骨を乞ひ、而して告存す、享壽八十有九、亦非常の人に非ずや、天和の初め、常憲殿下深く、天下の人をして、道德仁義の澤に游泳し、國華を千萬無窮の年に流さしめんことを思ふ、先生日夕御に在り、盡言して隱すなし、聖經を執りて其道を正し、格言を納れて、其明を導く、數年の後、庶事勃興し、百僚各競ひ、天下の權、攬りて人主に在り、其の終に窮郷極地と雖、人々書冊を挾み、其の非僻の心、孝悌忠信の言に挫せざる能はざらしむるに

正其道、納格言而導其明、數年之後、庶事物興、百僚各競天下之權、攬在人主、其終至使雖窮鄉極地、人人挾書冊、其非僻之心不能不挫於孝悌忠信之言也、中古道喪文弊、異端爭起、儒人雍髮逃乎浮屠、其弊未除、滔滔皆然、先生獨束髮而賜爵級、於是乎天下青衿靡然法之、既而先生立議、移夫子之廟於昌平、阪、礪鼎一新、殿下三臨學也、乾乾宵旰之暇、親講周易、先生進講章者、凡八年、奉命講經前殿、百司聚聽者、凡十七年、先生之門生滿乎天下、升公者十有餘人、散仕諸侯者數十百人、其餘豪傑竝起、翕然成風、天下闡關詩書者、蓋至今四十餘年矣、孰謂之非非常之事

錦天山房詩話上冊

至る、中古道喪び文弊れ、異端争ひ起り、儒人雍髮して浮屠に逃る、其弊未だ除かず、滔々皆然り、先生、獨、束髮して爵級を賜はる、是に於てか、天下の青衿、靡然として之れに法とる、既にして先生議を立て、夫子の廟を昌平阪に移し、礪鼎一新す、殿下三び學に臨み、乾々、宵旰の暇、親しく周易を講ず、先生、講章を進むる者、凡そ八年、命を奉じて經を前殿に講ず、百司聚まり聽く者、凡十七年、先生の門生天下に滿つ、公に升る者十有餘人、散じて諸侯に仕ふる者數十百人、其餘豪傑竝び起り、翕然として風を成す、天下詩書を闡關する者、蓋今に至るまで四十餘年なり、孰れか之れを非常の事功に非すと謂はんや、四方園亭畫器、其品題を求むる者、日に門に輻輳す、先生貴賤を擇ばず、筆を揮ふて流るゝが如し、燭を乗り漏を盡すと雖、力尙支えず、故に其辭往々眞に任ふる者あり、是れ未だ草野閑居操觚の子の爲めに道ふ可らざるなり。

功耶、四方園亭畫器、求其品題者、日輻輳乎門、先生不釋貴賤、揮筆如流、雖秉燭盡漏、力尙不支、故其辭往往有「任真者、是未可爲草野閑居操觚之子道也」

林愿鳳谷曰、我祖鳳岡先生、其性剛直、爲人明敏、學繼父祖之業、澍洒之淵源、覃志典籍、潛思六經、徧窮諸子百家之言、長於清穆之世、落於醇和之澤、先生言聞於上、教及天下、先生於文辭、未嘗無其用、豈其徒哉、而其體尙辭達、蓋出乎不獲已也、

井通照叔曰、羅山鷲峯二公、創業金馬、而及至、整宇先生、世之君子、知崇庠序、文辭祭如也、吾黨之甚盛、益興自此始、是故天下豪俊爭起、望之若屯雲、羸膝履屨、負書

林愿鳳谷曰、我祖鳳岡先生、其性剛直、人と爲り明敏、學父祖の業を繼ぎ、澍洒の淵源に遡る、志を典籍に覃つし、思を六經に潛む、徧く諸子百家の言を窮む、清穆の世に長じ、醇和の澤に浴す、先生言、上に聞へ、教、天下に及ぶ、先生、辭文に於て未だ嘗て其用なくんば、あらず、豈其れ徒ならんや、而して其體、辭達を尙ぶ、蓋、已むを獲ざるに出づるなり。

井通照叔曰、羅山鷲峯二公、業を金馬に創め、而して整宇先生に至るに及んで、世の君子、庠序を崇むるを知り、文辭祭如たり、吾黨の甚盛にして益、興るは此より始まる、是の故に天下の豪俊争ひ起り、之れを望むこと屯雲の若し、膝を羸し、躡を履み、書を負ひ、養を擔ひ、羸汗交、流れ、喘息喉に薄り、門に踵りて業を受くる

擔囊、鹽汗交流、喘息薄喉、踵門受業者、以千數、其數千中有藉日月之末光、而致身青雲之上者、或大小諸侯、厚幣召之、以爲賓師、亦不可勝記。

厚善公道曰、鳳岡一夕侍大君、有命曰、吾未見汝作詩、試賦蠟燭、鳳岡應聲賦之曰、玉殿沈沈冬夜長、九枝繼晷影燐煌、寒花添得德輝美、一抹紅雲透建章、鳳岡素不屑文藻、而思致敏捷、其才可槩見。

林愆卷九

一名信充、字士禱、一字子厚、號快堂、又號龍洞、榴洞、復軒、翼齋、彩雲峰、所居曰斜好館、初名七三郎、整字第二子、元祿六年始謁常憲大君、寶永元年試舉列、亞侍中、又

者千を以て數ふ、其數千中に、日月の末光を藉り、而して身を青雲の上に致す者あり、は大小諸侯幣を厚くし、之れを召し、以て賓師と爲すもの、亦勝けて記すべからず。

原善公道曰、鳳岡一夕大君に侍す、命あり曰く、吾未だ汝の詩を作るを見ず、試に蠟燭を賦せよと、鳳岡聲に應じて、之れを賦して曰く、玉殿沈々冬夜長し、九枝晷を繼いで影燐煌、寒花添へ得たり、德輝の美、一抹の紅雲建章を透る、と鳳岡素とより文藻を屑とせず、而して思致敏捷、其才、槩見すべし。

林愆卷九

一名は信充、字は士禱、一の字は子厚、快堂と號す、又龍洞、榴洞、復軒、翼齋、彩雲峯と號す、居る所を斜好館と曰ふ、初めの名は七三郎、整字の第二子なり、元祿六年、始めて常憲大君に謁す、寶永元年、試舉せられて亞侍中に列す、又爲に職を博士に奉ず、五年、經筵講官と爲る、享保八年、大學の頭に任じ、寶曆三年侍讀日久し

爲奉職博士、五年爲經筵講官、享保八年任大學頭、寶曆三年以侍讀日久、進班於親軍元帥之次、任民部少輔、七年致仕、八年十一月十一日病卒、年七十八、私諡正懿、凡歷事五朝、前後奉命、撰進武家補任行賞錄、遷移任槐記等書。

林憲卷十

字翼成、初名信明、後改信如、字利成、幼名源二郎、後改又右衛門、號葛廬、又號孚軒、又號谷飲、本姓高麗、法眼春澤第二子、晉軒無子、養爲子、因冒林氏、稱春益、延寶四年襲職、元祿四年常憲大君、親指便殿畫戶、使賦詩、大君賞其敏捷、手賜佩具、未幾爲御小納戶、六年轉御小性、十年復爲儒

きを以て、班を親軍元帥の次に進め、民部少輔に任じ、七年致仕し、八年十一月十一日、病んで卒す、年七十八、私に正懿と諡す、凡そ五朝に歷事し、前後命を奉じ、撰して武家補任、行賞錄、遷移任槐記等の書を述む。

林憲卷十

字は翼成、初めの名は信明、後信如と改む、字は利成、幼名は源二郎、後又右衛門と改む、葛廬と號す、又孚軒と號し、又谷飲と號す、本姓は高麗、法眼春澤の第二子なり、晉軒、子なし、養ふて子と爲す、因て林氏を冒す、春益と稱す、延寶四年、職を襲ぎ、元祿四年、常憲大君親しく、便殿の畫戶を指して詩を賦せしむ、大君其敏捷を賞し、手づから佩具を賜ふ、未だ幾くならずして、御小納戶と爲る、六年御小性に轉す、十年、復、儒官と爲る、享保十四年致仕す、凡五世に歷事す、元祿享保中、數、命を奉じて書を便殿に説く、十九年九月十五日卒す、年六

宣享保十四年致仕、凡歷事五世、元祿享保中、數奉命、說書於便殿、十九年九月十五日卒、年六十四、諡溫謙。

錦天山房詩話、葛廬元祿中獲罪、竄于河越、嘗賦元日憶江戶詩、辭旨悽惻、或得之呈諸常憲大君、大君觀之甚憫焉、即日召還復本位、述齋林公嘗爲予說之、嗚呼葛廬一飯不忘君之誠、與大君愛才之德、俱足照耀千古、寔昭代之盛事、藝苑之佳話、而世罕識者、故爲表而出之。

林懋

字伯虞、一名一亮、一字勝文、幼名又次郎、後改式部、又稱字兵衛、號松洞、又號菊溪、葛廬長子、享保十二年、父說書於昌平

四、溫謙と諡す。

錦天山房詩話、葛廬元祿中に罪を獲て河越に竄せらる、嘗て元日に江戸を憶ふの詩を賦す、辭旨悽惻、或ひ之れを得て、諸を常憲大君に呈す、大君之れを觀て甚憫み、即日召し還して本位に復す、述齋林公嘗て予が爲に之れを説けり、嗚呼、葛廬一飯にも君を忘れざるの誠と、大君、才を愛するの徳と、俱に千古に照耀するに足る、寔に昭代の盛事、藝苑の佳話なり、而して世に識る者罕なり、故に爲に表して之れを出だす。

林懋

字は協虞、一名は一亮、一の字は勝文、幼名は又次郎、後、式部と改む、又字兵衛と稱す、松洞と號す、又菊溪と號す、葛廬の長子なり、享保十二年、父に代りて書を昌平學に説く、十四年、國學講官に任ず、寶曆七年、政體備

日本詩話叢書

四八

學十四年任國學講官、寶曆七年轉政廳儒官、每國家有慶事、輒獻詩、賜時服者凡七度、天明元年卒、年七十五、諡齊莊。

林愿

一名信言、字子恭、初名信武、一字士雅、初稱泰助、後改内記、號鳳谷、所居曰松風亭、龍洞長子、享保十八年、始謁有德大君、同父陞經筵、班比六位、寬保中有大事于祖廟、鳳谷從父入對、進羅山所撰儀注、大君喜曰、有此書、不恤不濟、及行禮、使鳳谷押班、故事六位不押班、此出于特旨、欲復草儀注也、延享三十年、韓使來聘、任圖書頭、接待韓使、寶曆三年、任大學頭、尋兼孝恭世子侍讀、安永二年十一月二十八日卒、

官に轉ず、國家慶事ある毎に、輒詩を獻じ、時服を賜ふ者、凡そ七度、天明元年に卒す、年七十五、齊莊と諡す。

林愿

一に名は信言、字は子恭、初めの名は信武、一の字は士雅、初め泰助と稱す、後、内記と改む、鳳谷と號す、居る所を松風亭と曰ふ、龍洞の長子なり、享保十八年、始めて有德大君に謁す、父と同じく經筵に陞り、班、六位に比す、寬保中祖廟に大事あり、鳳谷、父に従ひ入對し、羅山の撰する所の儀注を進む、大君喜んで曰、此の書あれば濟らざるを恤へずと、禮を行ふに及んで、鳳谷をして押班せしむ、故事に六位は押班せず、此れ特旨に出づ、復た儀注を草せしめんと欲するなり、延享卅年、韓使來聘す、圖書の頭に任じ、韓使に接待す、寶曆三年、大學の頭に任ず、尋いで孝恭世子の侍讀を兼ぬ、安永二年十一月二十八日卒す、年五十三、私に正貞と諡す、著に松風稿十五卷あり。

年五十三、私諡正貞、著有松風稿十五卷。

林愨

一名信慶、字子節、號龍潭、稱又四郎、後稱內記、鳳谷長子、寶曆十年試補講官、十二年叙從五位下、任圖書頭、十三年賜學俸三百俵、明和元年卒、年二十八歲、私諡孝慎、所著有退朝日記、詩文集若干卷。

林信有

字子功、號桃蹊、幼名仙助、後改百助、退省第三子、寬保三年襲父祿、會鳳谷卒、其嗣尙幼、官命爲經筵講、攝行祭酒事、進班比六品、爲孝恭世子侍讀、未及進講、世子薨、今大君爲儲君、乃爲侍讀、數賜黃金時服、以勞之、天明五年病卒、年五十、私諡紹定。

錦天山房詩話上冊

林愨

一名は信慶、字は子節、龍潭と號す、又四郎と稱す、後内記と稱す、鳳谷の長子なり、寶曆十年、講官に試補す、十二年、從五位下に敘し、圖書頭に任ず、十三年、學俸三百俵を賜ふ、明和元年卒す、年二十八歲、私に孝悌と諡す、著す所、退朝日記、詩文集若干卷あり。

林信有

字は子功、桃蹊と號す、幼名は仙助、後、百助と改む、退省の第三子なり、寬保三年、父の祿を襲ぐ、會、鳳谷卒す、其嗣尙幼なり、官命じて經筵の講を爲さしめ、祭酒の事を攝行せしむ、班を進めて六品に比す、孝恭世子の侍讀と爲り、未だ進講に及ばずして世子薨す、今の大君の儲君たるや、乃ち、侍讀と爲る、數、黃金時服を賜ひ、以て之れを勞す、天明五年病んで卒す、年五十、私に紹定と諡す。

林志

字士行、一名信敬、號錦峰、又號潤齋、能登守富田明親第二子、鳳潭無子、故養爲嗣、天明七年叙從五位下、任大學頭、寬政二年奉命、授國家世族譜、尋而命恆侍于中、四年三月病卒、年二十六歲、私諡簡順、無子、命以巖邑侯子爲嗣、卽今述齋公也。

林信隆

字大年、始名信豐、幼名彌之助、後改字兵衛、號琴山、寬政五年襲父玉洞祿、同九年爲腰物番、其明年以致仕、同十二年受學問考試、有恩賜、文化四年九月七日卒、年三十八、私諡端恪、無子、以述齋公第六男輝爲嗣、卽今秘書監林式部者也。

林志

字は士行、一名は信敬、錦峯と號す、又、潤齋と號す、能登守富田明親の第二子なり、潭鳳子なし、故に養ひて嗣と爲す、天明七年、從五位下に敘し、大學の頭に任ず、寬政二年命を奉じて國家世族譜を授す、尋いで命じて恆に中に侍せしむ、四年三月、病んで卒す、年二十六歲、私に簡順と諡す、子なし、命じて巖邑侯の子を以て嗣と爲す、卽ち今の述齋公なり。

林信隆

字は大年、始めの名は信豐、幼名は彌之助、後、字兵衛と改む、琴山と號す、寬政五年、父玉洞の祿を襲ぐ、同九年、腰物番と爲る、其明年、以て致仕す、同十二年學問考試を受く、恩賜あり、文化四年九月七日卒す、年三十八、私に端恪と諡す、子なし、述齋公の第六男輝を以て嗣と爲す、卽ち今の秘書監林式部といふ者なり。

石川四卷十一

初名重之、字丈山、小字孫介、後稱嘉右衛門、又稱左親衛、六六山人、四明山人、凹凸寨、大拙、烏鱗、山木、山材、藪里、東溪、三足、皆其別號也、三河人家世仕大府、遠祖、祖正信、戰死于長湫、父信足亦以勇聞、丈山幼有大志、壯勇、絕人、少仕大府、東照大君愛其篤勤、常給仕左右、後紀伊水戸二公皆請爲家臣、固辭不就、元和元年、大阪之役、從到京師、會患傷寒、病勢危篤、母自東關寄書曰、吾家世仕幕下、屢立大功、是役也、汝無非常之功、則不可再見吾也、丈山使人讀之、感泣奮起、輿而行、乘曉獨竊出營、先登身親搏戰、獲甲首三級、然以其犯令

石川四卷十一

初の名は重之、字は丈山、小字は孫介、後、嘉右衛門と稱す、又、左親衛と稱す、六々山人、四明山人、凹凸寨、烏鱗、山木、山材、藪里、東溪、三足は、皆其別號なり、三河の人、家世、大府の遠祖に仕ふ、祖、正信、長湫に戰死す、父信足も亦勇を以て聞ゆ、丈山幼にして大志あり、壯勇人に絶す、少くして大府に仕ふ、東照大君其篤勤なるを愛し、常に左右に給仕せしむ、後紀伊水戸二公皆家臣と爲さんと請ふ、固辭して就かず、元和元年、大阪の役、從つて京師に到る、會、傷寒を患ふ、病勢危篤なり、母、東關より書を寄せて曰、吾家世、幕下に仕へ、屢、大功を立つ、是の役や、汝、非常の功なくんば再び吾れを見るべからざるなりと、丈山人をして之れを讀ましめ、感泣奮起し、輿して行く、曉に乗じて獨竊に營を出で、先登して身親ら搏戰し、甲首三級を獲たり、然れども其の令を犯すを以て罰けらる、母老ひ家貧しきを以て、淺野侯に寄食す、母卒し服闋り、乃辭し去り、叡山の麓、一乘寺村に退隱し、翰墨を以て自ら娛しむ、初め禪を學び、後、林道春を介し、惺窩の門に學び、最、詩に長ず、朝鮮の權仗、稱して日本の李杜と爲す、後水尾帝

日本詩話叢書

見黜、以母老家貧、寄食淺野侯、母卒、服闋、乃辭去、退隱叡山麓一乘寺村、以翰墨自娛、初學禪、後介林道春、學惺窩門、最長於詩、朝鮮權佖、稱爲日本李杜也、後水尾帝聞其名、屢徵之、固辭數回、賦國雅、陳其志、帝益高其操、曰、恬退如此、朕豈可奪乎、從是又不復徵、兼工書、嘗奉勅作隸書、以獻帝、大悅、遣使賜酒肉、寬文十二年病卒、年九十、所著覆醬集二十卷、門生石克編錄、行於世、丈山不遺妻妾、無嗣子、緇徒相承、住其舊居、以致祭薦、至今不廢。

林恕之道曰、老友丈山石叟、生於參陽武人之家、事其事、暇日不廢文備、難波之役、抽群進從、甲首三級、不伐功、不預賞、而退、

五二

其名を聞き、屢之れを徵したるへども固辭すること數回にして、國雅を賦して其志を陳ぶ、帝益其操を高しとして曰く、恬退此の如し、朕豈奪ふべけんやと、是より又復徵さず、兼ねて書に工みなり、嘗て勅を奉じて隸書を作り、以て獻す、帝大に悦び、使を遣はし酒肉を賜ふ、寬文十二年病んで卒す、年九十、著す所、覆醬集二十卷、門生石克編錄し、世に行はる、丈山、妻妾を置かず、嗣子なし、緇徒相承け其舊居に住し、以て祭薦を致し、今に至るまで廢せず。

林恕之道曰、老友丈山石叟は、參陽武人の家に生れ、其事を事とするも暇日には、文備を廢せず、難波の役、群に抽んで、進んで、甲首三級を獲たり、功に伐らず、賞に預からず、而して退く、母の齡高きが爲に、遠遊祿養し、

爲母齡高、遠遊祿養、以竭其孝、及其終、天年、隱洛外之山、讀書賦詩、守貧晏如、乃知文武兼備、不迷進退、而能決斷者也、熟視叟之詩、專傲唐詩體、有雅古之風、無輕俗之弊、每句鍛鍊、每字推敲、苟不協意、則不敢示人、雖更月經年、有得於心、則改之正之、其癖耽至老不休、故其流傳人間者、往往多佳句、膾炙人口、叟曾自擇其集深藏之於參之故山、不敢銜名于世也。

松永退年昌三曰、石川丈山公者、累代官闕、奕葉將種、性嗜聖學、潛心於詩律、少時敲磻濟洞兩禪窟、求於指心傳要、後悔前非、斷棄禪說、焚滄外書、掃盡餘習、其正大之情可見矣、元和元年、東照大權現、圍攝

錦天山房詩話上册

以て其孝を竭す、其の天年を終ふるに及んで、洛外の山に隠れ、書を讀み詩を賦す、貧を守りて晏如たり、乃知る文武兼備、進退に迷はず、而して能く決斷する者なり、熟、叟の詩を視るに、専ら唐の詩體に倣ひ、雅古の風あり、輕俗の弊なし、每句鍛鍊し、每字推敲し、苟も意に協はざれば、則敢て人に示さず、月を更へ年を経ると雖、心に得るあれば、則之れを改め之れを正す、其の癖耽、老に至りて休まず、故に其人間に流傳する者、往往佳句多く、人口に膾炙す、叟曾て自ら其集を擇び、深く之れを參の故山に藏し、敢て名を世に銜はざるなり。

松永退年昌三曰、石川丈山公は、累代の官闕、奕葉の將種なり、性、聖學を嗜み、心を詩律に潛め、少時、磻濟洞兩禪窟を敲き、指心の傳要を求む、後、前非を悔ひ、禪說を斷棄し、外書を焚蕩し、餘習を掃盡せり、其正大の情見る可し、元和元年、東照大權現、攝の大城を圍むの日、石公も亦白旄麾下に屬す、先登の功、曹參に抗衡し、吳漢を塊看す、軍中獨進の勇を奮ふと雖、常に退耕の志

五三

之大城之日、石公亦屬白旄麾下、先登之功、抗衡曹參、塊看吳漢、雖奮軍中、獨進之勇、常抱退耕之志、從之避功名、不出仕、數年、明月照波、浮光躍金、則棹輕舟、高吟金聲、玉音於嚴島之絕景、晴日有暇、逍遙操觚、則飛華鱗、永記絺句繪章於彌山之頂石、凜乎出塵之標、確乎避世之想。

野三竹子苞曰、石徵君致仕之後、以詩自樂、純正圓美、高古雄渾、出類拔群、蚤淑李杜之學、而傑然爲一家之法矣、以故所吟諷、多傳遐方、日章之聲、振於京師、雖然君者、武林之名士、而元不以詩爲意、卓行絕倫、識度超遠、完養思慮、輕世肆志、悠悠巖阿、陶陶林曲、夕雪朝雨、馳其懷、梧烟柳風、

を抱き、之れに従て功名を避けて出仕せざること數年、明月波を照らし、浮光金を躍らす、則輕舟に棹し、金聲玉音を嚴島の絶景に高吟し、晴日暇あれば、逍遙操觚、則ち華鱗を飛ばし、永く絺句繪章を彌山の頂石に記す、凜乎たる出塵の標、確乎たる避世の想なり。

野三竹子苞曰、石徵君致仕の後、詩を以て自ら樂む、純正圓美、高古雄渾、類に出で群に抜く、蚤に李杜の學を淑し、而して傑然一家の法を爲す、故を以て吟諷する所、多く遠方に傳ふ、日章の聲京師に振ふ、然りと雖君は武林の名士、而して元、詩を以て意と爲さず、卓行絶倫、識度超遠、思慮を完養し、世を輕んじ、志を肆にす、巖阿に悠々し、林曲に陶々し、夕雪朝雨に其懷を馳せ、梧烟柳風に其興を遣る、隱行高閑、世の彷彿する所に非ず、片善寸動を懷いて喋々する者と、寧ぞ同年にして語るべけんや。

遺其興、隱行高蹈、非世之所彷彿、與懷片善寸、黝噪噪者、寧可同年而語耶。

石克子復曰、我石先生累世士林、曾辭幕府、急流勇退、高尚其事、四十年來、杜門掃軌、絕無外慕、筆瓢屢空、愉愉如也、故世人高其行、而服其德也、其出言也、崇雅黜浮、以故爲新、不離範圍陶甄之中、而亦不泥範圍陶甄之中、晚年詩皆出于自然、冲淡深粹、而深造淵明之意矣、本朝之學者、久倣元白之輕俗、而未聞有闡李杜之藩籬者、以至于今、泯泯也、先生首倡唐詩、開元大曆之體製、遂明於一時、皆其力也。

平岩桂曰、我師凹凸先生、大阪凱歌之後、辭於幕下、遊事西藝、藝主一見先生之德

石克子復曰、我が石先生は累世の士林、曾て幕府を辭し、急流勇退し、其事を高尙にす、四十年來、門を杜ぢて軌を掃ひ、絶えて外慕なし、筆瓢屢空しきも、愉々如たり、故に世人、其行を高しとし、而して其德に服す、其言を出だすや、雅を崇び、浮を黜け、故を以て新と爲し、範圍陶甄の中を離れず、而して亦範圍陶甄の中に泥まらず、晩年の詩、皆自然に出づ、冲淡深粹、而して深く淵明の意に造る、本朝の學者、久しく元白の輕俗に倣ふ、而して未だ李杜の藩籬を闡ふ者あるを聞かず、以て今に至りて泯々たり、先生、唐詩を首倡す、開元大曆の體製、遂に一時に明なるは、皆其力なり。

平岩桂曰、我が師凹凸先生、大阪凱歌の後、幕下を辭し、西藝に遊事す、藝主一たび先生の德器を見、之れを景仰し、之れに敬服す、竊遇庚辰、青、翁如として賓主の禮

日本詩話叢書

器景仰之敬服之寵遇庚辰、○按、庚、疑庚誤、胥

翁如賓主之禮、○按、此二句疑有論脫、先生應接諸

士之際、類孤鶴翮舉超越群雞、進退屈伸

非禮苟不出、非義苟不入、及阿負之沒、拂

衣掛冠、一芥於爵祿、決然頻去、○按、頓字疑有、

藝主不能鉤止也、寬永之歲、草身乎四明

之雲、莫達名乎朝鮮之異域、左右文武、美

善俱盡、比及七秩、詠和歌一首乎鴨川之

水涯、不欲再渡、而后貌粉華之竟、○按、竟、即境字、

安、膝乎乾坤之草堂、葛藁纏塔、松筠蔭門、

栗里之秋、浣花之春、鍾勝絕於斯。

江村綬君錫曰、寬文中稱詩豪者、無過於

石川丈山僧元政、丈山出處在世之口碑、

已武且文、隱操亦卓然、年九十卒、可謂偉

五六

あり、先生諸士に應接するの際、孤鶴の翮舉して羣雞に超越するに類す、進退屈伸、禮に非ざれば苟出でず、義に非ざれば苟入らず、阿負の没するに及び、衣を拂ひ冠を掛け、爵祿を一芥にし、決然頻去す、藝主鉤止すること能はず、寬永の歲、身を四明の雲巢に草し、名を朝鮮の異域に達す、文武を左右にし、美善俱に盡す、七秩に及ぶに比んで、和歌一首を鴨川の水涯に詠じて、再び渡るを欲せず、而して后、粉華の境を藐し、膝を乾坤の草堂に安んじ、葛藁塔に纏ひ、松筠門を蔭ひ、栗里の秋、浣花の春、勝絶を斯に鍾む。

江村綬君錫曰、寬文中、詩豪と稱する者は、石川丈山僧元政に過ぐるはなし、丈山の出處、世の口碑に在り、已に武にして且文、隱操も亦卓然たり、年九十にして卒す、偉人と謂ふ可し、今に至りて京師の東北一乘寺

人也。至今京師東北一乘寺邑有詩仙堂。暨其遺留琴硯等。依然尙存。當時嘯咏其中。誓不入城市。諸名士每經過。談論唱和。以爲娛樂。所著有覆醬集。韓人權試者。爲之序。稱曰。日東李杜。余覽其集。句多拙異。往往不免俗習。權試溢美。不俟辯論。然當時諸儒咏言。率出于性理之精餘。乏溫柔旨。而丈山獨夢寐山林。襟懷瀟洒。如臆間。淺月影。枕上遠鐘聲。風柳起。鶯懶。山花留。馬蹄。半壁殘燈影。孤牀落葉聲等。意象閑雅。殊可諷詠。

原善公道曰。丈山晚節。壹事風咏。口絕兵革。人或叩之。輒曰。衰老無記臆。前事皆茫然。雖然其雄心。蓋猶有未灰者。林春齋賀。

邑に、詩仙堂あり、暨び其遺留琴硯等、依然として尙存す、當時其中に嘯咏し、誓つて城市に入らず、諸名士毎に經過し談論唱和し、以て娛樂と爲す、著す所、覆醬集あり、韓人權と試いふ者、之れが序を爲り、稱して日東の李杜と曰ふ、余、其集を覽るに、句多くは拙異、往々俗習を免れず、權試の溢美は辯論を俟たず、然れども當時諸儒の咏言、率ね性理の精餘に出で、溫柔の旨に乏し、而して丈山は獨、山林に夢寐し、襟懷瀟洒たり、臆間、殘月の影、枕上遠鐘の聲、風柳鶯懶を起し、山花馬蹄を留む、半壁殘燈の影、孤牀落葉の聲等の如き、意象閑雅、殊に諷詠すべし。

原善公道曰、丈山晚節まつば壹ら風咏を事とし、口に兵革を絶つ、人或は之れを叩けば、輒曰く、衰老にして記憶なし、前事皆茫然たりと、然りと雖其雄心は蓋猶未だ灰ならざる者あり、林春齋其九十を賀する序に云ふ、夫

其九十序云、夫利刀、傍枕、弓銃在側、則雖在山林、未忘士林之素、又桐江山人云、輓近高尙石丈拙翁、隱於洛北四明山下、每出行、使僮僕擔偃月刀、以隨之、又作詩云、枕頭三尺劍、瓶裡一枝梅、其所養可以知也、翁平居把翫竹節大如意、如曰、腰間無寸鐵、胸裡掃千軍、亦知其所托也、其漁村夕照句、欲把蓑衣曝返照、釣竿還是魯陽戈、惺窩見而奇之、曰、斯人異時、當爲詩宗。

錦天山房詩話、門閥也、戰功也、孝行也、高德也、善書也、風流也、人若有一于茲、則足以彰著於世、而丈山翁一身皆兼有之、況其詩之警拔冠絕當時者乎、予之喜而多

れ利刀は枕に傍ひ、弓銃は側に在り、山林に在りと雖、未だ士林の素を忘れずと、又桐江山人云ふ、輓近の高尙石丈拙翁、洛北四明山下に隱れ、出行する毎に僮僕をして偃月刀を擔ひ、以て之れに隨はしむと、又詩を作りて云ふ、枕頭三尺の劍、瓶裡一枝の梅と、其の養ふ所、以て知るべし、翁、平居竹節の大如意を把翫す、腰間寸鐵なし、胸裡千軍を掃ふと曰ふが如き、亦其の托する所を知るなり、其漁村夕照の句に「蓑衣を把りて返照に曝さんと欲す、釣竿還是魯陽の戈」と、惺窩見て之れを奇として曰、斯の人、異時當に詩宗たるべしと。

錦天山房詩話、門閥なり、戰功なり、孝行なり、高德なり、善書なり、風流なり、人若し茲に一あらば、則以て世に彰著するに足れり、而して丈山翁、一身皆之れを兼有す、況んや其詩の警拔、當時に冠絶するものをや、予の喜んで多く録する者は此を以てなり、且寛永年間の作

錄者以此也、且寬永年間作者、率踵五山禪、納之陋習、萎萎不振、獨翁首倡唐詩、以開元大曆爲宗、識亦卓矣、但氣運未至、故不能副其言、爾物徂徠眼空四海、不輕許可、猶稱翁爲東方之詩杰、其爲名士所推重、可知也、嘗賦富士山云、仙客來遊雲外巔、神龍栖老洞中淵、雪如紈素烟如柄、白扇倒懸東海天、在集中未爲警拔、而世人最稱之、何哉。

錦天山房詩話卷十 元寬之際、林羅山父子兄弟、以通儒碩學爲一代泰斗、故當時苟知志學者、莫不望其門而四方靡至、彬彬焉稱多士、而人見宜卿、坂井嘉之最知名、然其著撰傳於世者甚少、今摭拾其一

錦天山房詩話上冊

者、率ね五山禪納の陋習を踵ぎ、萎萎不振はす、獨翁は首として唐詩を倡ふ、開元大曆を以て宗と爲す、識亦卓たり、但氣運未だ至らず、故に其言に副ふ能はざるのみ、物徂徠眼、四海を空しうし、輕しく許可せず、猶翁を稱して東方の詩杰と爲す、其名士の推重する所と爲る知るべきなり、嘗て富士山を賦して云ふ、仙客來り遊ぶ雲外の巔、神龍栖み老ふ洞中の淵、雪は紈素の如く、烟は柄の如し、白扇倒に懸る東海の天」と集中に在りて未だ警拔と爲さず、而して世人最之れを稱するは何ぞや。

錦天山房詩話卷十 元寬の際、林羅山父子兄弟、通儒碩學を以て一代の泰斗たり、故に當時、苟、學に志すを知る者、其門を望んで四方より靡至せざるはなし、彬々焉として多士と稱す、而して人見宜卿、坂井嘉之、最名を知らる、然るに其著撰の世に傳はる者甚少し、今、其一二を摭拾して、此の編に著す、此の餘、尙、田攢字は仲叢あり、介軒と號し、又芳宜と號す、詩を善す、後、姓を林

二著於此編、此餘尙有田攢字仲叢號、介軒、又號芳宜、善詩、後改姓林、武州人、野三雪字景孫、野及字守之、和堅字居中、森默、竝讚州人、湊安字靜之、若狹人、浦默字成之、播州人、佐慶字來章、生野端字雲之、井適字可與、寺尾退字仲守、一名吉通、石隸字介夫、安悅字釋夫、旋定字勝伯、竝武州人、春澤字亦悅、三復字圭之、江良言字伯聿、後改名滿、吉坦字蕩之、村喬字南有、谷順成字之方、木龜雲字子蒙、島泰字志同、木重字伯厚、津宗哲字無涯、後改名浩、淺益、後改名容、字粹之、左克字千之、村聚字萃叔、石覃字思服、松立字不孤、初名直秀、野升字以高、初名省、南衛字千里、田厚號、

と改む、武州の人、野三雪字は景孫、野及字は守之、和堅字は居中、森默、竝に讚州の人、湊安字は靜之、若狹の人、浦默字は成之、播州の人、佐慶字は來章、生野端、字は雲之、井適字は可與、寺尾退、字は仲守、一名は吉通、石隸字は介夫、安悅字は釋夫、旋定字は勝伯、竝に武州の人、春澤字は亦悅、三復、字は圭之、江良言、字は伯聿、後ち名を滴と改む、吉坦字は蕩之、村喬字は南有、谷順成字は之方、木龜雲字は子蒙、島泰字は志同、木重字は伯厚、津宗哲字は無涯、後ち名を浩と改む、淺益、後ち名を容と改む、字は粹之、左克字は千之、村聚字は萃叔、石覃字は思服、松立字は不孤、初の名は直秀、野升字は以高、初の名は省、南衛字は千里、田厚、止丘と號す、林泰宅、直宗、倫鶴丹、井通等、其名字、林氏諸集に散見す、然るに其詩傳はらず、或は傳はると雖、卑俣、採るに足らず、故に姑く、姓字の論る可き者を録し、以て他日の搜補を俟つ。

止丘、林泰、宅直、宗倫、鶴丹、井通等、其名字散見於林氏諸集、然其詩不傳、或雖傳、卑俚不足採、故姑錄姓字可識者、以俟他日搜補。

人見壹

宇道生、號卜幽軒、京師人、本姓小野、參議眞、謫居下野足利邑、其子孫曼、衍東園、後裔居武州人見邑者、以邑爲氏、會祖道嘉、勇偉有大志、據丹波馬路邑、天文乙巳、備前守內藤元定、襲馬路、道嘉出拒卻之、元定敗走乞援於三好長慶、合圍之、堡陷力戰而死、子道生、時年十五、避難到嵯峨天龍寺、依僧策彥、策彥素與道嘉有舊、故善遇之、丁未策彥奉命使明、道生從行、經四

錦天山房詩話上冊

人見壹

字は道生、卜幽軒と號す、京師の人、本姓は小野、參議眞、下野足利邑に謫居す、其子孫東園に曼衍す、後裔武州人見邑に居る者、邑を以て氏と爲す、會祖道嘉、勇偉にして大志あり、丹波馬路邑に據る、天文乙巳、備前守、内藤元定、馬路を襲ふ、道嘉出で拒ぎて之れを卻く、元定敗走し、援を三好長慶に乞ひ、之れを合圍し、堡陥り力戦して死す、子道生、時に年十五、難を避けて嵯峨天龍寺に到り、僧策彥に依る、策彥素より道嘉と舊あり、故に善く之を遇す、丁未策彥命を奉じて明に使す、道生從ひ行く、四年を経て歸る、道生、騎射を能くし、強弓又鐵重さ二三斤なるを挽く、大井川の上に隱居す、子友

年而歸、道生能騎射、挽強弓、又鐵重二三斤、隱居大井川上、子友德以醫爲業、生五男、皆以醫顯、壹則其第二子也、同鄉柏原氏、養爲子、教之擊鼓、家貧、常傭書以供養、後歎其所業瑣卑、奮然始學讀書、有藏書者、輒借而手寫、讀之、日夜無怠、就音得菴而學、柏原氏沒、復其本姓、後水尾帝詔、鑄宋朝類苑、命壹加訓點、縉紳多從遊者、林羅山賜官暇、還京、壹往問道、多有所得、寬永戊辰遊江都、筮仕水戶威公、侍講數年、公善遇之、後築白賁園、澆花種菜、以自樂、寬文庚戌病卒、年七十二、所著有林塘集、五經童子問、莊子棧航等。

人見節

德醫を以て業と爲す、五男を生む、皆醫を以て顯る、壹は則其第二子なり、同郷柏原氏、養ふて子と爲し、之れに鼓を撃つを教ゆ、家貧し、常に傭書して以て供養す、後、其所業の瑣卑なるを歎じ、奮然として始めて讀書を學ぶ、書を藏する者あれば、輒ち借りて手寫し、之れを讀む、日夜怠る無し、音得菴に就いて學ぶ、柏原氏沒し、其本姓に復す、後水尾帝詔して宋朝類苑を鑄す、壹に命じて訓點を加へしむ、縉紳從遊する者多し、林羅山、官暇を賜はり、京に還る、壹往いて道を問ひ、多く得る所あり、寬永戊辰江都に遊び、水戶威公に筮仕す、侍講數年、公善く之れを遇す、後、白賁園を築き、花に澆ぎ、菜を種え、以て自ら樂む、寬文庚戌病んで卒す、年七十二、著す所、林塘集、五經童子問、莊子棧航等あり。

人見節

字宜卿、一字伯毅、小名竹次、稱友元、後稱又七郎、號竹洞、又號菊廬、晚號鶴山、京師人、父賢知、侍醫、宜卿幼好學、正保二年始謁大猷、大君、擢爲世子侍御、賜祿、寬文元年爲儒官、剃髮、改名友元、二年賜歲俸二百苞、十二年叙法眼、延寶元年襲父食祿七百石、元祿九年正月十四日病卒、年六十、葬於野州西場邑山中、私諡安節、性勤敏、歷事三朝、夙夜不懈、恩待特篤、前後賞賜、不可勝計。

人見折

一名行究、稱又兵衛、桃原、鶴山長子、襲父元祿十一年爲儒官、享保三年命講中庸、又說書於昌平學、數賜時服、十六年九

字は宜卿、一の字は伯毅、小名は竹次、友元と稱す、後、又七郎と稱す、竹洞と號す、又、菊廬と號す、晚に鶴山と號す、京師の人、父賢知、侍醫たり、宜卿幼にして學を好む、正保二年始めて大猷大君に謁す、擢んでられて世子の侍御と爲り、祿を賜ふ、寬文元年儒官と爲り、剃髮して名を友元と改む、二年歲俸二百苞を賜ふ、十二年法眼に敘す、延寶元年、父の食祿七百石を襲ぐ、元祿九年正月十四日病んで卒す、年六十、野州西場邑山中に葬る、私に安節と諡す、性勤敏、三朝に歷事し、夙夜懈らず、恩待特に篤く、前後賞賜、勝げて計る可からず。

人見折

一名は行究、又兵衛と稱す、桃原と號す、鶴山の長子なり、父に襲いで元祿十一年儒官と爲る、享保三年命ぜられて中庸を講ず、又書を昌平學に説く、數、時服を賜ふと、十六年九月九日病んで卒す、年六十二、私に謹謙

月九日病卒、年六十二、私諡「謹謙」。

佐藤筠

字之有、一名直方、號「竹塢」、稱「半七」、晚稱「安節」、尾州人、弱冠來江都、學于林鶯峰、學成出仕、肥後侯、晚年致仕、卜居郭外安邑、雜蒔花竹、蕭閑自娛、寶永戊子病卒、著有「堯典私考」曲禮私考、語孟、字義辨論、竹塢文稿、行餘漫吟、孫祐自天編錄、傳于世。

菊池東勻卷十

號「耕齋」、初名東尹、中院內府源公村命改、今名、其先肥後人、四世祖武宗、移於相之小田原、北條氏政待以客禮、父元春仕臈所侯、爲儒學教授、元和四年生、東勻於洛、幼受學於菅得菴、未幾得菴歿、遍交當世

謹す。

佐藤筠

字は之有、一名は直方、竹塢と號す、半七と稱す、晩に安節と稱す、尾州の人、弱冠、江都に來り、林鶯峰に學ぶ、學成り、出でて肥後侯に仕ふ、晚年致仕して郭外安邑に卜居し、花竹を雜蒔し、蕭閑自ら娛しむ、寶永戊子病んで卒す、著に堯典私考、曲禮私考、語孟、字義辨論、竹塢文稿、行餘漫吟、孫祐自天編錄あり、世に傳はる。

菊池東勻卷十

耕齋と號す、初の名は東尹、中院內府源公村命じて今の名に改めしむ、其先、肥後の人、四世の祖武宗、相の小田原に移る、北條氏政待つに客の禮を以てす、父元春臈所侯に仕へ、儒學教授と爲る、元和四年、東勻を洛に生む、幼にして學を菅得菴に受く、未だ幾くならずして得菴歿す、遍く當世知名の士に交り、寛永十年、江戸に至り、林羅山の門人に遊學し、醫を野間玄琢に學ぶ、後、

知名士、寛永十年、至江戸、游學於林羅山之門人、學醫於野間玄琢、後游事久留米侯、辭歸洛以講授爲業、生徒雲集、明曆元年、韓使來聘、館於本國寺、膳所侯奉命監護、供設諸務、聘東匂、掌文書、屢與學士李石湖等唱和、石湖賞嘆以爲海東第一、且爲序其集、於是名聲益振、寛文二年、應薩侯聘、挈家移江都、又至薩賜食邑五百石、後辭、祿歸江戸、侯甚重之、禮養如故、天和二年十二月八日、沒於江戸京橋、壽六十五歲、子武共、武喬、武雅、竝有文名、所著有耕齋全集二十卷。

朝鮮李石湖曰、嘗聞日域文明之盛、同轍中國、而詩士文人無愧于中國、如予所見

久留米侯に游事し、辭して洛に歸り、講授を以て業と爲す、生徒雲の如く集る、明曆元年、韓使來聘し本國寺に館す、膳所侯命を奉じ供設諸務を監護す、東匂を聘し文書を掌らしむ、屢、學士李石湖等と唱和す、石湖賞嘆して以て海東第一と爲す、且、爲に其集に序す、是に於て名聲益、振ふ、寛文二年、薩侯の聘に應じ、家を奉へて江都に移り、又、薩に至り、食邑五百石を賜ふ、後、祿を辭して江戸に歸る、侯其之れを重んず、禮養故の如し、天和二年十二月八日、江戸京橋に沒す、壽六十五歲、子武共、武喬、武雅、竝に文名あり、著す所耕齋全集二十卷あり。

朝鮮、李石湖曰、嘗て聞く、日域文明の盛、轍を中國に同じうす、而して詩士文人は中國に愧づるなしと、予の見る所の菊耕齋氏の如きは、蓋其雄且傑なる者なり、

菊耕齋氏蓋其雄且傑者也。賦詩作文流麗蘊藉，手不輟筆，有似逸驥奔泉，彩鸞舞空。予既畏之，閱其詩草，字字含風雅，篇篇鍛敲推，殆可與元劉爭獨步，陶謝共同遊。譬之嘔蔗，愈讀愈佳。

菊池武雅鵬溟曰：先考之於詩也，初泛濫於漢魏六朝三唐之間者，殆三十年。晚愛涪翁詩，盡脫故態，遂究江西本源，定爲一家。譬之古畫古劍之可以鑒賞而不可褻玩焉，精鍊所至，不可以形似而論之。

錦天山房詩話，寬永中詩傑唯知有丈山元政，而少知有耕齋者。今所傳遺集二十卷，鏘金鏗玉，美不勝收，其巧力豈遽出于二老之下哉。而世不甚知之者何也。豈非

詩を賦し文を作り、流麗蘊藉、手筆を輟めず、逸驥、泉に奔り、彩鸞、空に舞ふに似たるあり。予既に之れを畏る、其詩草を閲するに、字々、風雅を含み、篇々、敲推を鍛す、殆んど元劉と獨歩を争ひ、陶謝と同遊を共にすべし、之れを蔗を嘔ふに譬ふ、愈、讀みて愈佳なり。

菊池武雅鵬溟曰：先考の詩に於けるや、初め漢魏六朝三唐の間に泛濫する者、殆三十年、晚に涪翁の詩を愛し、盡く故態を脱し、遂に江西の本源を究め、定めて一家を爲す、之れを古畫、古劍の以て鑒賞すべくして褻玩すべからざるに譬ふ、精鍊至る所、形似を以て之れを論すべからず。

錦天山房詩話、寬永中、詩傑唯、丈山元政あるを知りて、耕齋あるを知る者少し、今傳ふる所遺集二十卷、鏘金鏗玉、美、收むるに勝へず、其巧力豈遽に二老の下に出でんや、而して世甚之れを知らざる者は何ぞや、豈に其集傳本絶だ罕なるを以てに非ずや、宜なるかな、

以其集傳本絕罕乎、宜哉古人有滄海遺珠之歎也、故余喜錄而廣其傳、其他丙辰元旦曰、鶯花新歲月、禮樂古唐虞、陪本多兵部侍郎、賞後園牡丹曰、十分開處偏宜、午、三月盡時尤可人、冬夜室至曰、燈花光寒窓有月、杯盤市遠酒無肴、八幡廟曰、外國衣冠朝禹會、中華禮樂滿堯闈、皆佳句也、又案釋六如葛原詩話引東坡放翁屈原塢詩、以證墳亦可謂塢、以爲邦人無用之者、而耕齋歸省行曆中有教盛塢及松風村雨塢詩、亦可以見其遷於詩學矣、但七言絕句仄韻脚第六字用平字、未見古人有用此格者、而耕齋多用之、不知其何據。

錦天山房詩話上冊

古人滄海遺珠の歎あるや、故に余喜んで錄して其傳を廣くす、其他、丙辰元旦に曰、「鶯花新歲月、禮樂古唐虞」、本多兵部侍郎に陪して後園の牡丹を賞するに曰、「十分開く處偏に午に宜し、三月盡くる時尤人に可なり」、冬夜室至るに曰、「燈火光寒く窓に月あり、杯盤市遠く酒に肴なし」、八幡廟に曰、「外國の衣冠禹會に朝し、中華の禮樂堯闈に滿つ」、皆佳句なり、又案するに釋六如葛原詩話に東坡放翁原塢の詩を引いて、以て塢亦塢と謂ふ可きを證す、以爲へらく邦人之れを用ふる者なしと、而して耕齋歸省行曆中、教盛塢及び松風村雨塢の詩あり、亦以て其詩學に遠きを見るべし、但七言絕句仄韻脚第六字に平字を用ふ、未だ古人此の格を用ふる者あるを見ず、而して耕齋多く之れを用ふ、其の何の據なるを知らず。

菊池武雅

初名搏、號鵬溟、又號半隱、耕齋子、從林鷲峰而學、爲昌平學頭、後仕讚州侯、著有半隱集十七卷、藏于家、子武賢、號崧溪、孫武保、號室山、竝以儒雅仕、讚藩、室山二子、長繩武、字萬年、號守拙、次桐孫、字無絃、號五山、亦克世其家、桐孫最善詩、名噪一世。

菊池桐孫無絃曰、先生之詩在、護園未興之前、故一點無李風塵之氣、流暢委婉、自不可及、余竊目爲鳥碩夫之亞云。

錦天山房詩話卷十藤樹以下諸儒、行義卓偉、經學深粹、各成一家、爲一代宗師、皆不屑以辭章著、故其詩傳者、綦少、其存者、絕無佳者、如三宅尙齋獄中詩、每句押韻、

菊池武雅

初めの名は搏、鵬溟と號す、又半隱と號す、耕齋の子、林鷲峯に從ひて學ぶ、昌平學頭と爲る、後讚州侯に仕ふ、著に半隱集十七卷あり、家に藏す、子、武賢、崧溪と號す、孫武保、室山と號す、竝に儒雅を以て讚藩に仕ふ、室山の二子、長は繩武、字は萬年、守拙と號す、次は桐孫、字は無絃、五山と號す、亦克く其家を世にす、桐孫最詩を善くし、名一世に噪がし。

菊池桐孫無絃曰、先生の詩、護園未だ興らざるの前にあり、故に一點李風塵の氣なし、流暢委婉、自ら及ぶべからず、余竊に目して鳥碩夫の亞と爲すと云ふ。

錦天山房詩話卷十藤樹以下の諸儒、行義卓偉、經學深粹、各一家を成し、一代の宗師たり、皆、辭章を以て著るゝを屑とせず、故に其詩傳ふる者、甚めて少し、其存する者も絶えて佳なる者なし、三宅尙齋獄中の詩の如き、每句押韻、辭も亦率易、固より錄するに足らず、然る

辭亦率易、固不足錄焉、然其他詩無所見、矧諸賢固不以詩傳乎、故今蒐輯諸家遺集、錄其較佳者、觀者取其意、略其辭、而可也。

中江原

字惟命、稱與右衛門、號藤樹、又號頤軒、又號嘿軒、近江人、祖某、仕加藤父、父隱於農、先祖沒、祖乃拉惟命之、伊豫大洲、童卯如老成、年甫十一、一日讀大學自天子以至於庶人、壹是皆以修身爲本、大嘆悟曰、幸此經之存于今也、聖人豈不可學而至焉、年十七、京師僧來講論語、是時大洲之俗、尊尙武、無敢從學者、獨惟命日夕往聽焉、僧居月餘而去、因得四書大全讀之、而

に其他の詩見る所なし、矧や諸賢固より詩を以て傳はらざるをや、故に、今、諸家の遺集を蒐輯し、其較佳なる者を錄す、觀る者は其意を取り、其辭を畧して可なり。

中江原

字は惟命、與右衛門と稱す、藤樹と號す、又頤軒と號す、又嘿軒と號す、近江の人、祖某、加藤侯に仕ふ、父農に隱る、祖に先ちて沒す、祖乃惟命を拉て伊豫大洲に之く、童卯にして老成の如し、年甫めて十一、一日大學の天子より以て庶人に至るまで、壹に是れ皆、身を修むるを以て本と爲すと云ふを讀み、大に感悟して曰、幸に此經の今に存するなり、聖人豈學んで至るべからざらんやと、年十七、京師の僧來りて論語を講す、是の時、大洲の俗、專ら武を尙ひ、敢て從學する者なし、獨、惟命日夕往いて聽く、僧居ること月餘にして去る、因て四書大全を得て、之を讀む、而して往々僚友の誘毀する所となる、是に於て壹は則ち深く之れを藏し、夜に至り始めて卷を開き、鑽研怠らず、終に大儒と爲る、後ち辭

往往爲僚友所誘毀、於是晝則深藏之、至
 夜始開卷鑽研不怠、終爲大儒、後乞辭歸
 家養母、不允、於是鬻家什、又以其餘易穀、
 積之家、意在還、是歲俸給也、而仰天心誓
 不事二姓、而後出亡歸鄉、以篤學修行、聲
 施海內、公侯辟召、前後皆峻拒不應、篤信
 王文成致知之學、先躬行、後文詞、每引四
 民訓諭之人、無賢愚皆服其德、莫不興起
 于善、鄉里人敬如神明、愛如父母、至今不
 衰、世稱爲近江聖人、備前侯輝政聞其名、
 使人聘之、惟命以老且疾辭不就、使其子
 及諸弟子往仕、侯渴仰益切、遙師崇之、慶
 安元年病歿、年四十一、侯大悼惜焉、設神
 主春秋親祭之、著有學庸解、翁問答、鑑草、

して家に歸りて、母を養はんことを乞へども、允され
 ず、是に於て家什を鬻ぎ、又其餘を以て穀に易へ、之れ
 を家に積む、實是の歳の俸給を還へすに在り、而して
 天を仰ひて心に二姓に事へざるを誓ふ、而して後ち出
 亡して郷に歸る、篤學修行を以て聲、海内に施く、公侯
 の辟召、前後皆峻拒して應ぜず、篤く王文成の致知の
 學を信じ、躬行を先にし、文詞を後にす、毎に四民を引
 て之れを訓諭す、人、賢愚となく皆其德に服し、善に興
 起せざるは莫し、郷里の人、敬すること神明の如く、愛
 すること父母の如し、今に至りて衰へず、世に稱して
 近江聖人と爲す、備前侯輝政、其名を聞き、人をして之
 れを聘せしむ、惟命、老且病を以て辭して就かず、其子
 及諸弟子をして往いて仕へしむ、侯渴仰益切、遙に之
 れを師崇す、慶安元年病んで歿す、年四十一、侯大に悼
 惜し、神主を設け、春秋に親しく之れを祭る、著に學庸
 解、翁問答、鑑草、論語郷黨翼解、藤樹遺集等あり、三子、
 長は宜伯、仲は藤之丞、季は彌三郎、皆備前侯に仕ふ、
 各、病を謝して致仕して還る。

論語郷黨翼解藤樹遺集等、三子長宜伯仲藤之丞、季彌三郎、皆仕備前侯、各謝病致仕而還。

伊藤長原藏、過藤樹書院、有詩云、江西書

院聞名久、五十年前訓義方、今日始來絃誦地、古藤影掩舊茅堂。

雨森東伯陽曰、藤樹賢人也、隱居近江、鄰里鄉黨稱爲佛子、有所交爭、必聚於其庭以質焉、吾無得而問然焉。

古賀種淳風曰、偃戈以來、儒先輩出、而惺窩藤樹其選也、至其爲學、則皆宗陸王、然天資粹美、踐履純篤、海內學者未有能先之者、又曰、先生講學近江、時人欽仰、以近江聖人稱之、蓋其天資有大過人者、獨其

伊藤長原藏、藤樹書院を過ぎり、詩あり云ふ、江西書院名を聞く久し、五十年前義方を訓ふ、今日始めて來る絃誦の地、古藤影は掩ふ舊茅堂と。

雨森東伯陽曰、藤樹は賢人なり、近江に隱居す、鄰里鄉黨稱して佛子と爲す、交爭する所あれば、必其庭に聚りて以て質す、吾得て問然する無し。

古賀種淳風曰、偃戈以來、儒先輩出す、而して惺窩藤樹は其選なり、其學を爲すに至りては、則皆陸王を宗とす、然るに天資粹美、踐履純篤、海内の學者未だ能く之れに先んずる者あらず、又曰、先生、學を近江に講ず、時人欽仰し、近江聖人を以て之れを稱す、蓋天資大人に過ぐる者あり、獨其學、新建を宗とし、識者の心に滿たず、然れども横渠考亭の絕學を前聖に繼ぐを以て

學宗新建、不滿識者之心、然以橫渠考亭之繼絕學於前聖、其初年猶不免出入釋老、若先生之高明特達、設假之以年、則安知其不棄異學醇如也。

角田簡大可曰、藤樹爲人溫厚、人服其德、莫不興起于善、雖旅舍茗肆、有客所遺物、則必置之閣上、以俟遺者之復來、歷年之後、塵埃盈滿、竟不收用、嘗之京師、行路轎中、說心學、轎夫感動流涕、其德之薰人類、此也、或曰、野人到于今、尊崇藤樹、過故居必拜、雖貴人必下輿馬云。

熊澤伯繼

字了介、通稱次郎八、後更助右衛門、號蕃山、又號息遊軒、平安人、本姓野尻、父一利、

すら、其初年、猶は釋老に出入するを免れず、先生の高明特達の若き、設之れに假すに年を以てせば、安んぞ其異學を棄て、醇如たらざるを知らんや。

角田簡大可曰、藤樹、人と爲り溫厚、人、其德に服し、善に興起せざるはなし、旅舍茗肆と雖、客遺す所の物有れば、則必之れを閣上に置き、以て遺者の復た來るを俟つ、歷年の後、塵埃盈滿するも、竟に收用せず、嘗て京師に之に、行路、轎中に心學を説く、轎夫感動流涕す、其德の人を薰する此れに類せり、或ひと曰、野人、今に至るまで藤樹を尊崇し、故居を過ぐれば必拜す、貴人と雖、必輿馬を下ると云ふ。

熊澤伯繼

字は了介、通稱は次郎八、後、助右衛門と更む、蕃山と號す、又、息遊軒と號す、平安の人、本姓は野尻、父一利、藤兵衛と稱す、尾張の人、少ふして加藤嘉明に事ふ、後官

稱藤兵衛尾張人、少事加藤嘉明、後辭官、寓居京師、島原之役、從鍋島勝茂、有戰功、云、了介出爲外祖熊澤守久後、因承其姓、天姓深智、儁才、卓越古今、年甫十六、仕岡山烈公、比弱冠、公驟加獎養、將大用、而辭以未學、乃乞遊學、負笈上京、聞中江藤樹名、往謁請受業、藤樹辭以不足爲人師、伯繼益請不置、二夜寢其廡下、藤樹母教諭、藤樹容接之後、公召還之、信任愈厚、亡何嘗要路、於是布德流惠、賑貧救困、罷勾查、禁賭博、毀淫祠、表節義、明聖教、以闢異端、嚴武備、以戒不虞、諸新政、海內改觀、後與共事者有隙、不自安、乃辭岡山、到京師、又往明石、明石侯本師尊之、禮遇甚厚、後侯

錦天山房詩話上冊

を辭して京師に寓居す、島原の役、鍋島勝茂に従ひ、戰功ありと云ふ、了介出で、外祖熊澤守久の後と爲る、因て其姓を承く、天性深智儁才、古今に卓越す、年甫めて十六、岡山烈公に仕ふ、弱冠の比ひ、公、驟、獎養を加ふ、將に大に用ひんとす、而して辭するに未だ學ばざるを以てす、乃乞ふて遊學し、笈を負ふて京に上る、中江藤樹の名を聞き、往て謁して業を受けんとを請ふ、藤樹辭するに人の師たるに足らざるを以てす、伯繼益、請ふて置かず、二夜、其廡下に寝ぬ、藤樹の母、教く藤樹を諭して、之れに容接せしむ、後、公之れを召し還す、信任愈、厚し、何くも亡くして要路に當る、是に於いて徳を布き惠を流し、貧を賑はし、困を救ふ、勾查を罷め、賭博を禁じ、淫祠を毀ち、節義を表し、聖教を明にし、以て異端を闢き、武備を嚴にして、以て不慮を戒む、諸の新政、海内觀を改む、後、事を共にする者と隙あり、自ら安んぜず、乃、岡山を辭して京師に到り、又、明石に往く、明石侯、本之れを師尊し、禮遇甚厚し、後、侯、封を

移封古河、從之、未幾、以言譴罪大府、幽于古河數十年、面無憂色、有人問當世事、默然不答、○按、答、原、作、問、今、改、即索笙而吹之、終歿于幽所、年七十三、著有易小解、易繫辭小解、孝經小解、孝經或問、大學或問、論語小解、中庸小解、孟子小解、集義和書、集義外書、雅樂解、源語外傳等二十餘種、

江村毅君錫曰、熊澤了介、爲政、舉世所知、余嘗閱松原一清出思稿、其牛牒泊舟詩、有漁家兒女亦知字、笑把孝經教老翁句、一時教化可想、至今泮宮之設、尙有典刑云。

古賀樸淳風曰、了介熊澤氏、受學藤樹、亦穎敏超邁、名望尤隆、問其學、則非朱非陸、

古河に移す、之れに従ふ、未だ幾ばくならず、言を以て罪を大府に獲、古河に幽せらるゝこと數十年、面に憂色なし、人あり當世の事を問へば、默然として答へず、即ち笙を索めて之れを吹く、遂に幽所に歿す、年七十三、著に易小解、易繫辭小解、孝經小解、孝經或問、大學或問、論語小解、中庸小解、孟子小解、集義和書、集義外書、雅樂解、源語外傳等二十餘種あり。

江村毅君錫曰、熊澤了介政を爲す、舉世知る所、余嘗て松原一清の出思稿を閲するに、其牛牒泊舟の詩に、漁家の兒女亦字を知る、笑つて孝經を把りて老翁に教ふの句あり、一時の教化想ふ可し、今に至るまで泮宮の説、尙典刑ありと云ふ。

古賀樸淳風曰、了介熊澤氏、學を藤樹に受け、亦、穎敏超邁、名望尤隆なり、其學を問へば、則朱に非ず、陸に非ず、王に非ず、禪に非ず、自ら一家を成す、其談、道家に及べ

非王非禪、自成一家、其談及道學者、多遷臆、杜撰、牽強支離、要之不免爲功利空寂之歸、然其氣焰足以懾人、器幹足以立事、豈世之庸腐乖僻、汨沒章句者之所冀其萬一哉。

角田簡大可曰、了介長不滿七尺、容姿婀娜、如美婦人、而神宇英邁、有經世之略、才匹王佐、爲人寬而溫、雖家人奴婢、未嘗見其喜愠之色、御家有法、居身清約、泊然無營、閨門整肅、居恆喜客、屬士日來、談論文武、相親猶骨肉也、施及采邑之民、愛慕猶父母也、其從公而東也、宗藩列辟、多虛席而待焉、大猷大君亦素聞其名、將欲引見、而會薨、後適南豐、尋遊京師、天朝公卿、多

鎌天山房詩話上冊

ば多く、憑臆杜撰、牽強支離、之れを要するに功利空寂の歸たるを免れず、然るに其氣焰は以て人を懾れしむるに足り、器幹は以て事を立つるに足れり、豈世の庸腐乖僻、章句に汨沒する者の、其萬一を冀ふ所ならんや。

角田簡大可曰、了介長七尺に満たず、容姿婀娜、美婦人の如し、而して神宇英邁、經世の略あり、才、王佐に匹す、人と爲り寛にして温、家人奴婢と雖、未だ嘗て其喜愠の色を見ず、家を御するに法あり、身を居くこと清約、泊然として營むなし、閨門整肅、居恆客を喜ぶ、屬士日、に來り、文武を談論し、相親しむこと、猶骨肉のごとし、施いて采邑の民に及ぶ、愛慕すること猶父母のごときなり、其公に従ひて東するや、宗藩列辟、多くは席を虚ふして待つ、大猷大君も、亦素とより其名を聞けり、引見せんと將欲して會、薨す、後、南豐に適き、尋いで京師に遊ぶ、天朝の公卿、多くは親しく弟子の禮を執る名、一時に振ふ、其學朱王より出づと雖、自ら見る所あり、竟に一家を成す、其才最敏事に長ず、時を知り位

親執弟子禮、名振一時、其學雖出于朱王、自有所見、竟成一家、其才最長于政事、以知時處位爲要、以濟民富國爲務、其所施爲、始如迂濶、而其功見於久遠、備人到今、噴然稱之、長門山縣周南嘗觀其貢法、嘆曰、後世如有王者起、必取以爲法也。

錦天山房詩話、予搜索蕃山詩多年、未見其片言隻字有傳者、蓋此老懷豪傑之才、厚思於經濟、不屑以辭章著於世也、今所錄卽得之真蹟者、語意圓活、殊不似理學、者口氣、故或疑其錄古詩、然後題爲蕃山、且大田元禎跋語、亦稱爲罕觀、則其爲自選、不復容疑也、予又嘗觀一友人所藏蕃山扇頭書元人詩、筆力遒美、雖名善書、

に處するを以て要と爲し、民を濟ひ、國を富ますを以て務と爲す、其施爲する所、始めは迂濶の如くなるも、而も其功久遠に見はる、備人今に到るまで噴然として之れを稱す、長門の山縣周南、嘗て其貢法を觀て嘆じて曰、後世如し王者起るあらば、必取りて以て法と爲さんと。

錦天山房詩話、予、蕃山の詩を搜索すること多年、未だ其片言隻字傳ふる者あるを見ず、蓋此の老、豪傑の才を懷き、思を經濟に覃くし、辭章を以て世に著はるゝを屑とせず、今錄する所は、即ち之れを真蹟に得る者にして、語意圓活、殊に理學者の口氣に似ず、故に或は其古詩を錄するかと疑ふ、然ども後に題して蕃山紳すと爲す、且大田元禎の跋語、亦稱して罕觀と爲す、則其の自選たる、復疑を容れざるなり、予又嘗て一友人藏する所の蕃山が扇頭に元人の詩を書するを觀る、筆力遒美、善書と名くる者と雖、恐くは之れを辨すること能はず、益、先輩の風流を歎じて、及ぶべからずと爲す。

者、恐不能辨之、益歎先輩風流爲不可及矣。

山崎嘉

字敬義、稱嘉右衛門、號闇齋、又號垂加、平安人、父清兵衛、仕木下侯、後致仕業、醫于京師、號淨因、母佐久間氏、有娠、祈比叡山神、一夜夢拜神時、老翁攜梅花一枝、來納左袖、遂生男、幼桀驁、不可制、托諸妙心寺、鬻髮名絕藏主、乃一意修禪、然姓行猶不悛、嘗與倫輩論議、詞塞、即夜竊就彼寢、火紙燵、或讀佛典、深夜忽拍案、放聲大笑、衆起怪問、曰笑釋迦虛誕、其豪邁不羈、皆此類也、衆議欲逐之、會土佐公子某、居妙心寺、見之、嘆曰、此兒神姿非常、後當有爲、乃

山崎嘉

字は敬義、嘉右衛門と稱す、闇齋と號す、又垂加と號す、平安の人、父清兵衛、木下侯に仕ふ、後致仕して醫を京師に業とす、淨因と號す、母佐久間氏、娠めるありて、比叡山神に祈る、一夜、神を拜する時、老翁が梅花一枝を携へ來りて左の袖に納るゝと夢みて、遂に男を生む、幼にして桀驁制すべからず、諸れを妙心寺に托す、鬻髮して絕藏主と名づく、乃、一意禪を修す、然に性行猶悛めず、嘗て倫輩と論議し詞塞がる、即夜竊に彼の寢に就き紙燵を火く、或は佛典を讀み、深夜忽ち案を拍ち、聲を放ちて大笑す、衆起きて怪み問ふ、曰、釋迦の虛誕を笑ふと、其の豪邁不羈、皆此の類なり、衆議之れを逐はんと欲す、會、土佐公子某、妙心寺に居り、之れを見て嘆じて曰、此の兒神姿常に非ず、後、當さに爲すあるべしと、乃之れをして土佐の吸江寺に學ばしむ、時に土佐に鴻儒小倉三省野中兼山あり、見て深く之れを器とし、其異端に陷いるを惜み、之れに四子及び程朱

道之學于土佐吸江寺時土佐有鴻儒小倉三省野中兼山見而深器之惜其陷異端示之四子及程朱書則大悅遂著髮歸於儒後來江戶教授名聲藉甚前後執筆者六千餘人會津侯井上侯等皆師尊之性峭嚴師弟之間儼如君臣其講書音吐如鐘面容如怒聽者凜然無敢仰見晚從吉川惟足學本邦所謂神道遂立一家言留守女信退藏曰唱道學者世不乏人而獨推闇齋山崎先生爲儒宗識者號稱日本朱子其學問之純粹造詣之卓越可謂繼往聖開來學矣其所著述編輯之書數千百卷梓行于世使弟子治經專熟看於正文朱注之意而不注目於元明諸儒之末

の書を示す、則大に悦び、遂に髮を蓄へて儒に歸す、後江戶に來りて教授す、名聲藉甚、前後執筆者六千餘人、會津侯井上侯等皆之れを師尊す、性峭嚴、師弟の間、儼として君臣の如し、其書を講ずる、音吐、鐘の如く、面容怒るが如し、聽く者凜然として敢て仰ぎ見るたし、晚に吉川惟足に従ひ、本邦の謂はゆる神道を學び、遂に一家言を立つ。

留守女信退藏曰、道學を唱ふる者、世に人に乏しからず、而して闇齋山崎先生を推して儒宗と爲す、識者號して日本の朱子と稱す、其學問の純粹、造詣の卓越、往聖に繼ぎ來學を開くと謂ふ可し、其著述編輯する所の書、數千百卷、世に梓行す、弟子をして經を治めしむるに、専ら正文朱注の意を熟看して、目を元明諸儒の末疏に注せしめず、嘗て言ふ、釋詁訓解彌多くして、正文大注彌闕る、實に洪水猛獸の災より甚しき者なりと、

疏嘗言釋詁訓解彌多、正文大注彌闕實甚於洪水猛獸之災者也、著中和集說、以發明未發已發之微旨、撰仁說問答及玉山講義、附錄以推演仁愛之親切、成性論明備錄、以開示氣質本然之性、又於周易則有朱易衍義、於洪範則有全書、平素指導、以居敬窮理之功、詳出處而尚行實、貴王道而賤霸業、行四時之薦、居三年之喪、以獎誘其徒、於是一變從古、善道者甚衆、原華公道曰、閻齋爲詩、直寫其意、不屑磨鍛華飾、然秋鶯詩云云、○詩云、居諸代、謝四時中、花散葉濃、復見紅、忽有金衣公子、○秋風影裏、聽春風、頗爲合調、又登愛宕山云、空手徒行登宕阜、同遊相語路先後、頑夫自古騎災祥、愚將到今選勝負、願毀

錦天山房詩話上册

中和集說を著し、以て未發已發の微旨を發明し、仁說問答及び玉山講義を撰し、附錄して以て仁愛の親切を推演し、性論明備錄を成し、以て氣質本然の性を開示す、又周易に於いては、則朱易衍義あり、洪範に於いては、則全書あり、平素指導するに、居敬窮理の功を以てし、出處を詳かにし、而して行實を尙ぶ、王道を貴んで、而して霸業を賤しむ、四時の薦を行ひ、三年の喪に居り、以て其徒を獎誘す、是に於て一變して古に從ひ道を善くする者衆し。

原華公道曰、閻齋の詩を爲る、直に其意を寫して、磨鍛華飾を屑とせず、然るに秋鶯の詩云云、頗合調と爲す、又愛宕山に登るに云々、空手徒行宕阜に登る、同遊相語りて路先後、頑夫古より災祥を騎り、愚將今に到りて勝負を憑む、願くば官房を毀ちて地藏に歸し、且杉檜を驅りて天狗を刺らん、山神の使者飛鳥聲す、妙用顯然君見るや否や」と、此れ氣象豪宕にして人意を快

宮房、跡地蔵、且驅杉檜刺天狗、山神使者
 飛鷹、豎妙用顯然、君見否、此可謂氣象豪
 宕、快人意者、又宇都山咏十圍子云、太極
 十圍圈、都來是一貫、今此粉圍子、誰成茂
 叔看、又一二三四五、六七八九十、貫得天
 地數、無過無不及、此奇趣、造語不容他人
 到、又一時傳誦者、士山八面擬八陣云、富
 士甲扶桑、山頭面八方、天地一望裏、風雲
 屯巖傍、變態成龍虎、蛇蟠鳥翱翔、誰哉繼
 風后、制陳奉君王。

米川一貞

字幹叔、稱儀兵衛、號操軒、平安人、父服買、
 見一貞自幼嗜書、不欲區區逐利、命就三
 宅寄齋學、寄齋期以遠到、寄齋沒、乃謁山

にする者と謂ふべし、又、宇都山、十圍子を咏するに云
 ふ、太極十圍圈、都來是れ一貫、今此の粉圍子、誰か茂叔
 の看を成す、又、一二三四五、六七八九十、貫き得たり天
 地の數、過なく不及なし」と、此れ奇趣、造語他人到るべ
 からず、又、一時傳誦する者、士山八面八陣に擬するに
 云ふ、富士扶桑に甲たり、山頭八方に面す、天地一望の
 裏、風雲巖傍に屯す、變態龍虎を成し、蛇蟠り鳥翱翔す、
 誰そや風后に繼ぎ陳を制して君王に奉ぜん。

米川一貞

字は幹叔、儀兵衛と稱す、操軒と號す、平安の人なり、父
 は買に服す、一貞、幼より書を嗜み、區々として利を逐
 ふを欲せざるを見て、命じて三宅寄齋に就いて學ばし
 む、寄齋期するに遠到を以てす、寄齋沒す、乃、山崎園齋

崎闇齋請益遂以性行篤學名于世而不
 干祿位公侯徵辟並不就壹奉程朱之說
 四子小近書易等外不欲泛觀他書所友
 皆一時名士也如藤井懶齋仲村惕齋貞
 原益軒皆與交善及沒各悼惜以紀其學
 德而益軒所錄最足以想象其生平曰先
 生之爲人也明敏而有志操求福不回其
 接人也嚴而和其處事也敬異而不苟其
 出言也辯而有序聞焉者不厭其爲學也
 純正專好經術平日用心於程朱之書最
 勤不好雜書文中子所謂不雜學故明者
 其此人之謂乎舊與伊藤仁齋善及仁齋
 唱古義以非斥朱儒乃修書曰朱子得聖
 人之道吾子持異言排之語養德之學則

錦天山房詩話上冊

に請して益を請ひ、遂に性行篤學を以て世に名あり、
 而して祿位を干めず、公侯の徵辟、竝に就かず、壹に程
 朱の説を奉じ、四子小近書易等の外、他書を泛觀する
 を欲せず、友とする所、皆一時の名士なり、藤井懶齋中
 村惕齋貞原益軒の如き、皆與に交り善し、沒するに及
 んで各、悼惜し以て其學德を紀す、而して益軒の錄す
 る所、最、以て其生平を想象するに足れり、曰先生の
 人と爲りや、明敏にして志操あり、福を求めて回ならず、
 其人に接するや、嚴にして和、其事に處するや、敬異に
 して苟せず、其言を出だすや、辯にして序あり、焉れを
 聞く者厭はず、其學たるや、純正、専ら經術を好み、平日、
 心を程朱の書に用ひ、最勤む、雜書を好まず、文中子の
 謂はゆる雜學せざるが故に明とは、其れ此の人を之れ
 謂ふか、舊とより伊藤仁齋と善し、仁齋が古義を唱へ
 以て宋儒を非斥するに及んで、乃書を修して曰、朱子、
 聖人の道を得、吾子は異言を排して之れを排す、養德
 の學を語れば、則薄德たり、講學の事を語れば、則學に
 益なし、是れ之れを聖教の罪人と謂ふ、速に之れを改
 むれば則止む、しからずんば契分日久しと雖、絶たざ
 るを得ずと、其言切に至る、而して仁齋聽かず、遂に絶

爲薄德、語講學之事、則無益於學、是謂之聖教罪人、速改之則止矣、不則雖契分日久、不得不絕焉、其言切至、而仁齋不聽焉、遂贈絕交書。

雨森東伯陽曰、米川操軒、中村惕齋、藤井懶齋、固不可以博學名之、然其立身卓偉、自修謹嚴、亦可以爲篤行鄉先生。

藤井臧

字季廉、號懶齋、又號伊嵩子、筑後人、初稱眞名部忠菴、以醫官久留米侯、嘗療一病者、而不能、自以爲誤治所致、於是慨然投七辭事、乃入京、專修儒業、退居鳴瀧村、超然絕世、異其學、宗紫陽、高談性理、一時褒然、有隱君子聲、性素豪邁、及老益慷慨、每

交書を贈れり。

雨森東伯陽曰、米川操軒、中村惕齋、藤井懶齋、固より博學を以て之れを名づくべからず、然るに其身を立つること卓偉、自ら修すること謹嚴、亦以て篤行の郷先生と爲すべし。

藤井臧

字は季廉、懶齋と號す、又、伊嵩子と號す、筑後の人、初め眞名部忠菴と稱す、醫を以て久留米侯に官す、嘗て一病者を療し、而して能くせず、自ら以爲へらく誤治の致す所なりと、是に於て慨然として七を投じ、事を辭し、乃ち京に入りて専ら儒業を修す、鳴瀧村に退居し、超然として世界を絶つ、其學、紫陽を宗とし、高く性理を談す、一時褒然として隱君子の聲あり、性素と豪邁老に及んで益、慷慨、毎に曰、余一策あり、關東若し吾れ

曰余有一策、關東若召吾、則兼程而至、即日獻之、朝陳夕死、無復憾矣、年八十餘卒、子名國平、號象水、卓犖喜兵、好說天下之形勢、米川操、中村惕齋、皆其父執、深惡之、然國平不以爲意、父亦不禁焉、象水嘗作詩云、驥足未乘千里風、蝸廬縮首艸萊雄、眼前什物雖云笑、十萬甲兵屯腹中、室鳩巢和之云、洛西高士有家風、何事英材慕七雄、百萬貔貅無一事、休將些子上胸中。

仲村之歛

字敬甫、號惕齋、稱仲二郎、又稱七左衛門、平安人、幼童不群、厚重不好嬉戲、七八歲受句讀於鄉師、不煩督責、及長篤實不喜

を召せば則兼程して至り、即日之れを獻ぜん、朝に陳べ夕に死すとも、復憾みなしと、年八十餘にして卒す、子名は國平、象水と號す、卓犖、兵を喜び、好んで天下の形勢を説く、米川操、中村惕齋は皆其父執なり、深く之れを惡む、然るに國平以て意と爲さず、父亦禁せず、象水嘗て詩を作りて云ふ、驥足未だ千里の風に乘ぜず、蝸廬首を縮む艸萊の雄、眼前の什物笑ふと云ふと雖、十萬の甲兵腹中に屯すと、室鳩巢之れに和して云ふ、洛西の高士家風あり、何事ぞ英材七雄を慕ふ、百萬の貔貅一事なし、些子を將て胸中に上すを休めよ。

仲村之歛

字は敬甫、惕齋と號す、仲二郎と稱す、又、七左衛門と稱す、平安の人、幼童にして群ならず、厚重にして嬉戲を好まず、七八歳のとき、句讀を郷師に受け、督責を煩さず、長ずるに及んで、篤實にして浮靡を喜ばず、功名財

日本詩話叢書

八四

浮靡於功名財利、澹然不顧、雖少長于賈
 豎之間、不知物價、家世素封、而盈縮無所
 問、爲管長所賊、墨親申欲以鳴官、不可曰
 以私財損人性命、不慈莫大焉、從是家道
 日湮、而亦不爲意、杜門潛心、凡所學靡不
 通曉、天文地理、尺度量衡、類皆能究極之、
 而尤邃于禮、其處家行己、吉凶及日用之
 間、一軌於古道、言動不苟、又審音律、其所
 發明者、雖當世達者、欽服之、性好著書、凡
 所著四十五部、三百十八卷、少伊藤仁齋
 二歲、韻頡齊名、當世稱曰、惕齋、難弟、仁齋
 難弟。

貝原篤信

字子誠、稱久兵衛、號益軒、又號損軒、筑前

利に於いて、澹然として顧みず、賈豎の間に少長すと
 雖、物價を知らず、家世素封、而して盈縮問ふ所無し、嘗
 て管長に賊墨せらる、親申以て官に鳴らさんと欲す、
 可かずして曰、私財を以て人の性命を損す、不慈焉これよ
 り大なるは莫しと、是より家道日に湮む、而して亦意
 とせず、門を杜ち心を潜め、凡そ學ぶ所通曉せざるは
 靡し、天文地理、尺度量衡、類皆能く之れを究極す、而し
 て尤禮に達し、其家に處り己を行ふ、吉凶及び日用の
 間、一に古道に軌し、言動苟せず、又音律を審にし、其
 發明する所の者は、當世の達者と雖、之れに欽服す、性
 著書を好み、凡そ著す所四十五部、三百十八卷、伊藤仁
 齋より少きこと二歲、韻頡して名を齊くす、當世稱し
 て曰、惕齋は兄たり難く、仁齋は弟たり難しと。

貝原篤信

字は子誠、久兵衛と稱す、益軒と號す、又、損軒と號す、筑

人仕國侯、自幼警敏、有殊質、九歲就兄存齋讀書、多成暗誦、後入京講學、都下名彥皆傾心下之、遂以博見篤學、名重海內、學無常師、初於陸象山、王陽明說、皆有所取焉、及後讀學菴通辯壹歸、依朱學、雖然晚年著大疑錄、以太極本無極、陰陽非道、所以陰陽者道、性有本然氣質、理無生死、及體用一源、顯微無間、主一無適、冲漠無朕等之說、爲與聖經有徑庭、爲人謙恭純篤、好著書、而救世之心實苦、所著百有餘種、多書以國字語極懇切、田夫紅女、童兒隸卒、皆便之、好探討奇勝名區、足跡幾遍天下、亦皆詳紀行程勝跡、以便旅人、又善修養、投老猶矍矍不衰、歷仕三君、禮遇優

前の人國侯に仕ふ、幼より警敏、殊質あり、九歳、兄存齋に就きて書を讀み、多くは暗誦を成す、後京に入り學を講ず、都下の名彥、皆心を傾けて之れに下る、遂に博見篤學を以て、名海内に重し、學に常師なし、初め陸象山、王陽明の説に於て、皆取る所あり、後、學菴通辯を讀むに及んで、豈に朱學に歸依す、然りと雖、晩年に大疑錄を著して、太極は本と無極、陰陽は道に非ず、陰陽する所以の者は道なり、性に本然氣質あり、理に生死なし、及び體用一源、顯微無間、主一無適、冲漠無朕等の説を以て、聖經と徑庭ありと爲せり、人と爲り謙恭純篤にして、著書を好む、而して世を救ふの心、實に苦し、著はず所百有餘種、多く書するに國字を以てし、語は懇切を極む、田夫紅女、童兒隸卒も皆之れを便とす、好んで奇勝名區を探討し、足跡幾んど天下に遍し、亦皆詳に行程勝跡を紀し、以て旅人に便にす、又善く修養し、老に投るも矍矍々として衰へず、三君に歴仕し、禮遇優渥、果りに食邑を加ふ、元祿庚辰、骸骨を乞ひ、京師に隱居す、薄尚、月俸を賜ひ以て優す、年八十五にして卒す、終に臨んで詩二首、偈歌一首を賦し、以て志を見す、著に慎思錄、初學知要、自娛集、小學備考、近思錄備考

渥累加食邑元祿庚辰乞骸骨隱居京師、
 藩尙賜月俸以優焉年八十五卒臨終賦
 詩二首倭歌一首以見志著有慎思錄初
 學知要自娛集小學備考近思錄備考筑
 前風土記大和本草初學詩法等書凡一
 百餘種妻江崎氏名初字得生號東軒才
 德竝全治經通史善嫺文墨工作隸字又
 咏國風常從夫遊歷勝地所著遊記實多
 內助云伊藤東涯賞之曰躬孟光之賢而
 兼衛氏之筆。

太宰純德夫曰益軒博學洽聞海內無比。
 江村綬君錫曰元和以來稱饒者述者東
 涯徂徠之外蓋無如益軒者其所撰不爲
 名高勤益後人乃至家範鄉訓樹藝製造

筑前風土記大和本草初學詩法等の書凡そ一百餘種
 あり妻江崎氏名は初字は得生東軒と號す才德竝
 び全し經を治め史に通じ善く文墨に嫺み工に隸字
 を作る又國風を咏じ常に夫に従ひ勝地に遊歴し著
 す所の遊記實に内助多しと云ふ伊藤東涯之れを賞
 して曰孟光の賢を躬にして衛氏の筆を兼ねと。

太宰純德夫曰益軒博學洽聞海內比なしと。

江村綬君錫曰元和以來著述饒き者を稱するに東涯
 徂徠の外蓋益軒に如く者なし其撰する所名高を爲
 さず勤めて後人を益す乃ち家範鄉訓樹藝製造に
 至るまで歴々懇々たり余少年の時事意を解せず其

聲響懇懇、余少年時、不解事、意輕其學術、今而思之、殊爲懺悔、其詩亦朴實矣。

原善公道曰、益軒雖時作詩、素好倭歌、而不好詩、每謂詩爲無用閑言語、曰、和歌者我國俗之所宜、而詞意易通曉、故古人歌咏極精絕矣、古昔雖婦女亦能之者多矣、唐詩者非本邦風土之所宜、其詞韻異于國俗之言語、難摸倣之中華、故雖古昔之名家、其所作拙劣不及于和歌也、遠矣、我邦只可以、和歌言其志、述其情、不要作拙詩、以招論癡符之誚、又曰、白樂天、以謂作詩者勞心虛役聲氣、連朝接夕、不自知其苦、非魔而何、愚謂此以詩爲魔也、其言宜

學術を輕んず、今にして之れを思ふに、殊に懺悔を爲す、其詩亦朴實なり。

原善公道曰、益軒時に詩を作ると雖、素とより和歌を好む、而して詩を好まず、毎に詩を謂ふて、無用の閑言語とす、曰、和歌は、我國俗の宜しき所、而して詞意通曉し易し、故に古人の歌咏精絶を極む、古昔、婦女と雖、亦之れを能くする者多し、唐詩は本邦風土の宜しき所に非ず、其詞韻、國俗の言語に異なり、之れを中華に摸倣し難し、故に古昔の名家と雖、其の作る所拙劣にして和歌に及ばざるや、選し、我邦、只和歌を以て其志を言ひ其情を述ぶべし、拙詩を作り以て論癡符の誚を招くを要せず、又曰、白樂天、以謂へらく詩を作る者は心を勞し虚しく聲氣を役し、連朝接夕するも自ら其苦を知らず、魔に非ずして何ぞと、愚謂ふに、此れ詩を以て魔と爲す、其言宜なり、然り而して樂天其言此の如し、而して爲す所は、詩魔の懺す所となるを免れざる者

矣、然而樂天其言如此、而所爲不免爲詩魔所惱者、何邪、嘗居東將歸、取路于海上、同船數人、名姓不相知、雜然相向喋喋相語、中有一少年、兀顏談經、旁若無人、益軒暗無言、若無能者、既而及船達岸、各告其姓名鄉里、則少年始知爲益軒、慙然不自容、遂不陳其名、鼠竄去。

角田簡大可曰、益軒嘗與五井持軒書曰、僕年既踰八十、而文字結習、未能解去、每宵讀書、尙至夜半、性雖陋劣也、近日獲得見解、吾子有意乎對論、則時見寄書、其精力老而不衰、可以見焉。

宇都宮三近

字由的、號通庵、又號頑拙、周防人、仕巖國

は何ぞやと、嘗て東に居り、將に歸らんとし、路を海上に取る、同船數人、名姓相知らず、雜然として相向ひ喋々として相語る、中に一少年あり、兀顏經を談ず、旁人なきが若し、益軒暗して言ふなし、能なき者の若し、既にして船岸に達し、各其姓名郷里を告ぐるに及び、則少年始めて益軒たるを知り、慙然として自ら容れられず、遂に其名を陳べず、鼠竄して去る。

角田簡大可曰、益軒嘗て五井持軒に與ふる書に曰、僕年既に八十を踰へ、而して文字の結習未だ解き去る能はず、每宵書を讀み、尙夜半に至る、性、陋劣と雖、近日獲得見解を得たり、吾子討論に意あらば、則時に書を寄せられよと、其精力老ひて衰へざる、以て見るべし。

宇都宮三近

字は由的、通庵と號す、又、頑拙と號す、周防の人、巖國吉

吉川氏、幼遊京師、學於松永尺五、明曆丁酉歸郷、時年二十四、嘗著日本人物史、有事觸忌諱者、以此得罪大府、乃於嚴國禁錮、數年遭赦、於是又入京、一以教授爲任、久之名益重、所著遯庵詩集、及四子標注、竝行於世。

江村毅君錫曰、遯庵詩集、弟子恕方者輯錄、其序云、先生著述罹災、今所存特晚年作云云、余閱其集、詩猶千餘首、七絕最多、至七百首、其客中書懷一絕、悽愴婉約、可稱佳作、其他則蕪陋淺俗、可笑者不鮮、十翻其九、則可不朽矣。

三宅重固

字丹治、幼名儀左衛門、號尙齋、播磨人、父

錦天山房辭話上冊

川氏に仕ふ、幼にして京師に遊び、松永尺五に學ぶ、明曆丁酉、郷に歸る、時に年二十四、嘗て日本人物史を著し、事の忌諱に觸るゝ者あり、此を以て罪を大府に得、乃、嚴國に於て禁錮せらる、數年にして赦に遭ふ、是に於て又京に入り、一に教授を以て任と爲す、之れを久ふして名益重し、著す所遯庵詩集、及四子標注、竝に世に行はる。

江村毅君錫曰、遯庵詩集、弟子恕方といふ者輯録す、其序に云ふ、先生著述、災に罹る、今存する所は、特に晩年の作と云々、余、其集を閱するに、詩猶千餘首あり、七絶最多し、七百首に至る、其客中書懷一絶、悽愴婉約、佳作と稱すべし、其他は則、蕪陋淺俗、笑ふべき者鮮からず、十に其九を翻れば、不朽なるべし。

三宅重固

字は丹治、幼名は儀左衛門、尙齋と號す、播磨の人なり

重直爲人後冒平手氏丹治幼時從其氏、
 祝髮學醫、父命之也、年十六喪父、十九入
 山崎闇齋門、專攻儒學、於是種髮始復、三
 宅氏後來江戶、教授生徒、遂應阿部侯辟、
 元祿中常憲大君臨侯邸、命講論語、賜衣
 服、就官忠直、務盡其誠、居十年以言不行、
 移疾乞致仕、不允、數乞不止、以是得罪、竇
 永丁亥幽囚于忍、友人三輪執齋、細井廣
 澤等憫之、爲請宥、而不能得、越三年會赦
 而放、於是去之京師、以儒爲業、晚私做大
 小學校、建培根達支二堂于勘解由坊、爲
 人氣象雄豪、其在囹圄也、危難窘迫之際、
 處之裕如、乃謂古人破刑尙能著書、吾寧
 無爲而待斃、然筆墨不可得、因刺臂、血書

父重直、人の後と爲りて平出氏を冒す、丹治、幼時、其氏
 に従ふ、祝髮して醫を學ぶ、父之れを命するなり、年十
 六、父を喪ふ、十九、山崎闇齋の門に入り、専ら儒學を攻
 む、是に是て髮を種う、始めて三宅氏に復す、後、江戸に
 來り生徒を教授し、遂に阿部侯の辟に應ず、元祿中、常
 憲大君、侯邸に臨み、命じて論語を講せしめ、衣服を賜
 ふ、官に就いて忠直、務めて其誠を盡くす、居ること十
 年、言、行はれざるを以て、疾を移して致仕を乞へども、
 允されず、數、乞ふて止まず、是を以て罪を得、竇永丁亥
 忍に幽囚せらる、友人三輪執齋、細井廣澤等之れを憫
 み、爲に宥を請ふ、而して得ると能はず、越えて三年、赦
 に會ふて放たる、是に於て去りて京師に之き、儒を以
 て業と爲す、晚に私に大小學校に做ひ、培根達支の二
 堂を勘解由坊に建つ、人と爲り氣象雄豪、其囹圄に在
 るや、危難窘迫の際、之れに處して裕如たり、乃謂ふ古
 人刑せられて尙能く書を著はす、吾寧ぞ爲すこと無く
 して斃るゝを待たんやと、然ども筆墨得べからず、因
 りて臂を刺して狼毫餘三卷を血書す、忍候、嘗て人を
 して之れを察せしむ、即ち時を口占して之れを示す、
 既に忍を去り、業を京師に講す、摺紳列侯從遊する者

狼蹙錄三卷、忍侯嘗遣人察之、卽口占詩示之、既去、忍講業於京師、摺紳列侯從遊甚多、土佐侯請爲師、乃招來江戶、未幾、辭歸京、晚年復來江戶、舊君忍侯延而見之、道往事、嘆其忠直、初學于闇齋者三年、而闇齋歿、乃折衷於佐藤直方、淺見綱齋二子、二子以友誼待之、互相切劘、遂得山崎門三傑、其教人學規極嚴、而遇弟子甚厚、情款相盡、無有微隙、寬保中卒、年八十餘。

留守女信退藏曰、山崎先生易簣之後、升堂觀奧、號稱高弟、在京師、則綱齋淺見先生、尙齋三宅先生、與江戶佐藤直方先生三人是也、三宅先生乃僕所師事也。

甚多し、土佐侯請ふて師と爲す、乃江戶に招來す、未だ幾くならずして辭して京に歸る、晚年、復江戶に來る、舊君忍侯、延いて之れを見、往事を道ひ、其忠直を嘆す、初め闇齋に學ぶ者三年、而して闇齋歿す、乃佐藤直方、淺見綱齋二子に折衷す、二子友誼を以て之れを待つ、互に相切劘す、遂に山崎門三傑の聲を得たり、其人を教ふる學規極めて嚴、而して弟子を遇する甚厚く、情款相盡くす、微隙あることなし、寬保中卒す、年八十餘

留守女信退藏曰、山崎先生易簣の後、堂に升り奥を觀、號して高弟と稱す、京師に在りては、則綱齋淺見先生、尙齋三宅先生と、江戶の佐藤直方先生と三人是なり、三宅先生は乃僕の師事する所なり。

三輪希賢

字善藏、號執齋、又號躬耕廬、平安人、其先係大和三輪神社司祝、父曰、澤村自三、業醫、善藏六歲喪父、爲買人大村某鞠養、漸長、冒眞野氏、年十九、及佐藤直方之門、始曉承他姓、非古、即復本姓、後有悟王氏致良知之學、講說士大夫間、直方薦官、厩橋侯未幾、致仕而去、於是歸京、尋之、大阪、又來、江戶、尤諳達事體、其言優游、有餘味、能使聽者心醉、嘗抵近江小川村、集土民講學、四坐皆感泣服之、翕然相謂爲藤樹先生再生、又學國雅於內大臣中院、通其秘、寬保甲子正月廿五日卒、于平安、享年七十六。

三輪希賢

字は善藏、執齋と號す、又躬耕廬と號す、平安の人、其先は大和三輪神社の司祝に係る、父を澤村自三と曰ふ、醫を業とす、善藏六歳にして父を喪ひ、買人大村某に鞠養せらる、漸く長じて眞野氏を冒す、年十九、佐藤直方の門に及び、始めて他姓を承くるの古に非ざるを曉り、即、本姓に復す、後、王氏の致良知の學に悟るあり、士大夫の間に講説す、直方、薦めて厩橋侯に宣せしむ、未だ幾ならずして、致仕して去る、是に於て京に歸り、尋いで大阪に之き、又江戶に來り、尤、事體に諳達す、其言、優游として餘味あり、能く、聽く者をして心醉せしむ、嘗て近江小川村に抵り、土民を集めて學を講す、四坐皆感泣して、之れに服し、翕然として相謂つて藤樹先生の再生と爲す、又、國雅を内大臣中院に學び、其秘に通す、寬保甲子正月廿五日、平安に卒す、享年七十六。

朱之瑜卷十

字魯瑛、號舜水、明浙江餘姚人、父正、字存之、號定寰、爲總督漕運軍門、卒後贈光祿大夫上柱國、之瑜早喪、父及長、從朱永祐、張肯堂、吳鍾巒、學、遂擢恩貢生、尋累徵不就、以故被劾、乃避之舟山、而始來、此邦、移交趾、復還舟山、是時國祚旣蹙、知事不可爲、將之安南、風利不便、再來、此邦、不久又還舟山、其意素在得海外援兵、以舉義旗、乃三來、此邦、而援兵不可得、去復至安南、時清旣混壹、四方義不食其粟、四來、此邦、終不復還、時萬治二年也、初來居、此邦、窮困不能支、柳河安東省庵師事之、贈祿一半、久之水戶義公、聘爲賓師、寵待甚渥、然

朱之瑜卷十

字は魯瑛、舜水と號す、明、浙江餘姚の人、父正、字は存之、定寰と號す、總督と爲り、軍門に遭運す、卒して後光祿大夫上柱國を贈らる、之瑜、早く父を喪ひ、長ずるに及んで、朱永祐、張肯堂、吳鍾巒に従ひて學ぶ、遂に恩貢生に擢でられ、尋いで累りに徵さるれども就かず、故を以て劾せられ、乃避けて舟山に之く、而して始めて此邦に來り、交趾に移り、復、舟山に還る、是の時國祚旣に蹙まり、事の爲すべからざるを知り、將に安南に之かん、とす、風利便ならず、再、此の邦に來り、久しからずして又舟山に還る、其意素、海外の援兵を得て、以て義旗を擧ぐるに在り、乃ち三たび此の邦に來る、而して援兵得べからず、去りて復安南に至る、時に清旣に四方を混壹す、義、其粟を食まず、四たび此の邦に來り、終に復た還らず、時に萬治二年なり、初め來りて此の邦に居るや、窮困支ふる能はず、柳河の安東省庵、之れに師事し、祿一半を贈る、之れを久ふして、水戶義公、聘して賓師と爲す、寵待甚渥し、然るに儉節自ら奉じ、遂に三千餘金を儲ふ、終りに臨んで盡く之れを水戶庫内に納む、文恭と諡す、著す所舜水文集二十八卷あり、男大

儉節自奉、遂儲三千餘金、臨終盡納之、水
 戸庫內、諡文恭、所著有舜水文集二十八
 卷、男大成字集之、次大成、字成一、共殉節
 不事清、先舜水卒、大成亦舉二男、曰毓仁、
 曰毓德、延寶六年、毓仁慕舜水而來、長崎、
 義公遣今井弘濟、往通消息、然終不得與、
 舜水相見而歸。

新井異君美曰、舜水縮節積餘財、非苟而
 然矣、其意蓋在充舉義兵、以圖恢復之用、
 也、然時不至而終、可憫哉。

安積覺子先曰、寛文己酉之秋、義公張宴
 環景樓、泛舟淺草川、野傳唱聯句、文恭續
 之、曰山歟螺黛遠、高閣徹晴空、山指筑波
 山、閣指大悲閣、覺時童行侍側、平生所見

成字は集之、次は大成、字は成一、共に節に殉して清に
 事へず、舜水に先ちて卒す、大成も亦二男を擧ぐ、曰毓
 仁、曰毓德、延寶六年、毓仁、舜水を慕ひて長崎に來る、
 義公今井弘濟を遣はし、往きて消息を通ず、然るに終
 に舜水と相見ることを得ずして歸る。

新井異君美曰、舜水縮節して餘財を積む、苟もして然
 るに非ず、其意は蓋、義兵を擧げ以て恢復を圖るの用
 に充つるに在り、然るに時至らずして終る、憫むべき
 かな。

安積覺子先曰、寛文己酉の秋、義公、宴を環景樓に張り、
 舟を淺草川に泛べ、野傳、聯句を唱へ、文恭之れを續ぐ、
 曰、山か螺黛遠く、高閣晴空に徹すと、山は筑波山を指
 し、閣は大悲閣を指す、覺時に童行側に侍す、平生見る
 所、此の二句に止る。

止此二句。

原善公道曰、舜水不好作詩、與奥村庸禮書曰、吟詩作賦、非學也、而棄日廢時、必不可者也、空梁落燕泥、工則工矣、曾何益於治理、僧推月下門、覈則覈矣、曾何補於民事、雞聲茅店月、人跡板橋霜、新則新矣、曾何當於事機、而且燃髭嘔心、儻或不能工、綴、徒足供人指摘、又何益詩名、然猶評李杜曰、李不如杜、李秀而杜老、李奇險而杜平淡、李用成仙等語、更不經煉丹等、殊不雅、不若杜家常茶飲有味也、然不奇與之極、造不得平淡、有意學平淡、便水平煎豆腐湯矣。

錦天山房詩話、舜水不好作詩、如原氏所

錦天山房詩話上冊

原善公道曰、舜水、詩を作るを好まず、奥村庸禮に與ふる書に曰、詩を吟じ賦を作るは、學に非ざるなり、而して日を棄て時を廢す、必不可なる者なり、空梁燕泥を落とす、工は則工なり、曾ち何ぞ治理に益あらんや、僧は推す月下の門、覈は則覈なり、曾ち何ぞ民事に補あらんや、雞聲茅店の月、人跡板橋の霜、新は則新なり、曾ち何ぞ事機に當らんや、而して且髭を燃り心を嘔く、儻し或は工緻なる館はされば、徒に人の指摘に供するに足れり、又何ぞ詩名を益せんと、然れども猶李杜を評して曰、李は杜に如かず、李は秀で、杜は老ふ、李は奇險にして杜は平淡なり、李は仙と成る等の語を用ふ、更に煉丹を経ざる等、殊に雅ならず、杜の家常茶飯の味あるに若かず、然れども奇與の極にあらずんば、平淡に造り得ず、平淡を學ぶに意あれば、便ち水平煎豆腐湯となる。

錦天山房詩話、舜水詩を作るを好まず、原氏の言ふ所

九五

言、其集中不錄、故傳者甚稀、余所錄一係安濟泊湖亭涉筆中所載者、一則原公道先哲叢談中所錄者矣。

陳元贊

字義都、號昇菴、又號既白山人、明虎林人、崇禎進士、不第、避亂歸化、應徵至尾張、時時入京、又來江戶、與諸名人爲文字交、與僧元政、厚善、其平生所唱酬者、彙爲元元唱和集、行于世。

原善公道曰、元贊能纏此邦語、故常不用唐語、元政詩有人無世事、交常淡、客慣方言、譚每諧、又君能言和語、鄉音舌尙在、久狎十知九、傍人猶未解句、元贊善拳法、當時世未有此技、元贊創傳之、故此邦拳法

の如し、其集中に錄せず、故に傳ふる者甚稀なり、余が錄する所は一は安濟泊の湖亭涉筆中に載する所の者に係り、一は則原公道先哲叢談中に錄する所の者なり。

陳元贊

字は義都、昇菴と號す、又、既白山人と號す、明虎林の人、崇禎進士に第せず、亂を避けて歸化し、徵に應じて尾張に至り、時々京に入り、又江戶に来る、諸名人と文字の交を爲す、僧元政と厚く善し、其の平生唱酬する所の者、彙めて元々唱和集と爲し、世に行はる。

原善公道曰、元贊能く此の邦の語に纏ふ、故に常に唐語を用ひず、元政の詩に「人は世事なく交常に淡く、客は方言に慣れて譚毎に諧ふ」と、又、君能く和語を言ふも、郷音舌尙在り、久しく狎れて十に九を知る、傍人猶未だ解せず」の句あり、元贊拳法を善くす、當時世に未だ此技あらず、元贊創めて之れを傳ふ、故に此の邦の拳法は、元贊を以て開宗と爲す、正保中、江戸城南西久

以元贊爲開宗矣、正保中於江戶城南西
久保國正寺教徒、福野某三浦某磯貝某
皆窮其奧云。

何情

關中人、延寶乙卯借林珍來寓崎陽、大高
清介就正其詩文、二人極口揄揚、其詩數
首、附載芝山會稿中。

錦天山房詩話、扶桑名勝詩集中載二人
詩、作何情甫、林上珍、意其字歟、或所傳異
也、其評芝山詩文過譽、固亡論已、及其自
運、猥瑣萎茶、而芝山喜其諛言、終信而不
疑、亦可怪也。

洪浩然

朝鮮全羅道晉州人、豐太閤征韓攻拔晉

錦天山房詩話上冊

保國正寺に於て、徒に教ふ、福野某三浦某磯貝某皆其
奥を窮むと云ふ。

何情

關中の人、延寶乙卯、林珍と借に來り、崎陽に寓す、大高
清介、就いて其詩文を正さしむ、二人口を極めて揄揚
す、其詩數首、芝山會稿中に附載す。

錦天山房詩話、扶桑名勝詩集中に二人の詩を載す、何
情甫、林上珍と作す、意ふに其の字か、或は傳ふる所異
なるか、其、芝山の詩文を評する過譽、固より論なきの
み、其、自運に及んでは、猥瑣萎茶、而して芝山其諛を
喜び、終に信じて疑はず、亦怪しむべきなり。

洪浩然

朝鮮、全羅道、晉州の人、豐太閤の征韓、晉州城を攻拔す、

州城肥前侯□□引軍略地過山間見一童子擔巨筆翼身巖空侯見而奇之令中野左衛門撫視遂護送於藩即浩然也時年十二是時嗣侯□□監國憐而善遇之及長令就學京師五山因賜采地百石及學費五口數年業就而歸仕至近侍已老求還故土許之既行侯悔之使人追還明曆丁酉侯凶聞至自江戸洪然聞之悲慟四月八日往阿彌陀寺殉死年七十六浩然善書晚年益進。

李全道

字衛正號梅溪又號潛窩其父一恕字眞榮朝鮮慶尙道靈山人文祿之役年二十三爲我兵所掠來于此生衛正以文學仕

肥前侯□□軍を引いて地を畧す山間を過ぎて一童子の巨筆を擔ひ身を巖空に翼するを見る侯見て之を奇とし中野左衛門をして撫視せしめ遂に藩に護送す即浩然なり時に年十二是の時嗣侯□□國を監し憐んで善く之れを遇す長するに及んで京師五山に就學せしむ因て采地百石及び學費五口を賜ふ數年にして業就りて歸る仕へて近侍に至る已に老ひて故土に還らんとを求む之れを許す既に行く侯之れを悔ひ人をして之れを追ひ還さしむ明曆丁酉侯の凶聞江戸より至る洪然之れを聞きて悲慟す四月八日阿彌陀寺に往きて殉死す年七十六浩然書を善くし晚年益進む。

李全道

字は衛正梅溪と號す又潛窩と號す其父一恕字は眞榮朝鮮慶尙道靈山人文祿の役年二十三我兵の掠むる所となり此に來り衛正を生む文學を以て紀の南龍公に仕ふ莊地を城北梅溪に賜ふ因て以て號と

紀南龍公、賜莊地於城北梅溪、因以爲號、後再於城南大浦、賜莊、因又號江西、天和壬戌卒、年六十六、嘗奉公命、撰德川創業記、其他述撰亦多。

伊藤□□□□曰、余嘗讀永田善齋所著李眞榮墓誌、及衛正與朝鮮聘使朴文源書、考之、眞榮蓋浹川府君李瑤六世孫、爲楚囚、在我紀、以教授爲業、博瞻強記、最精易道、藩祖待以客禮、給其衣食、寬永癸酉卒、年六十三、時衛正尙少、就善齋受業、眞榮遺文、余纔見、編年互見、跋一篇。

田付圓方 卷十

稱四郎兵衛、世襲火器隊長、最精其技、傍好詩歌、延寶甲寅奉命率隊士往鎌倉三

爲す、後再び城南大浦に於て莊を賜ふ、因て又江西と號す、天和壬戌に卒す、年六十六、嘗て公命を奉じ、徳川創業記を撰す、其他述撰亦多し。

伊藤□□□□曰、余嘗、永田善齋の著す所の李眞榮墓誌、及び衛正が朝鮮聘使朴文源に與ふる書を讀みて之れを考ふるに、眞榮は蓋浹川府君李瑤の六世の孫にして、楚囚と爲りて我紀に在り、教授を以て業と爲す、博瞻強記、最、易道に精し、藩祖待つに客禮を以てし、其衣食を給す、寬永癸酉卒す、年六十三、時に衛正尙少し、善齋に就いて業を受く、眞榮遺文、余纔に編年互見の跋一篇を見るのみ。

田付圓方 卷十

四郎兵衛と稱す、世、火器隊長を襲ぐ、最、其技に精し、傍ら詩歌を好む、延寶甲寅、命を奉じ、隊士を率ひ、鎌倉三浦等の地に往き、野獸の禾稼を害する者を除き、猪

浦等地除野獸害禾稼者獲猪鹿凡百數、自作文紀其事、今此所錄皆其中所載者也。

錦天山房詩話、東照大君馬上得天下、及天下稍定、即偃武修文、介冑之士、皆知嚮學、彬彬焉、濟濟焉、所錄田村大島等、皆以武伎擅名於世、而能知屬文、風流溫藉、無一毫暴戾之氣、豈非國家德化涵濡之深乎、噫嘻美矣哉。

淺井忠

字一之、一名玄蕃、號貫齋、稱駒之助、少而事紀南龍公、蒙寵眷、公薨、守其家城、廬居于鴨溪、長保寺傍、自號半溪、爲人負奇節、不與世浮沈、元祿中、竟因是得罪、竄死于

鹿凡そ百數を獲、自ら文を作り其事を紀す、今此に錄する所、皆其の中に載する所の者なり。

錦天山房詩話、東照大君馬上に天下を得たり、天下稍定、るに及び、即武を偃せ文を修め、介冑の士は、皆學に嚮ふを知る、彬彬焉、濟濟焉、錄する所の田村大島等は、皆、武伎を以て名を世に擅にす、而して能く文を屬するを知る、風流溫藉、一毫暴戾の氣なし、豈國家德化涵濡の深きに非ずや、噫嘻、美いかな。

淺井忠

字は一之、一名は玄蕃、貫齋と號す、駒之助と稱す、少くして紀の南龍公に事へ、寵眷を蒙る、公薨じ、其家城を守り、鴨溪長保寺の傍に廬居す、自ら半溪と號す、人と爲り奇節を負ひ、世と浮沈せず、元祿中に竟に是に因て罪を得、勢州に竄死す、時に年四十八、素時の學士と

勢州、時年四十八、素與時學士相善、荒川蘭堂、嘗序其詩集、李清軒亦有詩、曰希世英雄、豈我群、堂膽氣尙彙文、其事歷、略詳于澁谷幽軒塵坑集。

澁谷方均

一名佳成、稱儀平、嘗事于紀南龍公、後致仕、號幽軒、又號閑棲庵、少而受學、永田善齋、博覽和漢書、綜諸家之言、其所著塵坑集、達天朝、經御覽、其他所述錄、凡數十部、悉記以和語、年八十五、享保癸丑卒、平生善和歌、而不多作詩、伊藤海藏著幽軒傳、叙其履歷、頗詳。

安東守約 卷十

字魯默、初名守正、號省庵、筑後人、仕柳川

相善し、荒川蘭堂、嘗て其詩集に序す、李清軒も亦詩あり、曰、希世の英雄、豈我が群ならんや、堂々膽氣尙文を兼ぬ、と、其の事歴は略、澁谷幽軒の塵坑集に詳なり。

澁谷方均

一名は佳成、儀平と稱す、嘗て紀の南龍公に事ふ、後致仕して幽軒と號す、又閑棲庵と號す、少ふして學を永田善齋に受く、博く和漢書を覽、諸家の言を綜ぶ、其所著塵坑集、天朝に達し、御覽を経たり、其他所述錄する所、凡そ數十部、悉く記するに和語を以てす、年八十五、享保癸丑卒す、平生、和歌を善くし、而して多く詩を作らず、伊藤海藏、幽軒傳を著す、其履歷を叙する、頗る詳なり。

安東守約 卷十

字は魯默、初めの名は守正、省庵と號す、筑後の人、柳川

侯、初學松永尺五、尺五沒後五年、朱舜水來、長崎、時人未及知其學、唯守約往師焉、時舜水貧甚、乃割祿之半贈之、至今稱爲一大高誼、於是學益富、行益修、伊藤東涯稱爲關西巨儒、清張斐文至、長崎、寄書及詩、以褒賞、詩中云、曾遞聲名到若耶、云云、性謙讓、告男守直遺訓曰、我無才、無德、汝與諸生、勿撰年譜、行狀、行實、碑銘、墓銘、及文集序等。

安東守經

一名述、字多記、守約之孫、家世仕柳川侯、十四喪親、親戚鄉黨皆惜其家學之不傳、守經發憤負笈京師、學於伊藤東涯、業成而歸、爲國文學、侯崇其耆德、禮遇優渥、爲

侯に仕ふ、初め松永尺五に學ぶ、尺五沒後五年、朱舜水長崎に來る、時人未だ其學を知るに及ばず、唯守約往いて師とす、時に舜水貧甚し、乃祿の半を割き、之れを附る、今に至るまで稱して一大高誼と爲す、是に於て學益富み、行益修る、伊藤東涯稱して關西の巨儒と爲す、清の張斐文、長崎に至り、書及び詩を寄せて、以て褒賞す、詩中に云ふ、曾て聲名を遞して若耶に至る云云と、性謙讓、男守直に告ぐる遺訓に曰、我れ才無く徳無し、汝と諸生と、年譜行狀行實、碑銘墓銘及び文集序等を撰する勿れと。

安東守經

一名は述、字は多記、守約の孫、家世、柳川侯に仕ふ、十四にして親を喪ふ、親戚鄉黨皆其の家學の傳はらざるを惜む、守經、憤を發して笈を京師に負ひ、伊藤東涯に學ぶ、業成りて歸り、國の文學と爲る、侯、其の耆德を崇め、禮遇優渥なり、人と爲り質直剛毅、好んで詩文を爲

人質直、剛毅、好爲詩文、至老不廢、清客沉
 燮庵來寓長崎、讀其文詩、大歎稱曰、道脈
 相傳、原原本本、不爽毫黍、又曰、洋洋洒洒
 無一滯筆、臨卒預撰墓表曰、省庵之孫、洞
 庵之子、繼紹家學、間有管見、華客燮庵稱
 其詩文、晚得於君、勸學東都、資父事君、志
 願亦足、屬續一朝、蓋棺千秋、匪養不慎、匪
 藥不效、命也有數、順而受之、其子守官輯
 遺稿十卷、名曰仕學齋文集

村上友佳卷十
八

字漫甫、號冬嶺、京師人、那波活所門人、業
 醫、叙法印、稱春臺院、寛永乙酉卒、年八十
 二。

伊藤長原藏曰、予昔卯角時、有肩輿而造

錦天山房詩話上冊

り、老に至りて廢せず、清客沈燮庵來りて長崎に寓す、
 其文詩を讀み、大に歎稱して曰、道脈相傳ふ、原々本々、
 毫黍を爽はずと、又曰、洋洋洒洒、一滯筆なしと、卒する
 に臨み、預め墓表を撰して曰、省庵の孫、洞庵の子、家學
 を繼紹し、間、管見あり、華客燮庵、其詩文を稱す、晚に
 君に得、東都に勤學し、父に資し君に事へ、志願亦足る、
 屬續一朝、蓋棺千秋、養ひ慎まざるに匪ず、藥、效あらざ
 るに匪ず、命なり數あり、順にして之れを受くと、其子
 守官、遺稿十卷を輯む、名づけて仕學齋文集と曰ふ。

村上友佳卷十
八

字は漫甫、冬嶺と號す、京師の人、那波活所の門人なり、
 醫を業とす、法印に叙す、春臺院と稱す、寛永乙酉卒す、
 年八十二。

伊藤長原藏曰、予昔卯角、時に肩輿して門に造る者あ

門者、肩、屬言徐、頽然坐于中堂、與先君子叙舊、晤語移日、暫而出、腰扇觀之、扇面有小楷數行、今尚依稀記得、漫與十絕也、予時稍知屬詩、翁索而觀之、吟弄數四、勸予成立、既歸、而問之先君子、曰、彼村上友怪翁、今之博雅聞人也、既而翁退休、與先君子及諸文儒、頻頻會集、賦詩讀書、予每與焉、尤善詩、有新詩、每必題扇頭、少有不穩字、與諸人評擯、按濕紙措去、更填好字、又與北村篤所氏諸人、會讀二十一史、月率六日、不避寒暑伏臘、其耽學亦厚矣。

江村毅君錫曰、冬嶺與余先大夫同學、相友善、余少年時、聞先考數稱其人、蓋好學天性、其推獎先達、揄揚後學、不啻如自其

り、肩、屬言徐、頽然として中堂に坐す、先君子と舊を叙し、晤語日を移す、暫くにして腰扇を出し、之れを觀る、扇面に小楷數行あり、今尚依稀として記得す、漫與十絶なり、予時に稍、詩を屬するを知る、翁索めて之れを觀る、吟弄數四、予に成立を勸む、既に歸る、而して之を先君子に問ふに、曰、彼は村上友怪翁なり、今の博雅の聞人なりと、既にして翁退休す、先君子及び諸文儒と、頻々會集す、詩を賦し書を読む、予毎に與る、尤詩を善くし、新詩あれば、毎に必扇頭に題し、少く穩かならざる字あれば、諸人と評擯し、濕紙を按し措り去り、更に好字を填む、又、北村篤所氏諸人と二十一史を會讀し、月に率ね六日、寒暑伏臘を避けず、其耽學亦厚し。

江村毅君錫曰、冬嶺は余の先大夫と同學、相友とし善し、余、少年の時、先考の數、其人を稱するを聞く、蓋、好學天性、其先達を推獎し、後學を揄揚すること、實に其口より出づるが如く、なみのみならず、一に以て己れの

口出、一以爲己任、後進所作、時有佳句、則擊節嘆稱、吟誦數回、一時藝苑、賴之吐氣、其自運亦矯矯乎一時矣、今讀冬嶺詩、精深工整、超出前輩、元和以後七言律、到此始得其體。

伊藤宗恕

字元務、號坦庵、又號自怡堂人、京師人、學于那波活所、仕越前侯、爲儒官、寶永戊子卒、年八十六、所著有坦庵遺稿。

伊藤風長原藏曰、侍先子、社中賞月、有客後至、長身古貌、不揖而入、衆虛左而待之、坐定先子使予見曰、彼所謂坦庵先生、出活所先生之門、爲當世儒林巨擘、庚辰之春、先生招冬嶺、及先子夜話、予亦從焉、先生

任と爲す、後進作る所、時に佳句あれば、則節を撃ちて嘆稱し、吟誦數回す、一時藝苑之れに賴りて氣を吐く、其自運も亦一時に矯々たり、今、冬嶺の詩を讀むに、精深工整、前輩に超出す、元和以後七言律、此に到りて始めて其體を得たり。

伊藤宗恕

字は元務、坦庵と號す、又、自怡堂人と號す、京師の人、那波活所に學ぶ、越前侯に仕へ、儒官と爲る、寶永戊子卒、年八十六、著す所、坦庵遺稿あり。

伊藤風長原藏曰、先子に侍し社中に月を賞す、客あり後れて至る、長身古貌、揖せずして入る、衆、左を虛うして之れを待つ、坐定まる、先子、予をして見せしめて曰、彼れは謂はゆる坦庵先生なり、活所先生の門に出でて、當世儒林の巨擘たりと、庚辰の春、先生、冬嶺及先子を招き夜話す、予も亦從ふ、先生、詩を賦して云ふ、聚星是れ荀公の宅ならず、尙齒選て居る白氏の先と、先子答

賦詩云、聚星不是荀公宅、尙齒還居白氏先、先子答賦曰、社中耆舊多淪謝、只有衰翁與二公、今夜春風樓上酒、更知濃似舊來濃、前時先生之既老也、雙字落紙、人間爭騰、以爲模則。

熊谷立閑卷十

字靖甫、號荔齋、又號了菴、洛陽人、以講說爲業、門人山田三柳輯錄其詩、名曰荔齋吟餘、刊以傳、按釋如實昌堂序其集、極其推重、實則曰、句俊而逸、調高而清、誠詩中之鏗鏗者、昌則曰、一字一句、有格有致、內含天然之妙趣、外盡物化之性理、對此則萬境宛然、吟此一心寂矣、今閱其集、則句格不麗、瓊瑜不相揜、未必若二柄所稱也。

賦して曰、社中の耆舊多くは淪謝、只、衰翁と二公とあり、今夜春風樓上の酒、更に知る舊來の濃なるよりも濃なり」と、前時、先生の既に老ゆるや、雙字紙に落せば、人間争ひ騰して、以て模則と爲す。

熊谷立閑卷十

字は靖甫、荔齋と號す、又了菴と號す、洛陽の人、講說を以て業と爲す、門人山田三柳、其詩を輯録し、名けて荔齋吟餘と曰ひ、刊して以て傳ふ、按ずるに釋の如實昌堂、其集に序し、其推重を極む、實は則ち曰、句俊にして逸、調高くして清、誠詩中の鏗々たる者と、昌は則曰、一字一句、格あり致あり、内は天然の妙趣を含み、外は物化の性理を盡す、此れに對すれば萬境宛然、此れを吟すれば一心寂たりと、今、其集を閱するに、則、句格麗らず、瓊瑜相揜はず、未だ必しも二柄の稱する所の若くならず、然ども頗晚唐の風味あり、當時に在りては、則固より鐵中の錚々たる者なり。

然頗有晚唐風味、在當時、則固鐵中之錐
録者。

仲村興

字子文、自號信齋、又號風浪山人、所居稱
市霞洞學齋、稱屠龍塾、東武人所著有霞
洞集、風浪集等、行於世。

渡邊宗臨卷二

字道生、號正庵、日向延岡人、父曰益西、隱
居不仕、道生沈黙好學、成童游學京師、時
承戰争之餘、文教掃地、且郷處僻遠、人不
知學、宗臨孜孜教導、久而信服、受業百人、
日誦詩書、仕有馬侯純侍講嗣君、嗣君寵
昵嬖臣、中外離心、道生與其傅切諫、不聽、
遂禁錮、後居郷茅屋三間、鬻藥自業、道生

錦天山房詩話上冊

仲村興

字は子文、自ら信齋と號す、又風浪山人と號す、居る所、
市霞洞學齋と稱し、屠龍塾と稱す、東武の人なり、著す
所、霞洞集、風浪集等あり、世に行はる。

渡邊宗臨卷二

字は道生、正庵と號す、日向延岡の人、父を益西と曰ふ、
隱居して仕へず、道生、沈黙にして學を好み、成童、京師
に游學す、時に戰争の餘を承け、文教地を掃ふ、且、郷、僻
遠に處し、人、學を知らず、宗臨、孜孜として教導し、久ふ
して信服す、業を受るもの百人、日に詩書を誦す、有馬
侯純に仕へ、嗣君に侍講す、嗣君、嬖臣を寵昵し、中外心
を離す、道生、其傅と切諫すれども、聽かず、遂に禁錮せ
らる、後、郷に居る、茅屋三間、藥を鬻ぎ自ら業とす、道
生、天資篤實、廉退、嘗て忠臣篤敬、玩物喪志等の語を嘗
し、以て自ら警む、沈離顛沛の際と雖、未だ嘗て其君を

天資篤實廉退、嘗書忠信篤敬玩物喪志等語、以自警、雖流離顛沛之際、未嘗忘其君也、元祿己卯卒、年六十九、子榮字元安、亦好學、學於伊藤仁齋。

笠原龍鱗^{卷二}

十一

號雲溪、稱玄菴、京師人、以善詩稱於世、著有桐葉編、其門人野春編定而行于世。

江村綬君錫曰、自惺窩先生講學於京師、百有餘年于茲、其間雖有以詩賦文章稱者、風俗未漓、學必本經史、以翰墨爲緒餘、而雲溪獨以詩行、是時仁齋門人中島正佐者、專業講說、而所講不出四書、終始循環、一日數席、諸州生徒輻湊、其門、雲溪居止、接近正佐、乃以詩授人、生徒以爲便、於

忘れず、元祿己卯卒す、年六十九、子榮字は元安、亦學を好み、伊藤仁齋に學ぶ。

笠原龍鱗^{卷二}

十一

雲溪と號す、玄菴と稱す、京師の人、詩を善くするを以て世に稱せらる、昔に桐葉編あり、其門人野春、編定して世に行ふ。

江村綬君錫曰、惺窩先生京師に講學せしより、茲に百有餘年、其間詩賦文章を以て稱せらる者ありと雖、風俗未だ漓からず、學、必經史に本く、翰墨を以て緒餘と爲す、而して雲溪獨り詩を以て行はる、是の時、仁齋の門人中島正佐といふ者、専ら講說を業とし、而して講する所四書に出でず、終始循環、一日數席、諸州の生徒、其門に輻湊す、雲溪、居止、正佐に接近し、乃ち詩を以て人に授く、生徒以て便と爲す、是に於て雲溪の詩名四方に傳播す、亦京師の學風一變の機會なり、其詩嫺媚自ら喜ぶに足る、而して氣骨纖弱、律詩の如きは、全篇

是雲溪詩名傳播四方、亦京師學風一變之機會也、其詩嫵媚、足自喜、而氣骨纖弱、如律詩、全篇佳者無幾、絕句則間有堪錄者、又曰、雲溪詩、瑕類最多、梅花七律有疎影上、總月亦香句、足稱佳句、而對太不協、又失鶴七律、頷聯誠佳矣、頸聯殊不協焉、雲溪又有絕句曰、樓蘭介子劍、南越終軍纓、清世成何事、壯心誤此生、人傳雲溪卓犖、兼好武術、其或然也。

錦天山房詩話、太宰春臺曰、有笠原先生者、以詩名于京師、嘗作失鶴詩云云、○詩云、化禽一旦用、塵區絕境空、餘老腐儒、千里撼風波、碧落九皋、限月向仙都、松葉影動、病疑在、靈輿、風雷震、欲呼遺愛未全忘、余以寶永甲申、遊京師、僧雲峯師者、笠原之徒也、余因問

錦天山房詩話上冊

佳なる者幾くも無し、絶句は期間、錄するに堪ふる者あり、又曰、雲溪の詩、瑕類最多し、梅花七律に、疎影上に上りて月も亦香し、の句あり、佳句と稱するに足る、而して對太だ協はず、又鶴を失ふ七律、頷聯誠に佳なり、頸聯殊に協はず、雲溪又絶句あり、曰、樓蘭介子の劍、南越終軍の纓、清世何事を成す、壯心此生を誤ると、人は傳ふ、雲溪卓犖、兼て武術を好むと、其れ或は然らん。

錦天山房詩話、太宰春臺曰、笠原先生といふ者あり、詩を以て京師に名あり、嘗て鶴を失ふ詩を作る、云々、余寶永甲申を以て京師に遊ぶ、僧雲峯師といふ者、笠原の徒なり、余因て笠原の詩を問ふ、師時に此詩を誦す、余曰、此れ笠原の詩か、師曰、然りと、余曰、此れ詩學大成品題の詩に非ずやと、師然たり、享保癸卯に追ひ、眞海師といふ者あり、京師に遊びしより至り、其識る所

笠原詩焉。師時誦此詩。余曰。此笠原詩乎。師曰。然。余曰。此非詩學大成品題之詩乎。師艷然。道享保癸卯。有真海師者。至自遊京師。見其所識。盛稱笠原先生良真師。因請見其詩。海師出此詩以示之。他日語余曰。失鶴詩何如。余曰。此余二十年前所親記也。嘗聞笠原作詩。非得意。不敢以示人。豈二十年來更無他作耶。度彼已六十左右。則是一生佳境不出乎此耳。然其以詩名聞於海內。何也。世多吠聲之徒。而虛譽之動人也。噫。又云。吾聞之。笠原先生自言。記唐詩二萬首。若其信然。則是人之於詩。可謂無知識矣。宜其拙於自運也。余以謂護園之徒。專宗尙李王。以模擬爲巧。故有

を見て、盛んに笠原先生の良に真師なるを稱す、因て其詩を見んことを請ふ、海師、此詩を出だし、以て之れを示す、他日余に語けて曰、鶴を失ふ詩何如と、余曰此れ余二十年前觀て記する所なり、嘗て聞く笠原、詩を作る、得意に非れば、敢て以て人に示さずと、豈二十年來更に他作なからんや、度るに彼れ已に六十左右則是れ一生の佳境、此に出でざるのみ、然るに其詩名を以て海内に聞ゆ、何ぞや、世吠聲の徒多く、而も虚譽の人を動かすなり、噫、又云ふ吾之れを聞く、笠原先生自ら言ふ、唐詩二萬首を記すと、若し其れ信に然らば、則是の人の詩に於ける知識なしと謂ふ可し、宜なり其自運に拙なるをと、余以謂へらく護園の徒、専ら李王を宗尙し、模擬を以て巧と爲す、故に是の論あるのみ、之れを要するに雲溪の詩、法を中晚に取り、蹊徑未だ化せずと雖、然も辭旨清逸、怒目掀髯の概なし、五律最雅淡、當時に在りて、亦自ら矯々たる者なり、春臺の言、未だ篤論と爲さざるなり。

是論耳、要之雲溪詩取法乎中晚、雖蹊徑未化、然辭旨清逸、無怒目掀髯之概、五律最雅淡、在當時亦自矯矯者、春臺之言、未爲篤論也。

餘澄卷二

字元澄、青木氏、洛陽人、號東庵、系出于馬韓國餘璋王、少好學、博聞彊記、至於雜家小說、浮屠老莊之書、無所不通、恬然以詠和歌、賦唐詩爲樂、而不慕仕進榮達、以其善醫、得法橋位、傍善書、好佛、從草山元政上人受教、執師資之禮甚謹、嘗見韓使成琬、問以青木山所在、琬對以卽松岳別名也、於是始知祖先氏、青木之有自、因又馳松岳、元祿十三年病卒、年五十一、所著竹

餘澄卷二

字は元澄、青木氏、洛陽の人、東庵と號す、系は馬韓國餘璋王に出づ、少ふして學を好み、博聞彊記、雜家小説、浮屠老莊の書に至るまで、通ぜざる所なし、恬然として以て和歌を詠じ、唐詩を賦して、樂と爲す、而して仕進榮達を慕はず、其醫を善くするを以て、法橋の位を得、傍ら書を善くし、佛を好み、草山元政上人に従ひ教を受け、師資の禮を執ること甚謹む、嘗て韓使成琬を見、問ふに青木山の所在を以てす、琬對ふるに卽ち松岳の別名なるを以てす、是に於て始めて始めて祖先、青木を氏とするの、自るあるを知る、因て、又松岳と號す、元祿十年病んで卒す、年五十一、著す所、竹雨齋集、世に行はる。

兩齋集行于世。

嚴眞子鼎曰、東庵之詩、幽閒清遠、而不_レ至
於寂寞枯槁、濃郁纖麗、而不_レ流於委靡脆
弱、言近而旨遠、格高而響宏。

柳原輔文希翊銘其墓曰、奮躬勤學、發揮文
章、孝行于家、恭稱於鄉、名著聲馳、自君是
始、峨山月潭以文字禪、名於一世者、嘗寄
詩有滿紙龍蛇追晉妙、七言錦繡傲唐真
之句、其爲人所傾伏如此。

莊田靜

字子默、號琳庵、稱萬右衛門、武藏人、少從
谷一齋學、資稟特異、尤長於談論、龜山侯
松平忠晴聞其講通鑑綱目、喜之、以祿百
五十石聘之、天資溫柔、退然若、不勝衣、而

嚴眞子鼎曰、東庵の詩、幽閒清遠、而かも寂寞枯槁に至
らず、濃郁纖麗、而かも委靡脆弱に流れず、言近くして
旨遠し、格高くして響宏し。

柳原輔文希翊、其墓に銘して曰、勤學に奮躬し、文章を發
揮す、孝、家に行はれ、恭、郷に稱せらる。名著はれ聲馳
す、君より是れ始まる。と、峨山月潭は文字禪を以て、一
世に名ある者なり、嘗て詩を寄せ、滿紙の龍蛇、晉妙を
追ひ、七言の錦繡、唐眞に倣ふの句あり、其人に傾伏せ
らるゝこと此の如し。

莊田靜

字は子默、琳庵と號す、萬右衛門と稱す、武藏の人、少く
して谷一齋に従ひて學ぶ、資稟特異、尤、談論に長ず、龜
山侯松平忠晴、其の通鑑綱目を講ずるを聞き、之れを
喜び、祿百五十石を以て之れを聘す、天資溫柔、退然と
して衣に勝へざるが若し、而して得失を論辯するに至

○按、先
哲嚴談後
編開上之
有、一之
不、是似、
不可省、

至論辯得失、不避利害、人皆忌憚其審諤、
 寛文十年侯卒、柄臣恣志、抗疏論之、奸黨
 深忌害之、遂抵罪、囚於城中獄、四年、延寶
 二年十月棄市、將就刑、神色不變、南向拜
 君曰、死、酬知己、而無愧於地下、又東向拜
 母曰、萱砌春輝之鞠育、豈得報寸草之芒
 乎、今復先而貽大羞之嗟、不肖之戾、孰大
 焉、我匪弗懷私恩、其奈公義何、乃朗吟絕
 命辭而死、時年三十六、其在獄中、著獄吏
 問答、援引該博、皆取諸臆、不舛一字、人皆
 惜焉。

大高坂季明

字清介、號芝山、又號一峰、又號黃軒、土佐
 人、家世臣士佐、父宜重、致仕而歸田、後至

りては利害を避けず、人皆其の審諤を忌憚す、寛文十
 年侯卒す、柄臣志を恣にす、抗疏して之れを論ず、奸黨
 深く之れを忌害し、遂に罪に抵り、城中の獄に囚せら
 るること四年、延寶二年十月、棄市せらる、將に刑に就
 かんすとす、神色變ぜず、南向して君を拜して曰、死して
 知己に酬ふ、而して地下に愧づるなしと、又東向して
 母を拜して曰、萱砌春輝の鞠育、豈寸草の芒を報ふる
 を得んや、今復た先んじて大羞の嗟を貽す、不肖の戾、
 孰れか焉より大ならん、我は私恩を懷はざるに匪ず、
 其れ公義を奈何んせんと、乃絶命の辭を朗吟して死
 す、時に年三十六、其獄中にあるや、獄吏問答を著す、援
 引該博、皆諸れを臆に取り、一字を舛えず、人皆焉を惜
 む。

大高坂季明

字は清介、芝山と號す、又一峰と號す、又、黃軒と號す、
 土佐の人、家世、土佐に臣たり、父宜重、致仕して歸田
 す、後、關東に至る、季明、幼にして讀書を好む、年十八

關東、季明幼好讀書、年十八、出、土佐入京、來、江戸、苦學自勉、弱冠、官巖城侯、又、遊事稻葉侯、醫師、事谷一齋、廣才博覽、最究性理、傍善詩文、當世推爲碩儒、而氣豪宕、自視甚高、好排斥時輩、時明、林珍、何倩、顧長卿、來在、長崎、季明每致詩文、乞、是、正、彼各極口褒賞、其答書有曰、我輩來、貴國、視、數家文章、雖、各有所長、然、未、諳、章法、句法、唯足下所作、盡合規矩、又曰、足下文章、意深語簡、韓柳歐蘇、無過、又曰、足下詩、格調兼高、宜、貴、貴國紙、於是季明、自以爲然。

江村綾君錫曰、林何願三人、孟浪諛言、固不足論、而季明信之、妄自夸毗、遂欠精細工夫、芝山會稿十二卷、篇章不多、而可採

土佐を出て京に入り、江戸に來り、苦學して自ら勉む、弱冠、巖城侯に宣了、又、稻葉侯に遊事す、嘗て谷一齋に師事す、廣才博覽、最、性理を究む、傍ら詩文を善くす、當世推して碩儒と爲す、而して氣豪宕、自ら視る甚高し、好んで時輩を排斥す、時に明の林珍、何倩、顧長卿、來りて長崎に在り、季明毎に詩文を致し、是正を乞ふ、彼れ各、口を極めて褒賞す、其答書に曰ふあり、我輩貴國に來り、數家の文章を視る、各、所長ありと雖、然も未だ章法句法を諳んぜず、唯、足下の作る所は、盡く規矩に合すと、又曰、足下の文章、意深く語簡に、韓柳歐蘇も過ぐるなすと、又曰、足下の詩は、格調兼ね高し、宜しく貴國の紙を貴ふすべしと、是に於て季明自ら以て然りと爲せり。

江村綾君錫曰、林何願の三人、孟浪諛言、固より論ずるに足らず、而して季明之れを信じ、妄に自ら夸毗し、遂に精細の工夫を欠く、芝山會稿十二卷、篇章多からず、而して採るべき者幾くも無し、余酷だ季明の慷慨氣節

者無幾、余酷愛季明慷慨有氣節、因深情爲三人所誤也。

五井純禎

字子祥、一字惠迪、號蘭洲、又號列庵、稱藤九郎、持軒男、大坂人、嗣家學、又有重名於世、幼時以家貧、僑居尼崎、成童轉客信濃、正德二年、歸養於大坂、享保六年丁父憂、定行三年喪、九年又居母喪、比服除、中井菴庵設懷德書院于本府、三宅石庵主講席、子祥爲助教焉、十二年來江戶、十六年應津輕侯聘、每進講獻替無所隱、執政或諷止、而言益剴切、上下敬憚焉、津輕本蝦夷之壤、俗甚陋、及子祥扈就國也、人始知文獻之懿、教化有兆矣、既而不果所言、乃

あるを愛し、因て深く三人に誤らるゝを惜しむなり。

五井純禎

字は子祥、一の字は惠迪、蘭洲と號す、又列菴と號す、藤九郎と稱す、持軒の男、大坂の人、家學を嗣ぐ、又世に重名あり、幼時、家貧しきを以て尼崎に僑居す、成童に轉じて信濃に客たり、正德二年大坂に歸養す、享保六年父の憂に丁り、定めて三年の喪を行ふ、九年又母の喪に居り、服除くに比び、中井菴菴、懷德書院を本府に設け、三宅石庵、講席をキどり、子祥、助教たり、十二年、江戶に來り、十六年、津輕侯の聘に應じ、進講する毎に獻替して隱す所なし、執政或は諷止す、而して言益、剴切、上下敬憚せり、津輕は、本、蝦夷の壤、俗甚だ陋し、子祥が扈して國に就くに及ぶや、人始めて文獻の懿を知り、教化兆あり、既にして言ふ所を果さず、乃病を移して去るを乞ふ、有司惜みて爲めに通ぜず、數、乞ふて終に允さる、即ち大坂に歸休す、復た懷德書院に教授す、遠近爭ひ召せども、而も皆應ぜざるなり、人と爲り豪蕩英邁、而して人と交るに豈弟にして匡幅を撤す、其の學は程朱を以て依歸と爲し、務めて末流支離の

移病乞去、有司惜而不爲通、數乞終允、卽歸、休于大坂、復教授懷德書院、遠近爭召、而皆不應也、爲人豪蕩英邁、而與人交、豈弟、徹、匡、幅、其學以程朱爲依歸、務祛末流支離之弊、著非伊非物、非費、質疑諸篇、旁治國史群籍、著讀史訪議、萬葉集話、古今通勢語通、源語訪諸書、家雖索貧、恬然自安、一介不苟取、初丁憂、悉鬻書劍以葬、乃備書自給、及晚節、疾恐周卹、煩人、務殺衣黜食、以塞意、寶曆十二年卒、年六十六、無子家絕。

堀正修

字身之、號南湖、又號習齋、正意之玄孫、正樸之子、藝州文學、其學廣搜博探、強記絕

弊を祛す、非伊非物非費質疑諸篇を著し、旁ら國史群籍を治め、讀史訪議、萬葉集話、古今通勢語通、源語訪の諸書を著す、家素より貧しと雖、恬然として自ら安んじ、一介も苟も取らず、初め憂に丁りしとき、悉く書劍を鬻ぎ以て葬る、乃ち備書して自ら給す、晚節に及び、周卹して人を煩すを疾恐し、務めて衣を殺ぎ食を黜け、以て意を塞く、寶曆十二年に卒す、年六十六、子無し、家絶す。

堀正修

字は身之、南湖と號す、又習齋と號す、正意の玄孫、正樸の子なり、藝州の文學たり、其の學、廣搜博探、強記人に絶す、最、易理に精し、嘗て蘇氏の易說を演じ、書數萬言

人、最精易理、嘗演蘇氏易說、著書數萬言、在京師時、准三宮豫樂、藤公數召對、清問禮遇甚優、其卒也、藤公賜親製碑銘。

江村綬君錫曰、南湖夙好吟哦、暇日多遊五山諸刹、與僧徒相唱酬、當是時、海內方宗唐及明詩、而南湖獨祖宋、最尙子瞻、故譽之者曰、一時無二、毀之者曰、詩無所解、要之南湖才識出群、如曰、一逕年年蘇、四時日日花、梅每枝枝好、雪教樹樹妍、曲渚舟橫岸、深山鐘度花、雖非大雅中正之音、乎、天造奇逸、自有妙處、且古曰、寧爲鷄口、莫爲牛後、如其言、則南湖亦藝苑夜郎王矣哉。

堀正超

錦天山房詩話上册

を著す、京師に在りし時、准三宮豫樂、藤公數召して清問に對せしむ、禮遇甚優なり、其卒するや、藤公親製の碑銘を賜ふ。

江村綬君錫曰、南湖夙に吟哦を好み、暇日多く五山諸刹に遊び、僧徒と相唱酬す、是の時に當り、海内方に唐及び明詩を宗とす、而して南湖は、獨宋を祖とし、最子瞻を尙ふ、故に之れを譽むる者は曰、一時二なしと、之を毀る者は曰、詩解する所なしと、之れを要するに南湖は才識群に出づ、一逕年々の蘇、四時日々の花、梅は枝々ごとに好し、雪は樹々をして妍ならしむ、曲渚舟岸に横はり、深山鐘、花を度ると曰ふが如き、大雅中正の音に非ずと雖、天造奇逸、自ら妙處あり、且古に曰、寧雞口と爲るも、牛後と爲る莫れと、其言の如くなれば、則南湖も亦藝苑の夜郎王なるかな。

堀正超

字君燕、號景山、稱禎助、正意之玄孫、玄達之子、藝州文學、篤學精通、而和厚近人、循循獎掖、後學是以從學之士、多嚮彬彬雅、其詩結構整齊、亦一時作家、後卒于京師、藝侯親製碑文、賜之。

寺田革

一名高通、字鳳翼、一字士豹、稱半藏、號臨川、藝州人、其先近江佐木氏之族、高祖吉次、仕時田氏、尋仕於加藤嘉明、既而又去、仕紀侯長晟、元和五年、紀侯移封于藝備、從徙藝之廣島、因爲藝人、生而穎悟、幼好讀書、受業於味木立軒、年十五、游學東都、寶永元年、擢爲藝州記室、正德元年、韓人來聘、至浪華客館、與韓客筆語、應酬敏

字は君燕、景山と號す、禎助と稱す、正意の玄孫、玄達の子なり、藝州の文學たり、篤學精通、而して和厚人を近づけ、循々として後學を獎掖す、是を以て從學の士、多く彬彬雅に嚮ふ、其詩、結構整齊、亦一時の作家たり、後、京師に卒す、藝侯親しく碑文を製して之れを賜ふ。

寺田革

一名は高通、字は鳳翼、一の字は士豹、半藏と稱す、臨川と號す、藝州の人、其先は近江、佐々木氏の族なり、高祖吉次、時田氏に仕ふ、尋で加藤嘉明に仕ふ、既にして又去りて、紀侯長晟に仕ふ、元和五年、紀侯、封を藝備に移す、從つて藝の廣島に徙ふ、因て藝人と爲る、生て穎悟、幼にして讀書を好み、業を味木立軒に受く、年十五、東都に游學し、寶永元年、擢でられて藝州の記室と爲る、正德元年、韓人來聘す、浪華の客館に至り、韓客と筆語す、應酬敏捷、其の學士李贇等、皆其才を奇とす、曾て藩命を奉じ、諸士系譜及藝備古城志を撰し、數、金及衣服を賜ふ、藩、學宮を建て、命じて閩國の士に教授す、因て

捷、其學士李瓊等皆奇其才、曾奉藩命撰諸士系譜、及藝備古城志、數賜金及衣服、藩建學宮、命教授闈國之士、因作學規、訓勵之士稍嚮學、久而教化大行、延享元年十一月二十四日病卒、年六十六歲、所著有臨川集六卷

堀正身之曰、半藏氏之文、由廬陵入、非由廬陵出、文自一家也、詩學坡公、不求似坡公、詩自一體也、同僚有喜道古文辭者、半藏不敢同焉、自著一家之言、同焉有好擬明人之詩者、半藏不敢同焉、自屬一體之篇、卿用卿法、我用我法、卓哉有若見識、而有若文字、蓋山陽以西一人而已矣。

物健松茂卿曰、獨愛鳳翼氏之業、清綺整贍、

學規を作り之れを訓勵す、士稍、學に向ふ、久ふして教化に行はる、延享元年十一月二十四日病んで卒す、年六十六歳、著す所臨川集六卷あり。

堀正身之曰、半藏氏の文、廬陵より入る、廬陵より出るに非ず、文は自ら一家なり、詩は坡公を學び、坡公に似るを求めず、詩は自ら一體なり、同僚、喜んで古文辭を道ふ者あり、半藏、敢て同せず、自ら一家の言を著す、同僚好んで明人の詩に擬する者あり、半藏、敢て同せず、自ら一體の篇を屬す、卿は卿の法を用ひよ、我は我の法を用ひんと、卓なるかな、若まろき見識ありて而して若き文字あり、蓋山陽以西一人のみ。

物健松茂卿曰、獨愛す鳳翼氏の業、清綺整贍、瀛を出で圭

出瀛入圭、寒冰青藍、疑疑乎未已、可謂不易得之才矣。

李贛重叔曰、臨川詩、情境安帖、意致優閑、紆餘而不迫、豐舒而不泥、真一世之濶步、而將卜日登壇者也、以詩而求詩、不若以人而求詩、能於詩者不待其組繪章句、而其言語動作、無非詩者也、余觀臨川、骨清而秀、貌謹而平、氣之和而襲人、談之豪而飛屑、一接可知其能於詩矣。

錦天山房詩話、臨川之詩、心摹手追于眉山、劍南之間、雖未能超脫、頗得其髣髴、當時盛尚王李、同然一口、而臨川獨不趨、時好、嘗手自繕寫其詩文、勸爲一集、藏諸嚴島神庫、以俟知音於異代、亦可謂拔俗獨

に入る、寒冰青藍、疑々乎として未だ已まず、得易からざるの才と謂ふべし。

李贛重叔曰、臨川の詩、情境安帖、意致優閑、紆餘にして迫らず、豊舒にして泥まず、真に一世の濶歩、而して將に日を卜して壇に登らんとする者なり、詩を以て而して詩を求むるは、人を以て而して詩を求むるに若かず、詩に能き者は、其の章句を組繪にするを待たず、而して其言語動作、詩に非ざる者なきなり、余、臨川を觀るに、骨清ふして秀、貌謹にして平、氣の和にして人を襲ふ、談の豪にして屑を飛ばす、一接して其の詩を能くするを知るべし。

錦天山房詩話、臨川の詩、眉山劍南の間に心摹手追す、未だ超脱する能はずと雖、頗、其髣髴を得たり、當時盛んに王李を尙ぶ、同然一口、而して臨川、獨、時好に趨らず、嘗て、手、自ら其詩文を繕寫し、勸して一集と爲し、諸れを嚴島の神庫に藏し、以て知音を異代に待つ、亦拔俗獨立の士と謂ふべし。

立之士矣。

森尙謙卷二
十三

字利涉、攝津人、儼塾、復庵、不染居士、皆其別號、本姓源、佐佐木之裔、初氏松本、父空庵、以醫仕、永井侯、有故改姓森、母森田氏、夢、神人來授明玉、而有妊、生尙謙、生時、井水涌騰、又鼈來上座、因名龜之助、幼好學事、福住道祐、及松永昌易二子咸異之、後游學于紀阿京師、尋至江戶、佐佐子朴、薦之水戶義公、召編修國史、賜祿二百石、自編其文詩十卷、名曰儼塾集、尙謙多藝能、醫學於半井驢庵、學兵法於山脇重顯、皆得其要、傍研究釋典、著護法資治論十卷。

安積覺

錦天山房詩話上冊

森尙謙卷二
十三

字は利涉、攝津の人、儼塾、復庵、不染居士、皆其別號なり、本姓は源、佐々木の裔、初の氏は松本、父空庵、醫を以て永井侯に仕ふ、故ありて姓を森と改む、母、森田氏、神人來りて明玉を授くと夢みて妊めるあり、尙謙を生む、生るゝ時、井水涌騰す、又鼈來りて座に上る、因て龜之助と名づく、幼にして學事を好み、福住道祐、及び松永昌易の二子、咸之れを異とす、後、紀伊京師に遊學し、尋いで江戶に至る、佐々子朴、之れを水戶義公に薦む、召して國史を編修せしむ、祿二百石を賜ふ、自ら其文詩十卷を編し、名づけて儼塾集と曰ふ、尙謙、藝能多く、醫を半井驢庵に學び、兵法を山脇重顯に學び、皆其要を得たり、傍、釋典を研究し、護法資治論十卷を著せり。

安積覺

一一一

字子先、號澹泊、水戸人、祖正信、稱覺兵衛、大坂之役、屬小笠原秀政有功、後委質於水府、子先少有俊才、好學、年十三、師事朱舜水、義公甚器之、以爲不減、乃祖命襲稱覺兵衛、及長、博學能文、尤精史學、方此時、義公好賢愛士、廣聘名儒、編修大日本史、子先爲其總裁、至享保庚子、竣功、前後與編纂者數十人、而子先之功居多、屢加賜食祿、至番頭、年老精力不少耗、撰烈祖成績、時既七十二矣、四方學者、修書請益者甚多、而謙虛自卑、雖親受誨者、不敢以弟子視之、其作文詩、必示人、丐正、有一字可譏、輒改、由此人皆益敬服焉、性愛菊、廣搜異品栽培、以爲娛、自號老圃、元文二年病

字は子先澹泊と號す、水戸の人、祖、正信、覺兵衛と稱す、大坂の役、小笠原秀政に屬して功あり、後、質を水府に委ぬ、子先、少ふして俊才あり、學を好む、年十三、朱舜水に師事す、義公甚之れを器とし、以爲へらく、乃祖に減せずと、命じて覺兵衛を襲稱せしむ、長ずるに及んで、博學能文、尤史學に精し、此の時に方り、義公賢を好み士を受し、廣く名儒を聘し、大日本史を編修す、子先其總裁と爲る、享保庚子に至り、功を竣ふ、前後編纂に與る者數十人、而して子先の功多きに居る、屢、食祿を加賜せられ、番頭に至る、年老ひて精力少しも耗せず、烈祖成績を撰す、時に既に七十二、四方の學者、書々修め益を請ふ者甚多し、而して謙虛自ら卑ふす、親しく誨を受くる者と雖、敢て弟子を以て之れを視ず、其文詩を作る、必人に示して正を乞ふ、一字、譏すべきあれば、輒ち改む、此れに由りて人皆益、敬服す、性、菊を愛し、廣く異品を搜り、栽培し、以て娛と爲す、自ら老圃と號す、元文二年病んで卒す、著に澹泊集、翻亭涉筆あり、

卒、著有澹泊集、湖亭涉筆。

錦天山房詩話、澹泊與田子愛書曰、亡師朱文恭有乞菊於義公帖、覺百事不能學、文恭而唯此一事稍存餘風、不亦可羞之甚哉、就此亦可見其謙虛一端也、其集、率皆駢體、巧整精鍊、當世罕儷、想其詩篇必有可觀者、昔購求其全集、未得、深以爲憾。

大串元善

字子平、號雪蘭、本族平野、養於外家、因冒其氏、京師人、幼而穎悟、過目成誦、年十三來江都、水戶義公廩祿之、使就懋齋野傳肄業、研精經史、議論精切、復出入意表、有出藍之譽、既長入史局、淹貫古今、最長編削、安積澹泊、每稱曰、劉道原、揭曼碩之流。

錦天山房詩話上冊

錦天山房詩話、澹泊の田子愛に與ふる書に曰、亡師朱文恭、菊を義公に乞ふ帖あり、覺、百事、文恭を學ぶ能はず、而して唯此の一事、稍、餘風を存す、亦羞づべきの甚しきならずやと、此れに就ても亦其謙虛の一端を見るべし、其集、率ね皆駢體にして、巧整精鍊、當世に儷ひ罕なり、想ふに其詩篇必觀るべき者あらん、昔く其全集を購求すれども、未だ得ず、深く以て憾と爲す。

大串元善

字は子平、雪蘭と號す、本族は平野、外家に養はる、因て其氏を冒す、京師の人なり、幼にして穎悟、目を過ぐれば誦を成す、年十三江都に來り、水戶義公之れを廩祿し、懋齋野傳に就きて、業を肆はしむ、經史を研精し、議論精切にして、復に人の意表に出づ、出藍の譽あり、既に長じて史局に入り、古今を淹貫し、最編削に長ず、安積澹泊毎に稱して、曰、劉道原、揭曼碩の流亞なりと、義公器重し、善く之れを遇す、屢、京師に使し、遺書を購求

亞也、義公器重、善遇之、屢使於京師、購求遺書、嘗至長崎、與清客張斐、接斐深賞異焉、嗣君立、擢爲近侍、掌編修事、子平體素、庭羸多病、至是增劇、遂以不起、年僅三十九、時元祿九年也。

松平義堯卷二
十四

一名直、字仲正、號竹溪、菅雲窩松主人、皆其別號、稱甚三郎、其先親光、稱刑部丞、公第四子、住三州福鎌、親光孫信乘、養公庶子親良爲嗣、任兵庫頭、義堯卽親良五代孫也、家世親衛軍、最善騎射、有德大君時、試騎射、拜馬及黃金之賜、前後賜物者數、安永八年病卒。

錦天山房詩話、竹溪好學、傍嗜國雅及樂、

し、嘗て長崎に至り、清客張斐と接す、斐深く賞異す、嗣君立ち、擢んでられて近侍と爲り、編修の事を掌る、子平、體素と、庭羸多病、是に至りて増劇し、遂に以て起たず、年僅に三十九、時に元祿九年なり。

松平義堯卷二
十四

一名は直、字は仲正、竹溪と號す、菅雲窩松主人、皆其の別號なり、甚三郎と稱す、其先親光、刑部丞と稱す、公は第四子、三州福鎌に住す、親光の孫信乘、公の庶子親良を養ひて嗣と爲す、兵庫の頭に任ず、義堯は卽親良五代の孫なり、家世、親衛軍たり、最、騎射を善くす、有徳大君の時、騎射を試み、馬及び黄金の賜を拜す、前後物を賜ふ者數なり、安永八年病んで卒す。

錦天山房詩話、竹溪、學を好み、傍ら國雅及び樂を嗜み、

所著書數部、其詩數首、附載歌集中、余從其曾孫男公愨、借鈔、公愨、遽於經術、又從余訪文藝、可謂篤志之士矣。

德力良弼

字子靜、一字浚明、號龍潤、初名十五郎、後稱藤八郎、良顯長子、享保十五年爲昌平學助教、十九年爲評定館學士、寶曆七年爲內直學士、應命上政要策十篇、十二年拜祕書、安永六年病免、三月八日卒、年七十二。

伊藤維楨 卷二
十五

字原佐、號仁齋、又號古義堂、平安人、自幼穎異、挺發、始習句讀、時意已欲以儒焜耀于一世、及稍長、堅苦自勵、家素業賈、故親

著す所の書數部、其詩數首、歌集中に附載す、余其曾孫男公愨より借鈔す、公愨、經術に達し、又余に従ひ、文藝を訪ふ、篤志の士と謂ふべし。

德力良弼

字は子靜、一の字は浚明、龍潤と號す、初めの名は十五郎、後、藤八郎と稱す、良顯の長子なり、享保十五年、昌平學助教と爲る、十九年、評定館學士と爲る、寶曆七年、内直學士と爲る、命に應じて政要策十篇を上る、十二年、祕書に拜し、安永六年病んで免ぜらる、三月八日卒す、年七十二。

伊藤維楨 卷二
十五

字は原佐、仁齋と號す、又、古義堂と稱す、平安の人、幼より穎異、挺發、始め句讀を習ふ時、意已に儒を以て一世に焜耀せんと欲す、稍、長ずるに及び、堅苦自ら勵む、而して家業と賈を業とす、故に親舊皆之れを沮めども聽

舊皆沮之不聽家道日墜僮石不給而晏如也初奉伊洛學後創一家言排斥宋儒一時學者靡然從服執謁者以千數諸州之人無國不至唯飛驒佐渡壹岐三州人不及門耳其盛如此肥後侯聞其名聘之許以祿千石以親老辭不就後德大寺藤公好學每會諸儒使其相論難往復數四皆辭色激厲爭競不息或至詬罵獨原佐神色夷然終始不渝舉坐歎服性寬厚未嘗疾言遽色不設城府不修邊幅又不爲詭激之行每天氣明媚輒拉子弟數人杖屨徜徉吟咏而歸毋卒服著喪明年父亦卒服喪凡四年以寶永二年卒年七十九私諡古學著有論孟古義中庸發揮大學

かず家道日に墜ち、僮石も給せず、而して晏如たり、初め伊洛の學を奉じ、後一家言を創し、宋儒を排斥す、一時學者、靡然として従ひ服す、謁を執る者千を以て數ふ、諸州の人、國として至らざるはなし、唯、飛驒、佐渡、壹岐、三州の人、門に及ばざるのみ、其の盛此の如し、肥後侯、其名を聞き、之れを聘す、許すに祿千石を以てす、親老いたるを以て辭て就かず、後德大寺藤公、學を好み、毎に諸儒を會し、其れをして相論難せしむ、往復數四、皆辭色激厲、爭競して息まず、或は詬罵するに至る、獨、原佐神色夷然、始終渝らず、舉坐歎服す、性、寬厚にして未だ嘗て疾言遽色せず、城府を設けず、邊幅を修めず、又、詭激の行を爲さず、天氣明媚なる毎に、輒ち子弟數人を拉して、杖屨徜徉吟咏して歸る、母卒す、著の喪に服す、明年、父亦た卒す、喪に服すること凡そ四年、寶永二年を以て卒す、年七十九、私に古學と諡す、著に論孟古義、中庸發揮、大學定本、童子問、大學非孔、書辯、周易乾坤古義、春秋經傳通解、古學文集等十餘種あり。

定本、童子問、大學非孔書辯、周易乾坤古義、春秋經傳通解、古學文集等十餘種。

物松雙茂卿曰、百年來儒者巨擘、人才則熊

澤、學問則仁齋、餘子碌碌未足數也。

兩森東伯陽曰、或問伊藤源助曰、余少歲時觀望儀刑、至今宛在心目、君子也。

祇園瑜伯玉曰、聞世有語孟字義之書、索而讀之、於是始知京師有伊藤君者、予雖固拘于茲、不能一接見、苟觀其書也、則可知其爲人也、觀夫至言要言、左右聖賢、以鞭箠邪說、奮然把麈、爲世先登者、昭昭乎見于筆端、使人驚見、猶景星卿雲可仰而不可企也、嗚呼、是豈今之人也哉、抑古之所謂超然獨立者歟。

物松雙茂卿曰、百年來儒者の巨擘、人才は則熊澤、學問は則仁齋、餘子は碌々、未だ數ふるに足らざるなり。

兩森東伯陽曰、或ひと伊藤源助を問ふ、曰、余歳の少時、儀刑を觀望す、今に至るまで、宛として心目に在り、君子なり。

祇園瑜伯玉曰、世に語孟字義の書ありと聞き、索めて之れを讀む、是に於て始めて京師に伊藤君といふ者あるを知る、予固より茲に拘せられ、一たび接見すること能はずと雖、苟、其書を觀れば、則其の人と爲りを知るべきなり、觀るに夫の至言要言、聖賢を左右にし、以て邪說を鞭箠し、奮然として麈を把り、世の爲に先登する者、昭々乎として筆端に見はる、人をして驚き見せしむると、猶、景星卿雲の仰ぐべくして企つべからざるがごとし、嗚呼、是れ今の人ならんや、抑古の謂はゆる超然獨立する者か。

太宰純徳夫曰、伊仁齋豪傑之士也、所謂不待文王而作者也、物先生亦豪傑之士也、然後伊氏而出、故其學雖不本伊氏、而不能不以伊氏爲嚆矢也、又曰、余嘗見伊氏而與之言、觀其貌也恭、聽其言也從、余故以爲君子、又曰、仁齋有不可及者三焉、學不由師傅一也、不仕二也、有子東涯三也、物先生不有一於世。

江村綬君錫曰、伊藤仁齋首斥程朱、創一家學、要之亦豪傑之士也、概其爲人、宜不屑聲律也、而詩間有旨趣者、殊可嘉稱。原善公道曰、仁齋年十九、從父過琵琶湖、有詩云、○詩云、古來云此水、一夜作平湖、俗說尤難信、世傳距本迂、百川流不已、萬谷滿相扶、天下前滔者、應憐異教趨、又登園城寺絕頂、云

太宰純徳夫曰、伊仁齋は豪傑の士なり、謂はゆる文王を待たずして作る者なり、物先生も亦豪傑の士なり、而して伊氏に後れて出づ、故に其學、伊氏に本づかずと雖、而して伊氏を以て嚆矢と爲さざる能はず、又曰、余嘗て伊氏を見て之れと言ふ、其貌を觀るや恭、其言を聽くや從、余故に以て君子と爲す、又曰、仁齋は及ぶべからざる者三あり、學、師傅に由らず一なり、仕へざる二なり、子東涯ある三なり、物先生一も世にあらす。

江村綬君錫曰、伊藤仁齋首として程朱を斥けて、一家の學を創む、之れを要するに亦豪傑の士なり、其の人と爲りを概するに、宜しく聲律を屑とせざるべし、而して詩間、旨趣ある者あり、殊に嘉稱すべし。

原善公道曰、仁齋年十九、父に従ひて琵琶湖を過ぎ、詩あり、云云、又園城寺の絶頂に登る云云、識者此を以て其志の存する所を知る、又荒川景元の金を惠むを謝する詩に云ふ、「討習研磨二十春、恩は父子の如く最相親

云、○詩云、山行六七里、注到杏冥中、船處開
東男子莫空死、閉去、天長漢溪空、嶺環村落北、湖際寺門
靜看神再功、識者以此知其志之、所存
 又謝荒川景元惠金詩云、討習研磨二十
 春、恩如父子最相親、受金不謝元非傲、適
 爲君情厚且真、東涯題後曰、先人作此詩
 時、予未冠、尙記其事云云、由此觀之、仁齋
 年五十七八、家猶寒、然先是肥後侯、祿千
 石招之、辭以母老侍養無人、世復安得、其
 心不爲利祿動、如斯人者乎。

伊藤長胤 卷二
十六

字原藏、號東涯、又號慥慥齋、仁齋長子也、
 三四歲能知字、稍長嶄然見頭角、博覽強
 記、最善屬文、孳屹種學、淳澁涵浸、人莫能
 測、性溫恭謙和、口不言人過、不事表襮、不

しむ、金を受けて謝せず元と傲に非ず、適、君が情厚く
 且眞なるが爲なり」と、東涯、後に題して曰、先人此詩を
 作る時、予未だ冠せず、尙、其事を記す、云々と、此れに由
 りて之れを觀るに、仁齋五十七八にして、家猶寒し、然
 して是より先き、肥後侯祿千石にて之れを招く、辭す
 るに母老いて侍養人なきを以てす、世復た安んぞ其心
 利祿に動かされざること、斯の人の如き者を得んや。

伊藤長胤 卷二
十六

字は原藏、東涯と號す、又、慥々齋と號す、仁齋の長子な
 り、三四歲能く字を知り、稍と長じて嶄然として頭角
 を見はす、博覽強記、最善く文を屬す、孳屹種學、淳澁涵
 浸、人能く測る莫し、性、溫恭謙和、口、人の過を言はず、
 表襮を事とせず、防眇を設けず、其言、呐々然として諸

設防眈、其言呐呐然、如不出諸其口、無他嗜好、手不釋卷、每有所得、則割錄之、經術湛深、行誼方正、粹然古君子也、克繼述家學、天下益風靡、紀侯聘之不就、公卿縉紳爭延請、親執弟子禮、榜工書、片紙隻字、人爭求之、而其錄經語、必以楷字、故間有詩賦諸語、作以行草、人疑其非親筆、云、元文元年卒、年六十七、私諡紹述先生、內大臣藤原常雅爲製碑銘、權中納言藤原俊將篆額、右中將藤原隆英書、士林榮之、所著有周易經翼通解、古學指要、古今學變、讀易私說、復性辯學問關鍵、辨疑錄、經史博論、通書管見、制度通、名物六帖、歷代官制沿革圖、唐官鈔、盍簪錄、乘燭談、刊謬正俗、

れを其口より出さざるが如し、他の嗜好なし、手不釋卷を釋かず、得る所ある毎に、則之れを割録す、經術湛深、行誼方正、粹然たる古君子なり、克く家學を繼述し、天下益風靡す、紀侯之れを聘すれど、就かず、公卿縉紳爭ふて延請す、親しく弟子の禮を執る、傍ら書に工みなり、片紙隻字も、人爭ふて之れを求む、而して其經語を錄するには、必楷字を以てす、故に間々詩賦諸語の作るに、行草を以てするあれば、人共の親筆に非ざるを疑ふと云ふ、元文元年卒す、年六十七、私に紹述先生と諡す、內大臣藤原常雅、爲に碑銘を製す、權中納言藤原俊將篆額、右中將藤原隆英書す、士林之れを榮とす、著す所、周易經翼通解、古學指要、古今學變、讀易私說、復性辯學問關鍵、辨疑錄、經史博論、通書管見、制度通、名物六帖、歷代官制沿革圖、唐官鈔、盍簪錄、乘燭談、刊謬正俗、三韓紀略等、凡そ五十餘種あり、又紹述文集三十卷あり、並に世に行はる。

三韓紀略等、凡五十餘種、又有紹述文集三十卷、竝行于世。

江村綬君錫曰、東涯經義文章姑舍、是詩亦一時鉅匠、近人動輒曰、東涯詩、冗而無法、率而無格、噫、談何容易、東涯篇章最饒、余閱其集、有潤麗者、有素朴者、有精嚴工整者、有平易淺近者、體段雖齊、余雖生後時、猶及識東涯、其人溫厚謙抑、口訥訥、似于不能言者、與今時學者、自託龍門、倨傲養名、懶惰失禮者、不同也、人有乞詩、則無論貴賤、長少、匪勉應之、大名之下、乞者日衆、所謂卷軸之積、如束筍者、是以其所作有歷鍛鍊、有出率意、畢竟無害爲大家。

原善公道曰、東涯聲動海內、四方後學、多有歷鍛鍊、有出率意、畢竟無害爲大家。

江村綬君錫曰、東涯經義文章は姑く是れを舍く、詩亦一時の鉅匠なり、近人動もすれば輒ち曰、東涯の詩は冗にして法なし、率にして格なしと、噫、談何ぞ容易なる、東涯編章最も饒し、余其集を閲するに、潤麗なる者あり、素朴なる者あり、精嚴工整なる者あり、平易淺近なる者あり、體段齊ふし難し、余生るゝこと時に後ると雖、猶東涯を識るに及ぶ、其人溫厚謙抑、口訥々、言ふ能はざる者に似たり、今時の學者が自ら龍門に托し、倨傲名を養ひ、懶惰禮を失ふ者と同じからず、人、詩を乞ふあれば、則貴賤長少を論するなく、匪勉之れに應ず、大名の下、乞ふ者日々に衆し、謂はゆる卷軸の積、束筍の如き者、是を以て其作所、鍛鍊を歷るあり、率意に出づるあり、畢竟大家たるに害なし。

原善公道曰、東涯聲動海内を動かす、四方後學、多く幅濶

幅濶、著鱗嶼、既入、徂徠門、又心郷注東涯、遂負笈赴之、徂徠固不爲意、春臺內甚不平、各有贈言、鱗嶼造東涯、出脉之、東涯一見且笑曰、物先生襟度廓如、可想見、太宰子亦慷慨有氣節、又弟子嘗持徂徠天狗說、來脉、東涯時北村可昌、松岡玄達在坐、同觀極口刺譏、東涯默無一言、二生曰、此文非管琴牙不成語、而說亦不通矣、先生以爲何如、東涯曰、不、人各有見、何必輕駁之、況其形容天狗之狀者盡矣、今之秉筆者、恐不及、二生大愧。

角田節大可曰、東涯以名教自任、詩文其餘事也、而亦爲一時鉅匠、文則學唐宋大家、縝密精整、無浮躁之體、猶其爲人也、詩

す、著鱗嶼、既に徂徠の門に入り、又、心、東涯に郷注す、遂に笈を負ひ、之れに赴く、徂徠固より意と爲さず、春臺内甚だ平ならず、各、贈言あり、鱗嶼、東涯に造り、出して之れを脉す、東涯一見且笑つて曰、物先生襟度廓如、想見すべし、太宰子も亦慷慨、氣節あり、又、弟子嘗て徂徠の天狗説を持し、來りて東涯に脉す、時に北村可昌、松岡玄達、坐に在り、同く觀て口を極めて刺譏す、東涯默して一言なし、二生曰、此の文管、に管琴、語を成さざるのみに非ず、而して説亦通ぜず、先生以て何如と爲すと、東涯曰、不、人各、見あり、何ぞ必しも輕しく之れを駁せん、況んや其天狗の狀を形容する者盡せり、今の筆を秉る者、恐くば及ばざらんと、二生大に愧づ。

角田節大可曰、東涯名教を以て自ら任ず、詩文は其餘事なり、而して亦一時の鉅匠たり、文は則唐宋の大家を學び、縝密精整、浮躁の體なし、猶其人と爲りの如し、詩は堅く門戸を持せず、其應ずる所、多きを以て其體

者不堅持門戶以其多所應其體不一視夫當時尸祝李王者則有一種滋味云。

錦天山房詩話元祿以還稱德行者輒必先屈指於東涯稱博物者亦必於東涯稱能紹堂構者亦必於東涯稱著述文章者亦必於東涯獨於其詩則人不無異議蓋當時作者大抵尸祝王李而東涯取材頗廣格調不一故世寡識重焉者已今閱全集其詩和平典雅間有精鍊者如五言「今聞方庶矣其莫嘆歸歎」皆從表兄緒方源在東武「簷風輕報鐸窓雨密留香」草「村僻不成路寺荒仍有樓」樓「有寺皆松影無村不荳花」飛大「手香收異蕙擔重拾枯枝」秋口「幾人催白髮是日又黃昏」雁「松翠高於屋竹風長

一ならず夫の當時李王に尸祝する者に視ぶれば、則一種の滋味ありと云ふ。

錦天山房詩話元祿以還德行者稱する者は輒必先づ指を東涯に屈す博物を稱する者も亦必東涯に於てす能く堂構を紹ぐを稱する者も亦必東涯に於てす著述文章を稱する者も亦必東涯に於てす獨其詩に於いては別人異議なきにあらず蓋當時の作者大抵王李を尸祝す而して東涯は材を取る頗廣し格調一ならず故に世焉れを重んずるを識る者寡きのみ又全集を閲するに其詩和平典雅間精鍊なる者あり五言に「今聞く方に庶なり其れ歸歎を嘆する莫れ」從表兄緒武に在る「簷風輕く鐸を報す窓雨密に香を留む」草「村に僻にして路を成さず寺荒て仍ほ樓あり」樓「寺あり皆松影村として荳花ならざるはなし」大根「手香くして異蕙を收め擔重くして枯枝を拾ふ」秋口「幾人か白髮を催す是日又黃昏」雁「松翠屋より高く竹風長へに樓に在り」了堂老圃「饑餉疎幌を圍み倦禽定枝を尋

在樓和了堂「饑餉圍疎幌、倦禽尋定枝、夏
老禪不「菌隨坡勢展、書就樹根縉、春行「竹帶風
發聲瘦、梅添雪意妍、荷亭「深竹多佳寺、殘花
 尙醉人、靈山「洞鳴知雨候、樹老闌天光、遊
院「七言、邊園修竹可千个、照水疎梅纔一
枝、春初「烟接平蕪秋樹近、水環古廟晚
藤公花明、遊「加茂「梁鴻自愧因人熱、趙括徒知
 讀父書、新年「在翰墨中長是樂、栽花木外
 百無營、緒方老人「新涼一掬稻花雨、往事
 十年梧葉聲、秋「青山招我頻相對、白酒教
 君老更狂、遊苑「青州從事吾知己、白水眞
 人久絕交、元「字從羲獻更無字、文到韓歐
 眞是文、秋夜「無事可檢就人借、有友堪招
 折東迎、秋「雨後山添濃意態、水邊花帶淡

ぬ、夏夜寐、茵は坡勢に隨ひて展へ、書は樹根に就て縉
わすく、春行「竹は風聲を帯びて瘦せ、梅は雪意を添へて妍
絶事なり、荷亭「深竹佳寺多く、殘花尙人を醉はしむ、靈山「洞
席上鳴りて雨候を知り、樹老ひて天光を闌す、圓樂院「七言
に遊ぶに、園を造る修竹千个可り、水を照らす疎梅纔に一枝、
春初、藤「烟は平蕪に接して秋樹近く水は古廟を環り
公に闕すて晚花明なり、加茂某莊「梁鴻自ら愧づ人の熱に因るを、
に遊ぶ趙括徒に知る父の書を讀むを、新年「翰墨中に在りて
 長く是れ樂しみ、花木を栽うる外百、營なし、緒方老人
宅小集「新涼一掬稻花の雨、往事十年梧葉の聲、秋「青山我を招
 いて頻に相對し、白酒君をして老いて更に狂せしむ、
宛在樓「青州從事は吾が知己、白水眞人は久く絶交、元
に遊ぶ「字は羲獻よりして更に字なく、文は韓蘇に到りて眞
に是れ文、秋夜「費檢すべきなく人に就いて借り、友の
 招くに堪へたるあり東を折りて迎ふ、秋「雨後の山は
 濃意態を添へ、水邊の花は淡精神を帯ぶ、春晩、小「底
彌君山莊

精神春曉小獨底事陰晴還首鼠却教詩

句轉亡羊八月十五夜會千金索價帶雖

敵一割有時刀豈鉛春行詩成秋院荳花

白夢斷京山木葉黃次韻以上數聯皆賞

於古人集中求焉試問護社諸賢集中有

此一句否絕句最脫酒余故輯錄以與世

之窠臼論詩者點醒心耳矣。

伊藤長堅

字才藏號蘭嶼仁齋第五子仕紀藩及兄

東涯卒告暇歸京師居古義書院督教弟

子十年後遂徒爲紀人蘭嶼幼有才名承

父兄之學研尋益精又善書安永戊戌卒

年八十五著有詩古言書反正易本旨及

紹衣稿。

錦天山房詩話上冊

事陰晴還て首鼠却て詩句をして轉た亡羊ならし

む八月十五夜會千金價を索む帶敵ると雖一割時あ

り刀豈鉛ならんや春行詩成りて秋院荳花白く夢斷

えて京山木葉黄なり次韻以上數聯の如き皆當に古

人集中に於て焉を求むべし試に問ふ護社諸賢集中

此一句ありや否や絶句最脱酒余故に輯録し以て世

の窠臼もて詩を論する者の與めに心耳を點醒す。

伊藤長堅

字は才藏蘭嶼と號す仁齋の第五子紀藩に仕ふ兄東

涯の卒するに及び暇を告げて京師に歸り古義書院

に居り弟子を督教すること十年後遂に徙りて紀人

と爲る蘭嶼幼にして才名あり父兄の學を承け研尋

益精し又書を善くす安永戊戌卒す年八十五著に

詩古言書反正易本旨及び紹衣稿あり。

錦天山房詩話、堀川五藏、東涯最彰、蘭嶋亞之、故世有腰鼓兄弟之目、然不唯經學文章遠遜伯氏、其詩不及迴甚矣。

荒川秀卷二
十七

字敬元、又量元號蘭室、晚號天散生、稱善吾山城人、幼學于伊藤仁齋、爲人豁達、精通經史、自十四歲代仁齋講說經義、訓督諸生、雖先輩不能與抗、塾中推爲都講、稱爲千里駒、紀藩上卿三浦某長門守見奇之、薦諸紀公、徵爲記室、時年甫十六、資性豪邁、不爲苟容、其於師弟之間、信愛尤厚、然不專主師說、以爲吾洙泗之道、大備唐宋之間、程朱二公集成之、其大意在繼往聖而啓來學、排老佛之空妙、擴管商之功利矣、

錦天山房詩話、堀川五藏、東涯最彰はる蘭嶋之れに亞く、故に世に腰鼓兄弟の目あり、然れども唯に經學文章遠く伯氏に遜るのみならず、其詩の及ばざること迴に甚し。

荒川秀卷二
十七

字は敬元、又量元に作る蘭室と號す、晚に天散生と號す、善吾と稱す、山城の人、幼にして伊藤仁齋に學ぶ、人と爲り豁達、經史に精通し、十四歳より仁齋に代りて、經義を講説し、諸生を訓督す、先輩と雖與に抗すること能はず、塾中推して都講と爲し、稱して千里駒と爲す、紀藩の上卿三浦某長門守見て之れを奇とし、諸を紀公に薦め、徵して記室と爲す、時に年甫めて十六、資性豪邁、苟容を爲さず、其の師弟の間に於ける、信愛尤厚し、然して専ら師說を主とせず、以爲へらく吾が洙泗の道、大に唐宋の間に備はり、程朱二公之を集成すと、其大意、往聖に繼ぎ、而して來學を啓き、老佛の空妙を排し、管商の利を擴ぐるに在り、若し世儒、道義を以て己の任と爲し、能く此意を續く者あらば、是れ眞の儒者なり、何んぞ必しも字々句々、其師說を守り、而して後能く其學

若有世儒以道義爲己任、能續此意者、是真儒者也、何必字字句句守其師說、而後爲能奉其學者乎、蓋墨守師說、崇奉其遺教、欲事事若其意者、朋黨之漸也、夫結黨構徒、偏護一家、皆小人之私心也、享保二十年卒、年八十二、所著有弊帚集二卷。

東條耕子藏曰、天散講業之暇、研究吾邦地志、諳記城堡砦塞所在、詳知其道里之遠近、以謂士若不精于此、不足以成戰陳之用、攻守之法。

小河成章

字伯達、一字茂實、或作茂七郎、號立所、受業於伊藤仁齋、隱于洛西北野邑、攻苦食淡、衣敝居陋、讀書自娛、既壯、僦宅洛下、開

を奉ずる者と爲さんや、蓋師說を墨守し、其遺教を崇奉し事々其意の若くせんと欲する者は、朋黨の漸なり、夫れ黨を結び徒を構へ、偏に一家を護るは、皆小人の私心なりと、享保二十年卒す、年八十二、著す所弊帚集二卷あり。

東條耕子藏曰、天散講業の暇、吾邦の地志を研究し、城堡砦塞の所在を諳記し、詳に其道里の遠近を知る、以謂へらく若し此に精しからざれば、以て戰陳の用、攻守の法を成すに足らずと。

小河成章

字は伯達、一の字は茂實、或は茂七郎に作る、立所と號す、業を伊藤仁齋に受け、洛西北野邑に隱れ、攻苦、淡を食ふ、衣敝れ居陋しきも、書を讀みて自ら娛む、既に壯にして宅を洛下に僦し、門を開いて經を講じ、生徒を

門講經、教育生徒、後適于東武、寓于輪王一品親王宮、日參預文學、恩顧甚渥、王請水戸侯、日給廩粟、元祿丙子六月、乞暇、退休于洛、途得疾、竟不起、年四十八、其將還也、留別諸友曰、宦遊六載、欲還京、又有親朋無限情、惜別歸思方寸裡、兩般相戰意難平、蓋絕筆云、所著有論語國語解、伐柯篇聖教錄、及詩文若干篇。

伊藤長胤原藏曰、君姿宇魁秀、儀觀端嚴、談說精詳、最能服人、有以繁言扣君者、爲一辯、必心服焉、且善書、兼解釋氏之書、旁通醫藥、然不以此少資其業、確乎有執。

北村可昌

字伊平、號篤所、江州人、學于伊藤仁齋、在

教育す、後、東武に適き、輪王一品親王の宮に寓す、日に文學に參預し、恩顧甚渥し、王、水戸侯に請ひ、日に廩粟を給す、元祿丙子六月、暇を乞ひ、洛に退休す、途に疾を得、竟に起たず、年四十八、其將に還らんとするや、諸友に留別して曰、「宦遊六載、京に還らんと欲す、又親朋限りなきの情あり、惜別歸思方寸の裡、兩般相戰ふて、意平なり難し」と、蓋、絶筆と云ふ、著す所、論語國語解、伐柯篇聖教錄、及詩文若干篇あり。

伊藤長胤原藏曰、君姿宇魁秀、儀觀端嚴、談說精詳、最能人服す、繁言を以て君を扣く者あらば、爲めに一たび辯せば、必心服す、且書を善くし、兼ねて釋氏の書を解し、旁ら醫藥に通ず、然れども此れを以て少しも其業に資せず、確乎として執るあり。

北村可昌

字伊平、篤所と號す、江州の人、伊藤仁齋に學ぶ、京師

京師、教授生徒、負笈者四方雲集、朝紳爲之弟子者亦衆、元祿中、上皇聞其篤學、老而不倦、特宜賜古硯、享保三年卒、年七十二。

江村綾君錫曰、余閱熙朝文苑、有可昌、謝賜硯表、其大意深欽、慶爲其傳家之寶云、然可昌一男一女、男不肖且癡疾、可昌沒後、不知賜硯流落何處。

大町質

字正淳、號敦素、京師人、學於伊藤仁齋、天資謹厚、好讀書、有通儒之名、淡泊自守、晏如也、既老、樂育生徒、多就其材、名重於縉紳之間、後爲小泉片桐侯見禮、給之稟餼、享保十四年卒、年七十一、私諡敬簡先生。

錦天山房時臨上冊

に在り、生徒を教授す、笈を負ふ者四方より雲集す、朝紳の之れが弟子やる者亦衆し、元祿中、上皇其篤學老ひて倦まざるを聞き、特に宜して古硯を賜ふ、享保三年卒す、年七十二。

江村綾君錫曰、余熙朝文苑を閲するに、可昌の賜硯を謝する表あり、其大意深く其傳家の寶と爲すことを欽慶すと云、然るに可昌一男一女、男不肖、且癡疾あり、可昌没して後、賜硯は何れの處に流落するを知らず。

大町質

字は正淳、敦素と號す、京師の人なり、伊藤仁齋に學ぶ、天資謹厚、好んで書を讀み、通儒の名あり、淡泊自ら守りて晏如たり、既に老ひて生徒を育ぶを樂む、多く其材を就さしむ、名、縉紳の間に重し、後、小泉片桐侯の爲に禮せられ、之れが稟餼を給せらる、享保十四年卒す、年七十一、私に敬簡先生と諡す。

江村毅君錫曰、梁蛻巖和徐文長詠雪七言八十韻、尖新精巧、膾炙遠近、教素有和作、傲其體、余少年時一再觀之、今不復記、可惜。

蔭山元質

字淳父、號東門、紀州人、少赴洛、學於伊藤仁齋、授生徒、後歸國、舉儒職、爲人敦厚、愿懇、以博學強記稱、詩賦非其所長、紀藩初未有庠校、正德癸巳、德廟潛藩之日、始設諸水門之地、時元質與祇南海掌其事、享保壬子卒、年六十四、所著有東門編。

松岡成章

字玄達、號恕庵、又號怡顏齋、京師人、學于伊藤仁齋、博學強記、無不該通、最研確本

江村毅君錫曰、梁蛻巖徐文長の詠雪七言八十韻に和す、尖新精巧、遠近に膾炙す、教素、和作あり、其體に傲ふ、余少年の時、一再之れを觀る、今復た記せず、惜むべし。

蔭山元質

字は淳父、東門と號す、紀州の人、少ふして洛に赴き、伊藤仁齋に學び、生徒に授く、後國に歸り、儒職に擧げらる、人と爲り敦厚、愿懇にして、博學強記を以て稱せらる、詩賦は其の長ずる所に非ず、紀藩初め未だ庠校あらず、正德癸巳、德廟潛藩の日、始めて諸れを水門の地に設く、時に元質、祇南海と其事を掌る、享保壬子卒す、年六十四、著す所東門編あり。

松岡成章

字は玄達、恕庵と號す、又、怡顏齋と號す、京師の人、伊藤仁齋に學ぶ、博學強記、該通せざるはなし、最本師家の學を研確す、諸國の生徒其席に上る者、毎に百を以て

帥家學、諸國生徒、上其席者、每以百數、少時頗事操觚、後以講學廢吟哦、故所傳詩篇至罕。

松下見櫟卷二 十八

字子節、號真山、京師人、受學於伊藤坦庵、篤志博綜、尤好著述。

江村綏君錫曰、余家藏子節詩若干、氣骨沈雄、翹一時、書法亦蒼勁、而潤美。

錦天山房詩話、真山詩名不甚著、然頗有

氣魄、如咏鷹詩、齊野玄霜楚澤水、十分猛氣、正騰騰目中、今已無凡鳥、

天外常想制天鵬、利爪幾經紅血戰、奇毛深入雲層、離骨一飽即騰去、左指右呼憐爾能、是也、雄渾悲壯、當於古人中求之。

木村之漸

字原造、號風梧、又號兼山、近江人、事伊藤

數、少時頗操觚、事とし、後に講學を以て吟哦を廢す、故に傳ふる所詩篇至りて罕なり。

松下見櫟卷二 十八

字は子節、真山と號す、京都の人、學を伊藤坦庵に受く、篤志博綜、尤著述を好む。

江村綏君錫曰、余が家に子節の詩若干を藏す、氣骨沈雄、一時に翹々たり、書法も亦蒼勁にして潤美なり。

錦天山房詩話、真山の詩名甚著れず、然れども頗氣魄あり、鷹を咏する詩の如き、雄渾悲壯、當に古人中に於て之れを求むべし。

木村之漸

字は原造、風梧と號す、又、兼山と號す、近江の人、伊藤東

東涯寓古義塾二十餘年、寛保中、因東叡法王之薦、徵爲紀藩儒職、明和己丑卒、年七十六、爲人淳謹、篤信師說、東涯沒後、按正其書者多矣。

奥田士亨

字嘉甫、號蘭汀、又號南山、又號三角亭、稱宗四郎、伊勢櫛田人、幼時就表叔柴田蘋洲學、蘋洲嘗謂曰、讀書宜師天下第一人、當今之世、京師伊藤原藏、卽其人也、汝可往而學、於是負笈遊東涯門、親炙十年、殆入其室、乃擢仕津侯、謹慎勤事、歷事四君、五十年、未嘗有過、侯皆眷注甚渥、老年致仕後、時招見之、呼曰先生、不名、性剛直、不能屈物、而孝友純至、享保乙卯、年三十三

涯に事へ、古義の塾に寓すること二十餘年、寛保中に、東叡法王の薦めに因り、徵されて紀藩の儒職と爲り、明和己丑卒す、年七十六、人と爲り淳謹、篤く師說を信じ、東涯沒後、其書を按正する者多し。

奥田士亨

字は嘉甫、蘭汀と號す、又南山と號す、又、三角亭と號す、宗四郎と稱す、伊勢櫛田の人、幼時、表叔柴田蘋洲に就きて學ぶ、蘋洲嘗て謂つて曰、書を讀まば宜しく天下第一人を師とすべし、當今の世、京師の伊藤原藏は、卽其人なり、汝往いて學ぶべしと、是に於て笈を負ひ、東涯の門に遊ぶ、親炙すること十年、殆其室に入る、乃擢んでられて津侯に仕ふ、謹慎事を勤む、四君に歷事すること五十年、未だ嘗て過あらさず、侯皆眷注、甚渥し、老年致仕の後、時に之を招見す、呼んで先生と曰いて、名いはず、性剛直、物に屈する能はず、而して孝友純至、享保乙卯、年三十三、父を喪ひ、明年東涯歿す、爲に酒肉を絶ち、心喪に服する者、合せて四年、賦質謙讓、年七十七、身後に及び人の諛墓の文を撰せんことを恐れ、是に於

喪父、明年東涯歿、爲絕酒肉、服心喪者合四年、賦質謙讓、年七十七、恐及身後人之撰諛墓之文、於是建壽碣、自紀履歷、其銘曰「起于田間、升中廳直、何以得之、稽古之力、年八十一而卒、著有三角集。」

原善公道曰、三角文集二卷、每卷首題奥田士亨著、詩三卷、每卷首題掃水燕僮著、掃水燕僮不知何謂也、而近聞其說、伊勢有櫛田川、三角居近之、因曰掃水、而奥田反燕、士亨反僮、不其見署姓名者、抑有故、南郭始刻其集初編也、入江南溟、以爲古人集皆及死後人傳之也、至其身自鏤之梓、則可笑甚也、乃通書于三角、以辯之、三角答書和南溟、俱駁南郭、旣而世生前鏤、

て壽碣を建て自ら履歷を紀す、其銘に曰、田間に起り、中廳の直に升る、何を以て之れを得る稽古の力と年八十一にして卒す、著に三角集あり。

原善公道曰、三角文集二卷、每卷首、奥田士亨著と題す、詩三卷、每卷首掃水燕僮著と題す、掃水燕僮とは何の謂ひなるを知らず、而して近ごろ其説を聞くに、伊勢に櫛田川あり、三角の居之れに近し、因て掃水と曰ふ、而して奥田の反は燕、士亨の反は僮なり、其見に姓名を署せざる者は、抑故あり、南郭始め其集初編を刻するや、入江南溟以爲へらく古人の集は、皆死後に及んで人之れを傳ふ、其身自ら之れを梓に鏤するに至つては、則ち笑ふべきの甚しきなりと、乃書を三角に通じて以て之れを辯す、三角答書して南溟に和し、俱に南郭を駁す、旣にして世、生前に其詩文を鏤する者漸く多し、人亦稱して盛事と爲す、三角心に之れを羨み、遂に自ら其集を刻す、然れども言に恥ぢて、詩集に至

其詩文者漸多、人亦稱爲盛事、三角心羨之、遂自刻其集、然恥前言、至詩集、則用隱名。

大井守靜

字篤甫、號義亭、攝津人家、世業買、少志學、博綜群籍、最好藏書、凡奇書珍篇、必捐重貲、典之、殆致數千卷、後來京師、講說、所著有蟻亭雜言。

江村段君錫曰、蟻亭詩集、手所撰定、名覆窠編、不襲時風、自爲一家、蕭散有趣、但集中數用奇字僻語、如柳巷畫彈、渾不似、杏村夕酌、醉如泥、又有以護花時對共惜春、殊遠風雅、蓋渾不似、樂器名、醉如泥、杯名、護花時共惜春、竝禽名。

りては、則隱名を用ふ。

大井守靜

字は篤甫、號と號す、攝津の人、家世、買を業とす、少ふして學に志し、博く群籍を綜ぶ、最、藏書を好み、凡そ、奇書珍篇、必重貲を捐て、之れを典す、殆、數千卷を致す、後、京師に來り講說す、著す所蟻亭雜言あり。

江村段君錫曰、蟻亭詩集、手づから撰定する所、覆窠編と名づく、時風を襲はず、自ら一家を爲す、蕭散趣あり、但集中數、奇字僻語を用ふ、柳巷畫彈、渾不似、杏村夕に酌む、醉如泥の如き、又、護花時を以て共惜春に對するあり、殊に風雅に遠さかる、蓋、渾不似は樂器の名、醉如泥は杯の名、護花時共惜春は竝に禽の名なり。

木下貞幹卷二
十九

字直夫、本姓平、稱平之丞、順庵錦里敏慎齋、齋薇洞、皆其別號、平安人、生而岐嶷、以神童聞、天台海公一見奇之、卽欲以爲法嗣、直夫不肯、年十三、作太平賦、世人驚歎、以爲國瑞、亞相爲丸藤公上之後光明帝、帝大稱賞、既而入松永昌三門、學業大進、昌三期以大器、一時名士、如貝原益軒、安東省庵、宇都宮遜庵、咸推服以爲不及、加賀菅公厚禮召之、辭曰、先師松永先生之子永三見在焉、請先聘焉、菅公嘉其義、卽與永三俱聘之、天和二年蒙簡拔爲大府儒員、元祿戊寅卒、年七十八、遺命以孝經殉葬、私諡靖恭、長子敬簡早卒。

木下貞幹卷二
十九

字は直夫、本姓は平、平之丞と稱す、順庵錦里敏慎齋、齋薇洞は、皆其別號、平安の人、生れて岐嶷、神童を以て聞ゆ、天台海公一見之れを奇とし、卽以て法嗣と爲さんと欲す、直夫肯んぜず、年十三、太平の賦を作り、世人驚歎し、以て國瑞と爲す、亞相烏丸藤公之れを後光明帝に上る、帝大に稱賞す、既にして松永昌三の門に入り、學業大に進む、昌三期するに大器を以てす、一時の名士、貝原益軒、安東省庵、宇都宮遜庵の如き、咸な推服して以て及ばすと爲す、加賀菅公禮を厚ふして之を召す、辭して曰、先師松永先生の子、永三見在り、請ふ先づ聘せよと、菅公其義を嘉みし、卽ち永三と與に之れを聘す、天和二年、簡拔を蒙り、大府の儒員と爲る、元祿戊寅卒す、年七十八、遺命して孝經を以て葬に殉す、私に靖恭と諡す、長子敬簡早く卒す。

物松茂卿曰、錦里先生者出、而搏桑之詩皆唐矣。

服元喬子遷曰、錦里先生、實爲文運之嚆矢、雖其詩不甚工、首唱唐。

柴邦彥輔曰、盛矣哉、錦里先生門之得人也、參謀大政、則源君美在中、室直清師禮、應對外國、則雨森東伯陽、松浦儀禎卿、文章則祇園瑜伯玉、西山順泰、健甫、南部景衡、思聰、博該、則榊原玄輔、希翊、皆瑰奇絕倫之材矣、其岡島達之至性、岡田文之謹厚、堀江輔之志操、向井三省之氣節、石原學魯之靜退、亦不易得者、而師禮之經術、在中之典刑、實曠古之偉器、一代之通儒也、夫以若數子之資、而終身奉遵服膺先

物松茂卿曰、錦里先生といふ者出でて、而して、搏桑の詩皆唐なり。

服元喬子遷曰、錦里先生は實に文運の嚆矢たり、其詩甚工ならずと雖、首めて唐を唱へたり。

柴邦彥輔曰、盛なるかな、錦里先生の門の人を得たるや、大政に參謀たるは、則、源君美在中、室直清師禮、外國に應對するには、則、雨森東伯陽、松浦儀禎卿、文章には、則、祇園瑜伯玉、西山順泰、健甫、南部景衡、思聰、博該には、則、榊原文輔、希翊、皆瑰奇絕倫の材なり、其岡島達之至性、岡田文の謹厚、堀江輔の志操、向井三省の氣節、石原學魯の靜退は、亦得易すからざる者、而して師禮の經術、在中の典刑、實に曠古の偉器、一代之通儒なり、夫れ若かくき數子の資を以て、而も終身先生の訓に奉遵服膺し、敢一辭の異同あらず、則先生の徳と學と想ふ可し。

生之訓、不敢一辭有異同焉、則先生之德與學可想矣。

江村綾君錫曰、順庵爲一世所敬慕、遠邇納贊及門者、不可勝數、而成德達材多出焉、新井在中、室師禮、雨森伯陽、祇園伯玉、柳原希翊、世謂之木門五先生、加之南部思聰、松浦禎卿、三宅用晦、服部紹卿、向井魯甫爲十哲、而思聰、禎卿爲同庚、稱之二妙、宇士新稱爲桃李滿門。

角田簡大可曰、順庵經學文章聞遐邇、朝鮮人每到對州、必求其文、傳誦而歸。

錦天山房詩話、建業以來、文治漸脩、詩教漸胚、爾時雖有石川丈山等一二碩士、首唱唐詩、然氣運未到、舊習未祛、至錦里先

錦天山房詩話上冊

江村綾君錫曰、順庵は一世の敬慕する所と爲り、遠邇贊を納れ、門に及ぶ者勝けて數ふ可からず、而して成德達材多く爲に出づ、新井在中、室師禮、雨森伯陽、祇園伯玉、柳原希翊、世に之れを木門の五先生と謂ひ、之れに南部思聰、松浦禎卿、三宅用晦、服部紹卿、向井魯甫を加へて十哲と爲す、而して思聰、禎卿同庚たり、之れを二妙と稱す、宇士新稱して桃李滿門と爲す。

角田簡大可曰、順庵、經學文章遐邇に聞ゆ、朝鮮人、對州に到る毎に、必其文を求め傳誦して歸る。

錦天山房詩話、建業以來、文治漸く脩まり、詩教漸く胚す、爾時石川丈山等一二碩士の唐詩を首唱するありと雖、然も氣運未だ到らず、舊習未だ祛らず、錦里先生出づるに至り、専ら唐を以て宗と爲す、此に於て白石南

生出、專以唐爲宗、於此白石南海等諸才人、皆萃其門、彼唱此和、鏗金鏘玉、殆與開天比隆矣、嗚呼盛矣、蓋雖由其教、人有方磨礱淬勵、成就才器、豈非川嶽鍾秀、以抒洩其菁英鬱勃之氣、發爲詩歌、用以鼓吹休明之運乎哉。

木下園堅

稱平七任加賀侯錦里之姪。

錦天山房詩話、此詩載錦里集附錄中、原十首、今錄二首、復摘數聯于左、遠遊、主柳州柳、盛德、隆師松子松、千古儒流、洙泗、當時道脈、繼河汾、秦人挽曲、賦黃鳥、謝傳、夢魂驚白鷄、鶻鶩書來嘗受戒、龍蛇讖合、忽傷神、人亡一鑑、方塘月、蘭折孤芳空

海等の諸才人、皆其門に萃る、彼れ唱へ此れ和す、鏗金鏘玉、殆んど開天と隆を比す、嗚呼盛なり、蓋其人を教ゆる方あり、磨礱淬勵、才器を成就するに由ると雖、豈川嶽鍾秀、以て其菁英鬱勃の氣を抒洩し、發して詩歌と爲り、用ひて以て休明の運を鼓吹するに非ざらんや。

木下園堅

平七と稱す、加賀侯に仕ふ、錦里の姪。

錦天山房詩話此の詩、錦里集附錄中に載す、原、十首、今、二首を録す、復數聯を左に摘す、遠遊、主あり柳州の柳、盛德師より隆んなり松子の松、千古の儒流、洙泗に派り、當時の道脈、河汾に繼ぐ、秦人の挽曲、黃鳥を賦し、謝傳の夢魂、白鷄に驚く、鶻鶩書來りて嘗て戒を受け、龍蛇讖合して忽ち神を傷む、人は亡ぶ一鑑、方塘の月、蘭は折る、孤芳空谷の風と、皆誦すべし。

谷風皆可誦。

新井君美^{卷三}

字在中、一字濟美、本姓源氏、稱勸解由、初名璵、號白石、又號錦屏山人、江戸人、生而岐嶷聰慧、三歲寫字、六歲誦書、既長器資宏偉、才負經綸、洽聞多識、通曉倭漢古今典故、從木下順庵學、順庵薦仕甲斐府、及文昭大君入繼大統、從升大府、叙從五位下、任筑後守、眷遇最盛、年六十九、享保十年卒、少有大志、常自誦曰、大丈夫生不得封侯、死當爲閻羅、祇南海作哭詩云、生逢聖世應無恨、死作閻羅足有爲、蓋記其平生之言也、著書甚富、凡一百六十餘種、近古所罕見也。

鍾天山房詩話上冊

新井君美^{卷三}

字は在中、一の字は濟美、本姓は源氏、勸解由と稱す、初名は璵、白石と號す、又錦屏山人と號す、江戸の人、生れて岐嶷聰慧、三歲にして字を寫し、六歲にして書を誦す、既に長じて器資宏偉、才經綸を負ふ、洽聞多識、倭漢古今の典故に通曉す、木下順庵に從ふて學ぶ、順庵薦めて甲斐府に仕へしむ、文昭大君入りて大統を繼ぐに及び、從つて大府に升り、從五位下に敘し、筑後の守に任ず、眷遇最盛なり、年六十九、享保十年卒す、少ふして大志あり、常に自ら誦して曰、大丈夫生れて封侯を得ざれば、死して當に閻羅となるべしと、祇南海、哭詩を作りて云ふ、生れて聖世に逢ふ應に恨なかるべし、死して閻羅と作る爲すあるに足る、と、蓋、其平生の言を記するなり、著書甚富む、凡一百六十餘種、近古罕に見る所なり。

祇園瑤伯玉曰、予之知己、莫如白石源公、其詩格調太高、清秋風露、燕趙豪士、悲歌慷慨之氣、

高俗女子新曰、嘗季之世、處海之外、曠逸滅沒、希音合調、中其肯綮、而不紊、存其脂粉、而餘馨、蓋爲其氣魄博大、象華煥爛、專以旋轉之功、而風骨有授、宜其有獨得之操也、而吾尤善其五言絕、吾所謂間亦有一二者、於公乎或見。

室直清師禮曰、君之詩、光華國家、溢美四方、其餘波、及海外者、北至朝鮮、南至琉球、又至堂堂清朝文化之國、莫不同然一辭、所至稱善、譬如荆璧隨珠、天下之寶者也、溫潤之色、淵然之光、有目者見而知之、是

祇園瑤伯玉曰、予の知己は、白石源公に如くはなし、其詩格調太だ高く、清秋風露、燕趙豪士、悲歌慷慨の氣あり。

高俗女子新曰、季の世に當り、海の外に處り、曠逸滅沒、希音合調、其肯綮に中り而して紊れず、其脂粉を存し而して馨を餘す、蓋其氣魄たる博大、象華煥爛、專旋轉の功を以てし、而して風骨授くるあり、宜なり其の獨得の操あるや、而して吾尤其五言絶を善とす、吾が謂はゆる間亦一二ある者、公子に於いてか或は見ん。

室直清師禮曰、君の詩、國家を光華し、四方に溢美す、其餘波、海外に及する者、北は朝鮮に至り、南は琉球に至る、又、堂堂清朝文化の國に至るまで、同然一辭、至る所善と稱せざるは莫し、譬へば荆璧隨珠、天下の寶なるが如き者なり、溫潤の色、淵然の光、目ある者見て之れを知る、是の故に秦吳同視、胡越合愛、初めより絶國殊俗を以て論を異にせず、揅ふて之れを藏せんと欲する

故秦吳同視、胡越合愛、初不以絕國殊俗而異論焉、欲揜而藏之得乎、○按、初不、疑、不始之、既倒、

新井明大亮曰、先大夫以經術遇知昭代、

而以詩名世、世之知先大夫者、特以詩、先

大夫生而異、三歲在襁褓、兒戲每寫字、視

之則天下一之字也、人以爲英物、及長慨

然有大志、中歲流落都下、家素貧、都下富

人某見其爲人、謂奇貨可居、欲妻以女、令

人說之、先大夫笑曰、子亦聞丘言乎、某所

有龍潭、小蛇遊潭之上、人微傷其腮、風雨

晦冥、失所在、時龍死、當他山之蹊、齋之瘼

尋許也、蓋遊潭者龍之蛇服也、故士窮則

死矣、豈求小利而生大瘼乎、其操志類如

此。

も得んや。

新井明大亮曰、先大夫、經術を以て、昭代に遇知せられ、而して詩を以て世に名あり、世の先大夫を知る者、特に詩を以てす、先大夫生れて異あり、三歳にして襁褓に在り、兒戲するに毎に字を寫す、之れを視れば則天下一の字なり、人以て英物と爲す、長ずるに及び、慨然として大志あり、中歳、都下に流落す、家素と貧、都下の富人某、其人と爲りを見て、奇貨居くべしと、謂へり、妻あはずに女を以てせんと欲し、人をして之れを説かしむ、先大夫笑つて曰、子も亦丘言を聞けりや、某所に龍潭あり、小蛇、潭の上に遊ぶ、人微しく其腮を傷つくるに、風雨晦冥、所在を失す、時に龍死して、他山の蹊に當れり、齋の瘼は尋許なりき、蓋、潭に遊ぶ者は龍の蛇服なり、故に士窮すれば則ち死せん、豈、小利を求めて大瘼を生ぜんやと、其志を操る類此の如し。

江村純君錫曰、白石天受敏妙、獨步藝苑、所謂錦心繡腸、咳唾成珠、嚶語諧韻者、索諸異邦古詩人中、未可多得者、而今人貴耳賤目、不甚信余言、雨芳洲所著橘窓茶話曰、韓人索白石詩草者、陸續不已、可見異邦人猶且玉之、白石嘗和清人魏惟度卜居七律八首、京師文士倣而和者數十人、坊間梓而行焉、白石覽之、前作有與諸人和詩相類者、因再作八首、語無牽強、押韻益穩、又冬日過某家、主人請詩、白石求題、主人書容奇二字示之、白石解其意、輒作七律一首、蓋容奇者、雪之訓讀、主人書之、以試白石、白石已解其意、故句句徵我、邦雪一座服其敏警、此一時遊戲、雖不足

江村純君錫曰、白石天受敏妙、藝苑に獨歩す、謂はゆる錦心繡腸、咳唾成珠、嚶語も韻に諧ふ者なり、諸れを異邦古詩人中に求むるに、未だ多く得べからざる者なり、而して今人は耳を貴びて目を賤しみ、甚、余が言を信ぜず、雨芳洲著す所の橘窓茶話に曰、韓人、白石の詩草を索むる者、陸續として已まずと、異邦人猶且玉之を玉とするを見べし、白石嘗て清人魏惟度卜居七律八首に和す、京師の文士倣ふて和する者數十人、坊間梓して焉を行ふ、白石之を覽るに、前作諸人の和詩と相類する者あり、因て再八首を作る、語に牽強なく、押韻益、穩なり、又、冬日某家に過ぎる、主人詩を請ふ、白石題を求む、主人、容奇の二字を書して之れを示す、白石、其意を解し、輒、七律一首を作る、蓋、容奇は雪の訓讀なり、主人之れを書し、以て白石を試む、白石已に其意を解す、故に句句我邦の雪に徴す、一座其敏警に服す、此れ一時の遊戲、全約を論ずるに足らずと雖、亦其天受の一斑を窺ふべし、或ひと余に問ふて曰、子極めて白石を稱す、詩は白石に至りて以て加ふるなきか、曰、非なり、天受の如きは以て加ふる蔑し、若し夫れ揣摩鍛鍊は、尙ほ論すべき者あり、之れを要するに天受の富

論全豹亦可窺其天受之一斑或問余曰、子極稱白石詩至白石蔑以加乎曰、非也、如天受誠蔑以加矣、若夫揣摩鍛鍊尙有可論者、要之天受之富吐言成章往往不遑思繹是以疵瑕亦復不鮮、白石送人之長安絕句云、紅亭綠酒畫橋西、柳色青青送馬蹄、君到長安花自老、春山一路杜鵑啼、四句中、二句全用唐詩、夫剽竊詩律所戒、而鍊丹成金猶可言也、以鉛刀代鑊錐將之何謂、草色青青送馬蹄、本臨岐妙語、草色送馬蹄、言春草承馬蹄、以柳代草、蹄字無著落、殊爲減價、此其一耳、餘可準知、原善公道曰、白石通曉倭漢古今典故、所述作之書世稱其有用善以國字紀事、是

錦天山房詩話上冊

言を吐きて草を成す、往々思繹するに遑あらず、是を以て疵瑕亦復た鮮からず、白石、人の長安に之くを送る絶句に云ふ、紅亭綠酒畫橋の西、柳色青々馬蹄を送る、君、長安に到らば花自ら老ひん、春山一路杜鵑啼く、と、四句中、二句は、全く唐詩を用ふ、夫れ剽竊は詩律の戒むる所、而して丹を鍊りて金を成す、猶言ふべきなり、鉛刀を以て鑊錐に代ふ、將た之れを何とか謂はん、草色青々馬蹄を送るは、本と臨岐の妙語、草色、馬蹄を送るとは、春草が馬蹄を承くるを言ふ、柳を以て草に代ふ、蹄の字著落なし、殊に價を減すと爲す、此れ其の一のみ、餘は準じて知るべし。

原善公道曰、白石、倭漢古今の典故に通曉す、述作する所の書世、其有用を稱す、善く國字を以て事を紀す、是を以て日用の簡牘と雖、皆以て傳ふるに足れり、素と

以雖日用簡牘皆足以傳矣素以經世爲任故雖詩至工妙不欲以教人稱門人者至寡矣田鶴樓獨以詩稱弟子白石與之交態終始不渝與佐久間洞巖書中云吾故人莫鶴樓如焉中秋月三十一年必借賞之今年亦攜二子來有詩云滿堂明月中秋色歸路清風十里程

角田簡大可曰韓使見白石推前所出煙盆謂曰那用此煙管薰我錦繡腸白石應聲答曰試用此煙管融我銅鐵腸乃引煙管吹煙一二管

任幹守用譽曰學富而氣亢格秀而詞藻采色相宜青律諧叶

李彦邦美伯曰格力清健詞彩萃絢不但音

經世を以て任と爲す故に詩工妙に至ると雖、以て人に教ふるを欲せず、門人と稱する者、至りて寡し、田鶴樓、獨り詩を以て弟子と稱す、白石之れと交態終始渝らず、佐久間洞巖に與ふる書中に云ふ、吾が故人は鶴樓に如くはなし、中秋の月三十一年必借に之れを賞す、今年亦二子を攜へて來り、詩あり云ふ、滿堂の明月中秋の色、歸路の清風十里程と。

角田簡大可曰、韓使、白石を見、前に出だす所の煙盆を推して、謂つて曰、那ぞ此の煙管を用ひて我が錦繡腸を薰ぜんやと、白石聲に應じて答へて曰、試に此の煙管を用ひて、我が銅鐵腸を融かせと、乃、煙管を引て煙を吹くこと一二管と。

任幹守用譽曰、學富み而して氣亢り、格秀で、而して詞藻采色相宜しく、音律諧叶す。

李彦邦美伯曰、格力清健、詞彩萃絢、但に音律の諧叶、聲調

律之諧叶、聲調之雅麗、獨運天機之妙、深得風雅之體、苟非特達之識、穎拔之才、惡能與於此哉。

李贇重叔曰、白石之詩、格清而響亮、語新而趣遠、往往有與唐人酷肖者。

趙位奉大年曰、白石之詩、萃絢而實茂、格高而趣雅、豪健而不流麗、蘊硬婉麗而不泥於纖巧、駸駸有盛唐人口氣。

鄭任維啓曰、雄思傑構、秀麗絕倫、蓋彬彬有三百篇之遺風焉、幽冲而偏造者、昔之韋孟也、宏暢而尙達者、昔之元白也、質而超於詣者、則陳杜之倫、藻而工於境者、則錢劉之屬。

錦天山房詩話、古今詩人、雖稱爲大家者、

の雅麗なるのみにあらず、獨、天機の妙を運らし、深く風雅の體を得たり、苟、特達の識、穎拔の才に非ずんば、惡ぞ能く此に與らんや。

李贇重叔曰、白石の詩、格清くして響亮に語新にして趣遠し、往々唐人と酷肖する者あり。

趙奉大年曰、白石の詩、萃絢にして實茂、格高くして趣雅、豪健にして流麗ならず、蘊硬婉麗にして、纖巧に泥まず、駸々として盛唐人の口氣あり。

鄭任維啓曰、雄思傑構、秀麗絶倫、蓋彬々として三百篇の遺風あり、幽冲にして偏に造る者は昔の韋孟なり、宏暢にして尙ほ達する者は、昔の元白なり、質にして詣に超ゆる者は、則陳杜の倫、藻にして境に工なる者は、則錢劉の屬。

錦天山房詩話、古今の詩人、稱して大家と爲す者と雖、

日本詩話叢書

就其全集而閱之、則玉石混淆、瑕瑜相半、獨白石集、篇篇珠玉、句句錦繡、流覽秀潤、美不勝收、所謂龍躍天門、鳳鳴朝陽者、非邪、是不唯其天才卓絕爲然、蓋因其鍛鍊之功亦至也、北海譏其多瑕疵、謬矣、祇惜集中所錄、多係近體、殊乏古調、可謂一大陷缺也、近世野村篁園、以白石爲藍本、絢爛過之、建藝以來、雖作者如林、余之所最推者、唯此二家耳。

室直清

卷三
十一

字師禮、一字汝玉、稱新助、號鳩巢、又號滄浪、備中英賀郡人、年甫十五、出仕、加賀菅公、一日、命講大學義理、明辨、公以爲異器、乃令入京師、受業木下順庵、學成北歸、正

一五六

其の全集に就いて之れを閲すれば、則玉石混淆、瑕瑜相半す、獨白石集、篇々珠玉、句句錦繡、流覽秀潤、美、收むるに勝へず、謂はゆる龍、天門に躍り、鳳、朝陽に鳴く者か、非か、是れ唯に其の天才卓絶然りと爲すのみにあらず、蓋其鍛鍊の功亦至れるに因るなり、北海其の瑕疵多きを譏るは謬れり、祇、惜むらくは、集中録する所、多く近體に係り、殊に古調に乏し、一大陷缺と謂ふべし、近世野村篁園、白石を以て藍本と爲す、絢爛之れに過ぐ、建藝以來作者林の如しと雖、余の最推す所の者は、唯此の二家のみ。

室直清

卷三
十一

字は師禮、一の字は汝玉、新助と稱す、鳩巢と號す、又、滄浪と號す、備中英賀郡の人、年甫めて十五出で、加賀菅公に仕ふ、一日命じて大學を講ぜしむ、義理明辨、公以て異器と爲す、乃、京師に入り業を木下順庵に受けしむ、學成りて北歸す、正徳元年、大府の儒員に擧げら

德元年、舉大府儒員、適韓人來聘、奉命往而接之、唱酬成卷、韓人大稱、後領高倉館教授、有德大君繼統之後、擢授殿中侍講、信任甚厚、享保十九年卒、年七十七、男洪漢、字孔彰、稱忠三郎、先卒、所著鳩巢文集、四十四卷、行于世。

伊東貞澹齋曰、先生幼以神童稱、既長從鉅儒名賢、講究益勤、研精覃思、集其大成、充實之美、英華之發、揚休山立、玉色金聲、蓋其深造之奧、自得之妙、非後學之所能闕而測也、其與韓使往復贈答之什、積成卷囊、應對如流、斟酌焉愈盈、淵涵渟滄、混濛激清、偉篇傑作、大東振古所未有也。

河合專□□曰、先生以睿明特達之資、修

る、適韓人來聘す、命を奉じて往いて之に接す、唱酬卷を成す、韓人大に稱す、後高倉館の教授を領す、有德大君統を繼ぐの後、擢んで殿中侍講を授く、信任甚厚し、享保十九年卒す、年七十七、男洪漢、字は孔彰、忠三郎と稱す、先づ卒す、著す所、鳩巢文集四十四卷、世に行はる。

伊東貞澹齋曰、先生幼にして神童を以て稱せらる、既に長じて鉅儒名賢に従ひ、講究益、勤む、研精覃思、其の大成を集む、充實の美、英華の發、揚休山立、玉色金聲、蓋其の深造の奧、自得の妙、後學の能く闕測する所に非ず、其、韓使と往復贈答の什、積んで卷囊を成す、應對流るゝが如し、焉を斟酌んで愈盈つ、淵涵渟滄、混濛激清、偉篇傑作、大東、振古より未だ有らざる所なり。

河合專□□曰、先生睿明特達の資を以て、涖泗濂浴の

洙泗濂洛之正學、韜聲膺德、不與時競、退閑、先生之道、以扶綱常、爲己任矣、詩文蓋其緒餘耳、而察行文遺辭之間、蓋以高邁正大之氣、發優游自得之辭、譬如策駿馬、下長阪、翩翩乎有千里不遏之勢、有道之氣象、藹然於言表。

山田君文蔚曰、先生之文、雄深宏博、偉麗典雅、一出乎仁義道德之中、而沛如也、其所以羽翼聖學、維持世教者、大有益於天下後世、而非世之名能文者所企及也。

江村君錫曰、經儒不習、文藝、文士或遺經業、能兼二者、唯東涯滄浪二儒而已、其訓詁異同、不必論也、滄浪詩、五言古體、學陶而未得其自然、七言古風、五言近體、師

正學を修め、聲を韜み徳を晦まし、時と競はずして閑に退く、先生の道、綱常を扶くるを以て己の任と爲す、詩文は蓋其の緒餘のみ、而して行文遺辭の間を察するに、蓋高邁正大の氣を以て、優游自得の辭を發す、譬如駿馬に策つて長阪を下るが如し、翩翩乎として千里遏まらざるの勢あり、有道の氣象、言表に藹然たり。

山田君文蔚曰、先生の文、雄深宏博、偉麗典雅、一に仁義道德の中より出づ、而して沛如たり、其の聖學に羽翼し、世教を維持する所以の者、大に天下後世に益あり、而して世間の能文と名づくる者の企及する所に非ざるなり。

江村君錫曰、經儒は文藝に習はず、文士は或は經業を遺つ、能く二者を兼ぬるは、唯東涯滄浪の二儒のみ、其の訓詁の異同、必しも論ぜざるなり、滄浪の詩、五言古體、陶を學んで而して未だ其自然を得ず、七言古風、五言近體、少陵を師法として、尙ほ垣籬を隔つ、七言近

法少陵、尙隔垣牆、七言近體、祖襲盛唐諸家、而往往出明人逕蹊、若夫五言排律、學力與才氣相觀、豪健騰踔、最爲當行、分摘七言雄拔者、數聯、關中豪傑推王猛、江左風流起謝安、天上雙懸新日月、人間相看舊衣冠、天連滄海長雲絕、月滿大江灝氣浮、鞏下衣冠尊五品、日邊花萼共三春、蘭省春傳紅葉賦、鳳池波動紫霞袍、薦賦何人逢狗監、求才幾處出龍媒。

原善公道曰、鳩巢與護國之徒、互相輕、金華一日來見鳩巢、出其得意文一篇示之、且求刪正、鳩巢一過稱善、金華強乞正、乃削二十字、更益五字、金華不喜而去、質諸南郭、南郭不得決、又質諸徂徠、徂徠視鳩

體、盛唐諸家を祖襲し、而して往々明人の逕蹊に出づ、若し夫れ五言排律、學力と才氣と相駕す、豪健騰踔、最當行と爲す、七言の雄拔なる者數聯を分摘せん、關中の豪傑は王猛を推し、江左の風流は謝安を起す、天上雙び懸く新日月、人間相看る舊衣冠、天、滄海に連りて長雲絶え、月、大江に滿ちて灝氣浮ぶ、鞏下の衣冠、五品を尊び、日邊の花萼、三春を共にす、蘭省、春は傳ふ紅葉の賦、鳳池、波は動く紫霞の袍、薦賦何人か狗監に逢ふ、求才幾處か龍媒を出だす。

原善公道曰、鳩巢は護國の徒と互に相輕んず、金華一日來りて鳩巢を見、其得意の文一篇を出だして之れを示し、且刪正を求む、鳩巢一過善と稱す、金華強いて正を乞ふ、乃二十字を削り、更に五字を益す、金華喜ばずして去り、諸を南郭に質す、南郭決するを得ず、又、諸を徂徠に質す、徂徠、鳩巢の竄改する所の者を視て、曰此の如くして而して後文を成すと、是に於て其徒鳩巢を

巢所竄改者、曰如此而後成文、於是其徒重鳩集。

錦天山房詩話、滄浪、古風、冲澹、時有見道之言、近體、高華、雄整、追武、嘉隆、長律、最雅、頗見才力、實如北海所論、祇惜聲律多乖、瑕瑜不掩、且集中警句頗多、不止北海所摘、其全首可誦者、既錄于篇、他五言、客居秋懷云、宦羈悲籠鳥、形役羨池魚、訪隱者不遇云、虛室自生白、晴窓堪草玄、首夏猶清和云、麥畦晨氣潤、竹徑夜涼微、新年云、時秦市朝靜、春還天地寬、七言、詠王莽云、周公復辟終爲假、劉氏興王自有真、元日云、五色雲開鵬擊外、萬家春到鳥聲中、又、鳥洩天機、纒著語、花關人意、對忘言、和釋

重んず。

錦天山房詩話、滄浪、古風、冲澹、時に見違の言あり、近體、高華、雄整、嘉隆に追武す、長律、最雅、頗、才力を見る、實に北海の論する所の如し、祇、惜むらくは聲律多く乖けり、瑕瑜掩はず、且集中警句頗多し、正に北海の摘む所のみならず、其全首誦すべき者は、既に篇に録す、他の五言、客居秋懷に云ふ、宦羈籠鳥を悲み、形役池魚を羨む、隱者を訪ふて遇はざるに云ふ、虛室自ら白を生ず、晴窓文を草するに堪へたり、首夏猶清和に云ふ、麥畦晨氣潤ひ、竹徑夜涼微なり、新年に云ふ、時秦にして市朝靜に、春還りて天地寬なり、七言、王莽を詠するに云、周公復辟終に假と爲し、劉氏興王自ら眞あり、元日に云ふ、五色雲は開く鵬擊の外、萬家春は到る鳥聲の中、又、鳥は天機を洩し、纒に語を著け、花は人意に關し、對して言を忘る、釋法華の春興に和するに云ふ、六時已に證す無生の說、半偈空しく持す不死の神、白石に酬ふに云ふ、彈劍誓と諧んず漁父の唱、授衣初めて試む令公の香、綠師に和して兼ねて離情を言ふに云ふ、

法霖春興云、六時已證無生說、半偈空持不死神、酬白石云、彈劍舊語漁父唱、披衣初試、令公香、和綠師兼言離情云、湖上荒烟悲舊國、關門落日問前程、和人云、何用當空書咄咄、祇須開卷味玄玄、又把酒肯論、千日醉、看花聊樂百年春、有感云、客氣去時能見道、人謀盡處始知天、和瓦鷄翁云、月中落葉雨聲下、水底寒雲山影流、皆佳聯也。

高玄岱卷三十二

一名貞恆、字子新、一字斗膽、號天漪、又號葵山、稱新右衛門、肥前人、祖贊胡、壽覺、福建彰郡人、慶長中、航海寓于薩摩州、業醫、後歸明、父大誦、號一覽、年十六、跡父入

湖上の荒烟舊國を悲しみ、關門の落日前程を問ふ、人に和するに云ふ、何ぞ用ひん空に當りて咄々を書するを、祇、須らく卷を開いて玄々を味ふべし、又酒を把りて肯て論ぜんや千日の醉、花を看て聊樂しむ、百年の春、感あるに云ふ、客氣去る時能く道を見、人謀盡る處始めて天を知る、瓦鷄翁に和するに云ふ、月中の落葉雨聲下り、水底の寒雲山影流ると、皆佳聯なり。

高玄岱卷三十二

一名は貞恆、字は子新、一の字は斗膽、天漪と號す、又葵山と號す、新右衛門と稱す、肥前の人、祖贊胡、壽覺と號す、福建彰郡の人、慶長中、海に航して薩摩州に寓す、醫を業とし、後、明に歸る、父大誦、一覽と號す、年十六、父に跡て明に入る、十餘年を経て還る、長崎の譯者と爲

明經十餘年而還、爲長崎譯者、改姓高、爲深見氏、子新幼有瑰才、學於僧獨立、傍通醫術、以醫游事、薩侯久光、無幾去住、長崎爲人豪宕卓犖、富豪者不與爲禮、貧窮好學者、輒加愛敬焉、故豪長皆忌害之、子新尙氣節、常曰、大丈夫之處世也、不可聘志於青雲、何必因人碌碌里巷相徵逐乎、實永七年、與室鳩巢三宅觀瀾、同應大府之徵、來江戸、列儒員、八年、韓使來聘、命子新及新井君美、預其事、賜白銀及時服、子新善書、與林道榮齊名、世目爲長崎二妙、享保壬寅、年七十八卒、弟順麟、字子春、才氣出群、博覽文史、長于詞賦、爲人廉正、時人稱爲學行兼優、其詩無所見、附記于此。

○按、不可兩字、當字、作

る、姓を高と改め、深見氏と爲す、子新幼にして瑰才あり、僧獨立に學び、傍ら醫術に通ず、醫を以て薩侯久光に游事し、幾もなくして去て長崎に住す、人と爲り豪宕卓犖、富豪者には與に禮を爲さず、貧窮學を好む者には、輒ち愛敬を加ふ、故に豪長皆之を忌害す、子新氣節を尙び、常に曰、大丈夫の世に處するや、志を青雲に馳すべからず、何ぞ必しも人に因て碌々として里巷に相徵逐せんやと、實永七年、室鳩巢三宅觀瀾と、同じく大府の徵に應じ、江戸に來り、儒員に列す、八年、韓使來聘す、子新及び新井君美に命じ、其事に預らしむ、白銀及び時服を賜ふ、子新、書を善くし、林道榮と名を齊くす、世目して長崎の二妙と爲す、享保壬寅、年七十八にして卒す、弟順麟、字は子春、才氣群に出づ、博く文史を覽、詞賦に長ず、人と爲り廉正、時人稱して學行兼優と爲す、其詩見る所なし、此に附記す。

錦天山房詩話、天濤、生長西鄙、奮翰東都、奇氣逸才、推倒一世、而所傳詩殊轟勃、不副者何也。

高但賢

字松年、號雪溪、稱久太夫、後稱新兵衛、晚號石翁、天濤長子、享保三年襲爲儒官、六年奉命掌海外市舶事、往長崎、復命稱旨、賜白銀十枚、十九年爲祕書、又拜西城後門番帥、賜六品服、明和五年病免、安永二年卒。

三宅正名

字實父、號石庵、又號萬年、京師人、幼而好學、稍長、爽親、一意耽學、不事生產、家道日窮、乃斥賣家什、以償債、所餘僅數金耳、謂

錦天山房詩話、天濤、西鄙に生長し、翰を東都に奮ふ、奇氣逸才、一世を推倒す、而して傳ふる所の詩、殊に轟勃にして副はざるは何ぞや。

高但賢

字は松年、雪溪と號す、久太夫と稱す、後、新兵衛と稱す、晚に石翁と號す、天濤の長子なり、享保三年、襲いで儒官と爲る、六年命を奉じ、海外市舶の事を掌る、長崎に往く、復命して、旨に稱ふ、白銀十枚を賜ふ、十九年祕書と爲る、又、西城後門番帥を拜し、六品の服を賜ふ、明和五年病んで免す、安永二年卒す。

三宅正名

字は實父、石庵と號す、又、萬年と號す、京師の人、幼にして學を好み、稍長じて親を喪ふ、一意、學に耽り、生産を事とせず、家道日に窮まる、乃、家什を斥賣し、以て債を償ふ、餘す所僅に數金のみ、弟觀瀾に謂つて曰、今、貧極

弟觀瀾曰、今雖貧極、短褐蔬食、可以支數年、鑽研不輟、至忘寢食、後兄弟共游江都、教授取給、居數年、歸京師、時年三十三、適讚岐木村氏以禮迎之、往居四年、邑中翹化、稍加嚮學、尋至大阪、倡程朱學、時名翹然起、弟子雲集、中井登庵等相謀、請諸官、建庠校、名懷德堂、推實父主之、固辭、不可、遂領祭酒事、旁工書、而資質朴素、其所書未嘗款印、又通和歌及諧歌、性儉素、終身不服絹布、享保十五年、年六十六卒、子正誼、字子和、號春樓、克承家學。

香川修太冲曰、世呼石庵爲鶴學問、此謂其首朱子、尾陽明、而聲似仁齋也。

錦天山房詩話、石庵之詩、傳者甚少、余嘗

と雖短褐蔬食せば、以て數年を支ふべしと、鑽研して輟まず、寢食を忘るゝに至く、後、兄弟共に江都に遊ぶ、教授して給を取る、居ること數年、京師に歸る、時に年三十三、適、讚岐木村氏、禮を以て之れを迎ふ、往いて居ると四年、邑中化を承けて稍、加、學に嚮ふ、尋で大阪に至り、程朱の學を信ふ、時に名翹然として起り、弟子雲集す、中井登庵等相謀り、諸を官に請ひ、庠校を建て、懷德堂と名づけ、實父を推して之を主とす、固く辭すれども、可かず、遂に祭酒の事を領す、旁ら書を工にす、而して資質朴素、其の書する所、未だ嘗て款印せず、又和歌及諧歌に通ず、性儉素、終身絹布を服せず、享保十五年、年六十六にして卒す、子正誼、字は子和、春樓と號す、克く家學を承く。

香川修太冲曰、世に、石庵を呼んで鶴學問と爲す、此れ其首は朱子、尾は陽明、而して聲は仁齋に似たるを謂ふなり。

錦天山房詩話、石庵の詩、傳ふる者甚少なし、余嘗て其

觀其異蹟於觀瀾之孫令聞家其書草體、第二句首二字不可辨識、且以意填其所、近似字、未知其果然也否、以別無所見、故姑收載。

三宅緝明

字用晦、京師人、號觀瀾、稱九十郎、石庵弟也、初師事淺見綱齋、後如江戶、從木下錦里而學、天資聰悟、讀書五行俱下、以文章聞、嘗作拜楠子墓文、鵜飼金平采上、水戶義公、公見歎異、辟爲國史編修總裁、正徳壬辰、新井白石薦諸大府、擢爲儒官、時年三十八、享保戊戌病卒、著有中興鑑言、烈士復讎錄、觀瀾集。

梁田邦美景鸞曰、文章典雅、賁以藻火黼黻、

眞蹟を觀瀾の孫令聞の家に觀る、其書草體、第二句首の二字、辨識すべからず、且く意を以て其近似する所の字を填む、未だ其果して然るや否やを知らず、別に見る所なを以ての故に姑く收載す。

三宅緝明

字は用晦、京師の人、觀瀾と號す、九十郎と稱す、石庵の弟なり、初め淺見綱齋に師事す、後、江戶に如き、木下錦里に従ふて學ぶ、天資聰悟、讀書五行俱に下る、文章を以て聞ゆ、嘗て楠子の墓を拜する文を作る、鵜飼金平采りて水戸義公に上る、公見て歎異す、辟して國史編修總裁と爲す、正徳壬辰、新井白石、諸を大府に薦め、擢んで、儒官と爲す、時に年三十八、享保戊戌病んで卒す、著に中興鑑言、烈士復讎錄、觀瀾集あり。

梁田邦美景鸞曰、文章典雅、賁るに藻火黼黻を以てし、楠

書楠子碑陰、雖出於少時之作、既足以見所養之深粹、而志氣精采之鬱滄矣、宜乎蚤有譽于水府、而司史筆之冕鉞也、館僚安積栗山二子有材識而博物、且尙退舍、使英華擅發焉。

江村綾君錫曰、停雲集載、觀瀾寄京師人詩、中聯云云、○中聯曰、三更燈火、波心市、十里絃歌、岸上樓、杜父魚肥、杯可、摩、牛王廟、古葉將、秋、以其俳偶易入世耳、隋炙一時、

余謂三四爲攝之安治川作、則佳矣、鴨水涓涓曾不容刀、波心二字殊爲無謂、第六句徒事對偶、枯景不切、牛廟六月、羅穀相摩、香風撲鼻、何曾有此凄涼、觀瀾又有咏倭刀詩、我邦人咏我邦刀、題曰咏刀可也、詎用曰倭、宋明多此等詩、傲而作之、則曰、

子碑陰に書す、少時の作に出づると雖、既に以て養ふ所の深粹にして、而して志氣精采の鬱滄たるを見る、宜べなるかな、蚤く水府に譽れあり、而して史筆の冕鉞を司るなり、館僚安積栗山二子、材識あり、而して博物なり、且尙ほ退舍して、英華をして擅に發せしむ。

江村綾君錫曰、停雲集に觀瀾、京師の人に寄する詩を載す、中聯云云、其の俳偶、世耳に入り易きを以て、一時に膾炙す、余謂ふ、三四攝の安治川の作と爲さば、則可なり、鴨水涓々、會て刀を容れず、波心の二字殊に謂れ無しと爲す、第六句徒に對偶を事とす、景を粘する切ならず、牛廟六月、羅穀相摩し、香風鼻を撲つ、何ぞ會て此の凄涼有あらんや、觀瀾、又倭刀を咏する詩あり、我邦人にして我邦の刀を咏す、題して刀を咏すと曰ふて可なり、詎ぞ倭と曰ふを用ひん、宋明に此等の詩多し、傲ふて之れを作らば、則ち、日本刀を咏するに擬すと曰はば、猶ほ可なり、觀瀾、重名ありて、而も此の破綻あるは何ぞや。

擬咏日本刀、猶可也、觀瀾有重名、而有此
破綻何也。

原善公道曰、觀瀾年不得壽、有著書、亦不多布于世、是以到今名寥寥少聞、然其學術文章、當世與有名士、竝稱物徂徠與竹春庵書、稱葢震庵文曰、習宋人之文焉、視其所結撰、不出於東涯觀瀾之下、又雨芳洲橋窓茶話曰、觀瀾鳩巢徂徠何如、曰、之數人也、盛名雷轟、何待乎曹丘生也、又蛻巖文柄贈桂彩巖曰、物徂徠老矣、弩末不能入縞、天又奪滕煥圖、如失左右手、室鳩巢、醉乎古先生、澹泊自守、無關心也、宅觀瀾堅轍駿臺、堂堂正正之威、殆使牛門塞關、不敢東飲馬矣、不幸星隕、可勝嘆也。

錦天山房詩話上冊

原善公道曰、觀瀾年、壽を得ず、著書あるも、亦多く世に布かず、是を以て今に到りて、名寥寥として聞ゆること少なり、然して其學術文章、當世に有名の士と竝べ稱せらる、物徂徠の竹春庵に與ふる書に、葢震庵の文を稱して曰、宋人の文を習ふ、其結撰する所を視るに、東涯觀瀾の下に出ですと、又雨芳洲の橋窓茶話に曰、觀瀾鳩巢徂徠は何如、曰、之の數人や盛名雷轟、何ぞ曹丘生を待たんと、又蛻巖が文柄、桂彩巖に贈るに曰、物徂徠老ぬ、弩末、縞に入る能はず、天又た滕煥圖を奪ふ、左右の手を失ふが如し、室鳩巢は醉乎たる古先生、澹泊自ら守りて關心なし、宅觀瀾は轍を駿臺に堅て、堂堂正々の威、殆んど牛門をして關を塞ぎ、敢て東のかたに馬に飲はせざらしむ、不幸にして星隕つ、嘆するに勝ゆべけんや。

一六七

錦天山房詩話、觀瀾青年英聲夙振、一時

鉅公名匠皆爲推遜、此必有太過人者也、然其遺集見存、詩殊寥寥、不足觀采焉、蓋篇章散佚、十不存一乎、將天分有限、韻語非其所長乎。

三宅維祺

稱總十郎、觀瀾弟、享保十三年卒於水戸、年四十九。

錦天山房詩話宅氏兄弟五人、石庵觀瀾最著、維祺乃其季弟也、觀其遺稿、筆法適美、可見宅氏多才。

服部保庸

字紹卿、初名保廣、號寬齋、又號龍溪、稱藤十郎、父保考、稱清助、江戸人、少好學、受業

錦天山房詩話、觀瀾青年英氣夙に振ふ、一時の鉅公名匠、皆爲に推遜す、此れ必大に人に過ぐる者あるなり、然るに其の遺集見存、詩殊に寥寥、觀采するに足らず、蓋、篇章散佚して、十に一を存せざるか、將た天分限りあり、韻語は其の長する所に非ざるか。

三宅維祺

總十郎と稱す、觀瀾の弟、享保十三年水戸に卒す、年四十九。

錦天山房詩話、宅氏兄弟五人、石庵觀瀾は最著はる、維祺は乃其季弟なり、其遺稿を觀るに、筆法適美、宅氏の多才を見るべし。

服部保庸

字は紹卿、初めの名は保廣、寬齋と號す、又龍溪と號す、藤十郎と稱す、父保考清助と稱す、江戸の人、少ふして學を好み、業を木下順庵に受く、傍ら書を習くす、文

於木下順庵、傍善書、文昭大君、在櫻田邸、徵爲儒官、及入繼大統、從爲大府儒官、享保十四年卒、紹卿幼聰敏、亦學於木下順庵、居家孝友、強記力學、博涉群書、不就才華、順庵常稱其謹厚、以父蔭爲櫻田邸侍講、後爲大府儒官、享保四年命說書於高倉學館、六年六月三日病卒、年四十八。

江村毅君錫曰、寬齋詩頗清暢。

錦天山房詩話、服氏昆季、竝才藻蔚茂、未易軒輊、雖瑕瑜不相掩、無害其爲美璞也。

向井三省

字魯甫、號滄洲、稱小三次、攝津人、幼師木下錦里、兄事柳震澤、震澤無子、因繼其家、冒柳川氏、臨終遺命、復其本姓、爲人慷慨

錦天山房詩話上冊

昭大君、櫻田邸に在り、徵して儒官と爲す、入りて大統を繼ぐに及んで、從つて大府の儒官と爲る、享保十四年卒す、紹卿幼にして聰敏、亦、木下順庵に學ぶ、家に居て孝友、強記力學、博く群書に涉り、才華を競はず、順庵常に其謹厚を稱す、父の蔭を以て櫻田邸の侍講と爲る、後、大府の儒官と爲る、享保四年命ぜられて書を高倉學館に説く、六年六月三日病んで卒す、年四十八。

江村毅君錫曰、寬齋の詩頗清暢なり。

錦天山房詩話、服氏昆季、竝に才藻蔚茂、未だ軒輊し易からず、瑕瑜相掩はずと雖、其美璞たるに害なきなり。

向井三省

字は魯甫、滄洲と號す、小三次と稱す、攝津の人、幼にして木下錦里を師とし、柳震澤に兄事す、震澤子なし、因て其家を繼ぎ、柳川氏を冒す、終りに臨みて遺命して、其本姓に復せしむ、人と爲り慷慨、氣節を尙び、著述を

尙氣節、不喜著述、享保辛亥卒、年六十六、
滄洲教授有方、其門人成材、顯者頗多。

江村君錫曰、元和以來從事翰墨者、雖
師承去取不一、大抵於唐祖杜少陵韓昌
黎、于宋宗蘇黃二陳陸務觀等、至雲溪始
右唐左宋、而猶未及初盛中晚之目、滄洲
出而後始以盛唐爲鵠、余謂是之時物徂
徠唱古文辭於關東、稱揚明李王、輕俊子
弟靡然爭從、然京師未有爲其說者、而今
誦滄洲詩、駸駸乎明人聲口、蓋氣運所鼓
作者亦莫知其然而然也。

錦天山房詩話滄洲、歛崎磊落、而其詩清
婉、殊不似其爲人。

兒島景范

喜ばず、享保辛亥卒す、年六十六、滄洲、教授方あり、其門
人材を成し顯るゝ者頗多し。

一七〇

江村君錫曰、元和以來翰墨に従事する者、師承去取
一ならずと雖、大抵唐に於ては杜少陵韓昌黎を祖と
し、宋に于いては蘇黃二陳陸務觀等を宗とす、雲溪に
至りて始めて唐を右にし宋を左にす、而して猶未だ初
盛中晚の目に及ばず、滄洲出で而して後、始めて盛唐
を以て鵠と爲す、余謂ふ、是の時、物徂徠、古文辭を關東
に唱へ、明の李王を稱揚す、輕俊の子弟、靡然として爭
ひ従ふ、然して京師には未だ其説を爲す者あらず、而
して今、滄洲の詩を誦するに、駸々乎として明人の聲
口なり、蓋氣運の鼓する所、作者も、亦其然るを知る、莫
くして然るなり。

錦天山房詩話、滄洲、歛崎磊落、而して其詩は清婉殊に
其人と爲りに似ず。

兒島景范

字宋文號天渤、木順庵門人。

錦天山房詩話、景范或作景範、桂彩巖今獻詩英、作倪景范、蓋慕范希文而製名字者也、然則作范者似是、故今從之、其詩不多見、然句格精鍊、似遠在天漪觀瀾之右、而白石南海諸選、共不錄及、不知何故也。

西山順泰^{卷三}

字健甫、號蘋洲、稱太郎八、又稱健助、對州人、本姓阿比留氏、後改西山、年二十餘、州辟爲書記、因肄業於木下順庵之門、自恨學晚、勤苦讀書、晝夜不息、才思敏贍、作爲文章、輒數百千言、及其疾病、乃命其僕、取平生稿而焚之、曰、若我文章何用、遺後爲元祿戊辰沒于學舍、時年三十一、順庵深

錦天山房詩話上冊

字は宋文、天渤と號す、木順庵の門人なり。

錦天山房詩話、景范、或は景範に作る、桂彩巖の今獻詩英に、倪景范に作る、蓋、范希文を慕ふて名字を製せし者なり、然らば則范に作る者は似たり、故に今之れに従ふ、其詩多く見ず、然るに句格精鍊、遠く天漪觀瀾の右に在るに似たり、而して白石南海の諸選、共に錄及せず、何の故なるを知らざるなり。

西山順泰^{卷三}

字は健甫、蘋洲と號す、太郎八と稱す、又健助と稱す、對州の人、本姓は阿比留氏、後、西山と改む、年二十餘にして州辟して書記と爲す、因て業を木下順庵の門に肄ふ、自ら學ぶの晚きを恨む、勤苦讀書し、晝夜息まず、才思敏贍なり、文章を作爲するに、輒ち數百千言、其病、疾なるに及び、乃其僕に命じ、平生の稿を取りて之れを焚かしむ、曰、我文章の若き、何を用ひて後に遺すことを爲んと、元祿戊辰學舍に沒す、時に年三十一、順庵深

日本詩話叢書

惜其才、自撰碑銘。

新井美君在中曰、我嘗得見蘋洲熱海行七

言古風五十韻、俊逸高暢、今則忘焉。

東條耕子藏曰、西山學於順庵、與新井白

石室鳩巢、切劘其業、聲價稍顯於同門之

士、與南部南山同甲子、當時謂之木門二

妙、後、松浦霞沼與、祇園南海同庚、人謂之

後二妙、前後二妙之稱、喧傳於藝園云。

榊原玄輔

字希翊、號蘆洲、稱小太郎、泉州人、其先伊

賀州下山氏也、幼爲外父所養、因冒榊原

氏、少負奇氣、初游學京師、受業木下順庵

門人、後隨外父赴東都、始謁順庵、順庵大

稱異、未幾應紀藩辟、釋褐儒官、其學博綜

一七二

く其才を惜み、自ら碑銘を撰す。

新井美君在中曰、我嘗て蘋洲の熱海行七言古風五十韻

を見ることを得たり、俊逸高暢、今は則忘れたり。

東條耕子藏曰、西山は順庵に學び、新井白石・室鳩巢、

其業を切劘し、聲價、稍同門の士に顯はる、南部南山と

甲子を同じくし、當時之れを木門の二妙と謂ふ、後、松

浦霞沼と祇園南海と同庚、人之れを後の二妙と謂ふ、

前後と後二妙の稱、藝園に喧傳すと云ふ。

榊原玄輔

字は希翊、蘆洲と號す、小太郎と稱す、泉州の人、其先伊

賀州下山氏なり、幼にして外父の養ふ所と爲り、因て

榊原氏を冒す、少ふして奇氣を負ふ、初め京師に遊學

し、業を木下順庵の門人に受く、後、外父に隨ひ、東都に

赴き、始めて順庵に謁す、順庵大に稱異せり、未だ幾く

ならずして紀藩の辟に應じ、褐を儒官に釋く、其學博

綜、旁ら星曆五行、風水數術の説に通じ、兼て篆隸及び

旁通星曆五行風水數術之說兼工篆隸及畫專留意於經濟尤精究明律嘗奉侯命撰明律譯解三十六卷其餘所著易學啓蒙老子古文具寶等諺解山谷集注鈔書言俗解詩法授幼抄印章備考談苑談藝雜記文稿等竝行于世寶永丙戌歿于東都年五十一。

室直師禮曰箕洲爲人博聞強記當時同游莫之或先好賦詩又善法書每遇意興閑適輒爲人揮灑凡人家得書必緹襲而藏之。

辨原延壽

字萬年號霞洲箕洲次子襲父職寬延元年卒年五十八自作碑文有言享年五十

鏡天山房詩話上冊

畫を工みにし、専ら意を經濟に留む、尤、明律を精究す、嘗て侯の命を奉じて、明律譯解三十六卷を撰す、其餘、著す所、易學啓蒙、老子、古文具寶等の諺解、山谷集注鈔、書言俗解、詩法授幼抄、印章備考、談苑、談藝雜記、文稿等、竝に世に行はる、寶永丙戌東都に歿す、年五十一。

室直師禮曰、箕洲、人と爲り博聞強記、當時同游、之れに或ひは先んづる莫し、好んで詩を賦し、又、法書を善くし、意興閑適に遇ふ毎に、輒ち人の爲に揮灑す、凡そ人家書を得れば、必緹襲して之れを藏す。

辨原延壽

字は萬年、霞洲と號す、箕洲の次子、父の職を襲ぎ、寬延元年卒す、年五十八、自ら碑文を作り、言へるあり、享年五十八、未だ以て天なりと爲さざるなり、紀府に仕へ

八、未以爲天也、仕紀府爲侍讀、未以爲賤也、一生不讀王李之書、未以爲愚也、此時東都學者、盛稱吳郡濟南、霞洲之言、蓋有激焉。

南部草壽

字子壽、號陸沈軒、山城人、其先越後長尾氏之族、講說不安、學博行脩、以醇儒山斗、於後進、寬文壬子、應、崎陽尹牛込蔭鎮之徵、遊於崎、建先聖祠於邑立山、設鄉學、置塾師、子壽料理學政、董督其事、邑中大饗、學、在崎八年、應、富山侯之聘、之越中、元祿戊辰卒。

南部景衡

字思聰、號南山、又號環翠園、稱昌輔、長崎

て侍讀と爲る、未だ以て賤しと爲さざるなり、一生、王李の書を読まず、未だ以て愚なりと爲さざるなりと、此の時東都の學者、盛んに吳郡濟南を稱す、霞洲の言、蓋激する有るなり。

南部草壽

字は子壽、陸沈軒と號す、山城の人、其先は越後長尾氏の族、不安に講説し、學博く行脩まる、醇儒を以て後進に山斗たり、寬文壬子、崎陽の尹牛込蔭鎮の徵に應じ、崎に遊ぶ、先聖の祠を邑立山に建て、鄉學を設け、塾師を置く、子壽、學政を料理し、其事を董督す、邑中大に饗に稱ふ、崎に在る八年、富山侯の聘に應じ、越中に之く、元祿戊辰卒す。

南部景衡

字は思聰、南山と號す、又環翠園と號す、昌輔と稱す

人、本姓小野、父昌碩、以善醫著、思聰少孤、
 執友小林謙貞、養於其家、授以四
 書五經句讀、又使學軒岐之書、思聰不屑
 之、好讀經史、從閩人黃公溥、杭人謝叔、且
 學歌詩、二人皆奇稱之、南部子壽、見而深
 器之、請爲嗣子、因冒其姓、及子壽應富山
 侯之聘、命從學、筑後安東省庵、既通而東、
 子壽歿、侯命襲其職、後來江戶、師事木下
 順庵、正徳壬辰、將之富山、途歿、年五十五、
 性溫恭篤謹、精通經史、文材富贍、最長史
 學、著環翠園史論三十卷、身既多病、自知
 齡不長、刪定其詩文八卷、題曰喚起漫艸、
 祇園伯玉曰、南山詩、字熟意熟、情亦熟、
 風流溫藉、濃態橫生、正如謝安攜妓遊東

錦天山房詩話上

崎の人、本姓は小野、父昌碩善醫を以て著はる、思聰少
 ぶして孤なり、執友小林謙貞之を養ひ、其家に養ふ、
 授くるに四書五經の句讀を以てし、又軒岐の書を學ば
 しむ、思聰之れを屑とせず、好んで經史を讀み、閩人黃
 公溥、杭人謝叔に從ひ、且、歌詩を學ぶ、二人皆之れを奇
 稱す、南部子壽、見て深く之れを器とし、請ふて嗣子と
 爲す、因て其姓を冒す、子壽富山侯の聘に應ずるに及
 んで、命じて筑後の安東省庵に從學せしむ、既に通じ
 て東す、子壽歿す、侯命じて其職を襲がしむ、後江戶に
 來り、木下順庵に師事す、正徳壬辰將に富山に之かん
 とし、途に歿す、年五十五、性溫恭篤謹、經史に精通し、文
 材富贍、最、史學に長ず、環翠園史論三十卷を著す、身既
 に多病、自ら齡の長からざるを知り、其詩文八卷を刪
 定し、題して喚起漫草と曰ふ。

祇園伯玉曰、南山の詩、字熟し意熟し、情も亦熟す、風
 流溫藉、濃態橫生す、正に謝安の妓を携へて東山に遊
 ぶが如し。

山。

又曰、南山燕子梨花二句、古今絕唱、瑜嘗屬崎陽彭城生、令書之、以爲柱聯、掛于齋頭。

新井美君在中曰、南山客中除夜五十韻、沈痛慷慨、其餘佳句、五言則和、初春作云、松竹含清氣、江山醜暖烟、和僧云、四時花繞徑、中夜月臨堂、僧房即事云、小欄籠遠景、高樹灑微涼、夏日閒適云、暑至池塘少、涼生竹樹多、七言、則春山晚煙云、輕素交雲迷碧岫、浮光霽擁青巔、落花云、玉笙奏罷唯餘月、珠幕鉤殘不見春、和送春韻云、流水人家芳艸逕、斜陽漁笛綠楊津、衰柳云、藏鶯葉逐秋風落、帶蝶枝隨夜雨衰、和

又曰、南山燕子梨花の二句、古今の絶唱、瑜嘗て崎陽の彭城生に屬して之れを書せしめ、以て柱聯と爲し、齋頭に掛く。

新井美君在中曰、南山、客中除夜五十韻、沈痛慷慨、其餘の佳句、五言には則初春の作に和するに云ふ、「松竹清氣を含み、江山暖烟を醜す、僧に和するに云ふ、四時、花徑を繞り、中夜、月、堂に臨む、僧房即事に云ふ、小欄、遠景を籠め、高樹、微涼を灑ぐ、夏日閒適に云ふ、暑は池塘に至りて少く、涼は竹樹に生じて多し、七言には則、春山晚烟に云ふ、輕素雲に交はりて碧岫に迷ひ、浮光霧を帯びて青巔を擁す、落花に云ふ、玉笙奏し罷んで唯、月を餘し、珠幕鉤殘して春を見ず、送春の韻に和するに云ふ、流水人家芳草の逕、斜陽漁笛綠楊の津、衰柳に云ふ、鶯を藏する葉は秋風を帯びて落ち、蝶を帯ぶる枝は夜雨に隨つて衰ふ、和韻に云ふ、白日茶烟佛榻に迷ひ、黄昏燈火僧庵を認む、早春、人に寄するに云ふ、兩地身は成る花下の客、獨居跡は托す酒中の仙、先師

韻云、白日茶烟迷、佛榻黃昏燈火認、僧庵早春寄人云、兩地身成花下客、獨居跡托酒中仙、憶先師云、華髮一朝終物故、青山千古爲誰新。

雨森東伯陽曰、南部南山賦、環翠園曰、雁歸塞北、長爲客、梅發江南、暗憶人、吳南老極口稱贊、有一人在傍曰、佳則佳矣、暗字似平婦人語、南老曰、子欲改以何字、耶、其人曰、却字、南老曰、若爾則非詩矣、有李判事者、巡簷數而朗誦不已、南老曰來、汝知此詩意、耶、李忸怩不言、南老曰、汝但喜音韻調諧耳、南老者朝鮮人、園在越中南部氏別墅、南部南山、原作、南郎草壽、誤矣、今改、

錦天山房詩話、祇南海簾、錄諸友詩、題曰、

錦天山房詩話上冊

を憶ふに云ふ「華髮一朝終に物故、青山千古誰が爲に新なる。」

雨森東伯陽曰、南部南山環翠園を賦して曰、雁は塞北に歸りて長く客と爲り、梅は江南に發いて暗に人を憶ふ、吳南老、口を極めて稱贊す、一人あり、傍に在りて曰、佳は則佳、暗の字婦人の語に似たり、南老曰、子改むるに何の字を以てせんと欲するやと、其人曰、卻の字と、南老曰、若し爾らば則詩に非ずと、李判事といふ者あり、簷を巡ること數、にして朗誦して已まず、南老曰、來れ、汝此詩の意を知るやと、李忸怩として言はず、南老曰、汝但音韻の調諧を喜ぶのみと、南老は朝鮮人園は、越中南部氏の別墅に在り。南部南山、原と南部草壽に作るは、誤れり、今改む。

錦天山房詩話、祇南海諸友の詩を纂録す、題して鍾秀

鍾秀集首載南山云予於諸友最所景慕莫如南山思聰所以卷首冠之也南海宏識絕材目中無人而於南山推尊極矣可以想見其人品也今閱鍾秀停雲二集所載南山詩流麗溫藉優入作者之域因普求所謂喚起漫草者而不可得想散佚既久也惜夫。

南部昌明

錦天山房詩話此詩載于扶桑名勝集中或爲南山耶將別人耶未審姑附于後。

南部景春

字國華越中人思聰長子也幼而穎悟善詩及書畫年甫十三從父來東都賦登東天台詩五言古風二百句爲世所稱十八

集と曰ふ、首めに南山を載す、云ふ予、諸友に於て最景慕する所は、南山思聰に如くはなし、卷首に之れを冠する所以なりと、南海、宏識絶材、目中人なし、而して南山に於いては推尊極まれり、以て其人品を想見すべし、今、鍾秀、停雲一集に載する所を閱するに、南山の詩流麗溫藉、優に作者の域に入る、因て普く謂はゆる喚起漫草といふ者を求むるに、而かも得べからず、想ふに散佚既に久しきなり、惜いかな。

南部昌明

錦天山房詩話、此詩、扶桑名勝集中に載す、或は南山たるか、將た別人か、未だ審かにせず、姑く後に附す。

南部景春

字は國華、越中の人、思聰の長子なり、幼にして穎悟、詩及び書畫を善くす、年甫めて十三、父に従ひ、東都に來り、東天台に登る詩五言古風二百句を賦し、世の稱する所と爲る、十八歳父を喪ひ、乃其祿を襲ぐ、籠過優渥、

歲喪父、乃襲其祿、龍遇優渥、加秩至二百石、後數年喪母、次弟亦歿、不堪憂難、以享保丁酉而殞、年僅二十三、季弟亦隳、月而亡、南氏之胤絕矣。

新井美君在中曰、國華奉母甚孝、友愛兩弟、慨然有大志、博通經史百家之書、諸作甚富。

祇園瑜卷三
十四

字伯玉、一名正卿、又字汝珉、號南海、又號鐵冠道人、稱與一郎、紀伊人、家本業醫、幼從父、在江都師事木下順庵、天資英雋、文藻卓絕、與松浦禎卿、同甲子、竝有奇才、衆稱木門二妙、後名價益高、世匹之梁田蛻巖、尤善詩、年甫十四、與白石南山霞沼簾

加秩二百石に至る、後數年、母を喪ふ、次弟亦歿す、憂難に堪へず、享保丁酉を以て殞す、年僅に二十三、季弟も亦月を隳へて亡す、南氏の胤絶ゆ。

新井美君在中曰、國華、母に奉じて甚だ孝、兩弟に友愛なり、慨然として大志あり、博く經史百家の書に通じ、諸作甚富む。

祇園瑜卷三
十四

字は伯玉、一名は正卿、又の字は汝珉、南海と號す、又、鐵冠道人と號す、與一郎と稱す、紀伊の人、家本、醫を業とす、幼にして父に従ひ、江都に在り、木下順庵に師事す、天資英雋、文藻卓絶、松浦禎卿と甲子を同じくし、竝に奇才あり、衆、木門の二妙と稱す、後、名價益高し、世に之れを梁田蛻巖に匹す、尤、詩を善くす、年甫めて十四、白石、南山、霞沼、簾洲と、芳洲の寓居に集まり、即席邊馬歸思ありを賦す、座する者皆舌を咋む、白石曰、此の

洲集芳洲寓居、卽席賦邊馬有歸思、座者皆咋舌、白石曰、此詩雄渾悲壯、足以卜後來、可任斯文也、嘗自試才、一夜得百首、時年十七、人或疑爲宿構、乃大會賓客、席間立題飲食談笑、信筆揮霍、自日中至夜半、百首復成、前後二百首、詞采富麗、無一句蹈襲前詩者、由是名愈著、擢本藩儒官、嘗坐事、謫海上數年、正德辛卯、召還、增秩復儒職、紀伊詩學之興、實因其鼓舞之、又善書、寶曆辛巳、年七十五而卒、著有南海文集、詩學逢原、明詩俚評。

田中由恭履道曰、先生敏捷穎悟、爲白石源先生、南君南山、雨森君伯陽、暨當時群賢所稱嘆、目之以爲今世之賈生矣、先生作

詩、雄渾悲壯、以て後來斯文に任すべきを下するに足ると、嘗て自ら才を試み、一夜百首を得たり、時に年十七、人或は宿構たるを疑ふ、乃大に賓客を會し、座間に題を立て、飲食談笑、筆に信せて揮霍す、日中より夜半に至り、百首復成る、前後二百首、詞采富麗、一句も前詩を蹈襲する者なし、是に由りて名愈著はれ、本藩の儒官に擢んでらる、嘗て事に坐し海上に謫せらるゝこと數年、正德辛卯召還す、秩を増し儒職に復す、紀伊詩學の興る、實に其の之を鼓舞するに因る、又書を善くす、寶曆辛巳、年七十五にして卒す、著に南海文集詩學逢原明詩俚評あり。

田中由恭履道曰、先生、敏捷穎悟、白石源先生、南君南山、雨森君伯陽暨び當時の群賢の稱嘆する所、之れを目して以て今世の賈生と爲す、先生、文章を作爲し、口誦筆授千萬言と雖、未だ嘗て稿を立てず。

爲文章、口誦筆授、雖千萬言、未嘗立稿。

伊藤長才藏曰、南海子以詩賦鳴於紀、其

風格體裁、曲盡其變、琴芳咀腴、芬吐豔、其氣弘以暢、其風格以靡、其詞和以雅、與他文士、依傍人門戶、不能自立、闕奧、踏襲一二、殘膏剩馥、然自命者、異誤。

葛張子琴曰、南海先生、幼見恭靖木先生、先生諭以學在精勤、則拳拳服膺、以至終身、噫云、世之詩視先生、抑末矣、瀉水之文、春華之藻、積內而發外、安知其非精勤之所致也。○按、詩下、擬賦、八字、

江村綬君錫曰、伯玉青年受業木門、有夙慧之稱、一日宴集、人或唱曰、鸞飛魚躍活潑潑、令坐客爲對、伯玉以童子、在席末、應

伊藤長才藏曰、南海子、詩賦を以て、紀に鳴る、其風格體裁、其變を曲盡す、芳を拳り腴を咀ひ、芬を揚げ豔を吐く、其氣、弘以て暢、其風、格以て靡、其詞、和以て雅、他の文士の人の門戶に依傍し、自ら闕奧に立つ能はず、一二を踏襲し、殘膏剩馥、然して自ら命する者と誤を異にす。

葛張子琴曰、南海先生、幼にして恭靖木先生に見ゆ、先生、諭すに學は精勤に在るを以てす、則拳々服膺し、以て身を終ふるに至ると云ふ、瓊、世の詩もて先生を觀るは抑、末なり、瀉水の文、春華の藻、内に積んで外に發す、安んぞ其精勤の致す所に非ざるを知らんや。

江村綬君錫曰、伯玉青年、業を木門に受け、夙慧の稱あり、一日宴集す、人或は唱へて曰、鸞飛魚躍活潑々々と、坐客をして對を爲さしむ、伯玉、童子を以て席末に在り、聲に應じて曰、光風霽月常惺々々と、衆其頌敏を歎

日本詩話叢書

聲曰、光風霽月常惺惺、衆歎其穎敏、余按、停雲集載伯玉詩三十首、詞采富麗、蓋少時作、晚歲漸刷鉛華、而神氣融和、殊可傳。又曰、南海唯是一味綺麗、後勤超脫、卻屑屑乎纖巧矣。

錦天山房詩話、南海才氣橫溢、不可一世、故其詩豪放奇麗、無塵俗齷齪之態、雖縱橫太過、間乖繩墨、而飄逸可喜、蓋其源出於青蓮、而鍛鍊未至者也、後觀其題垂裕堂詩後、曰漢魏氏變風也、杜甫氏變雅也、李白、大雅韓奕常武惟肖、初唐、正雅、時有頌聲、余故曰醫俗莫如太白、變野莫如初唐云云、此可以見宗風之所由矣。

雨森東
卷三
十五

一八二
ず、余按するに停雲集に、伯玉の詩三十首を載す、詞采富麗、蓋少時の作なり、晚歲には漸く鉛華を刷り、而して神氣融和し、殊に傳ふ可し。

又曰、南海、唯是れ一味綺麗、後勤めて超脱し、卻て屑々乎として、纖巧なり。

錦天山房詩話、南海才氣橫溢、一世を不可とせり、故に其詩、豪放奇麗にして、塵俗齷齪の態なし、縱橫太過、間、繩墨に乖くと雖、而も飄逸喜ぶべし、蓋其源は青蓮に出で、而して鍛鍊未だ至らざる者なり、後其の垂裕堂詩後に題するを觀るに曰、漢魏氏は變風なり、杜甫氏は變雅なり、李白は大雅韓奕常武惟れ肖たり、初唐は正雅、時に頌聲あり、余故に曰、俗を醫するは太白に如くは莫く、野を變ずるは初唐に如くは莫し、云々と、此れ以て宗風の由る所を見るべし。

雨森東
卷三
十五

字伯陽、一名誠清、號芳洲、稱東五郎、平安人、或曰伊勢人、年十七八來江戶、學于木下順菴、才藻卓絕、順菴稱爲後進領袖、遂因其薦、筮仕對馬、掌文教、恆接對韓人、名聲馳海內外、雅通象胥之言、每與韓人說話、不假譯者、韓人嘗戲謂曰、君善操諸邦音、而殊熟日本、正德中如江戶、見物徂徠、甚悅之、是時徂徠倡復古學、傲視一世、而亦特於伯陽嘖嘖稱揚、伯陽乃使其子顯允師徂徠、居其塾、未幾使出塾而歸、曰徂徠實一代豪傑、不可以常儒視之也、雖然其教人不先德行、是以家塾失序、非可以托少年者也、伯陽爲人篤實、甚有精力、到老不衰、年八十一、始將學倭歌、曰苟欲作

字は伯陽、一の名は、誠清、芳洲と號す、東五郎と稱す、平安の人、或は曰ふ、伊勢の人、年十七八、江戶に來り、木下順庵に學ぶ、才藻卓絶、順庵稱して後進の領袖と爲す、遂に其薦めに因り、對馬に筮仕し、文教を掌る、恆に韓人に接對し、名聲、海の内外に馳す、雅より象胥の言に通じ、毎に韓人と說話し、譯者を假らず、韓人嘗て戲に謂て曰、君、善く諸邦の音を操る、而して殊に日本に熟せりと、正徳中、江戶に如きて、物徂徠を見、甚之れを悦ぶ、是の時、徂徠復古學を倡へ、一世を傲視す、而して亦特に伯陽に於て嘖々稱揚す、伯陽、乃其子顯允をして徂徠を師と、其塾に居らしむ、未だ幾ばくならずして、塾を出で歸らしむ、曰、徂徠は實に一代の豪傑、常儒を以て之れを視るべからず、然りと雖、其人を教ふる、德行を先とせず、是を以て家塾序を失ふ、以て、少年者を托すべきに非ざるなりと、伯陽、人と爲り篤實、甚精力あり、老に到りて衰へず、年八十一、始めて將に倭學を學ばんとす、曰、苟も倭歌を作らんと欲せば、古歌を讀まざるべからず、乃、古今集を讀む一千遍、既にして自ら倭歌一萬首を賦す、前後四五年にして、其業を卒ふ、年八十八にして卒す、著に芳洲集、橋窓文集、橋窓茶

倭歌不可不讀古歌也乃讀古今集一千
遍既而自賦倭歌一萬首前後四五年而
卒其業年八十八卒著有芳洲集橘窓文
集橘窓茶話芳洲詩訣等子孫繼業爲對
馬學職。

新井美君在中曰伯陽風神秀朗才辨該博
錦里先生稱爲後進領袖

祇園兼伯玉曰予於諸友其所敬畏莫如
伯陽氏。

物松雙茂卿曰洛有伊原藏海西有兩伯陽
關以東則有室師禮。

梁田美邦景鸞曰兩伯陽善華音綜博有藻
材其品不出物茂卿下。

原善公道曰芳洲識白石者三十年而交

話芳洲詩訣等あり、子孫業を繼ぎ對馬の學職と爲る。

新井美君在中曰、伯陽風神秀朗、才辨該博、錦里先生稱して後進の領袖と爲す。

祇園兼伯玉曰、予、諸友に於て、其敬畏する所、伯陽氏に如くはなし。

物松雙茂卿曰、洛に伊原藏あり、海西に兩伯陽あり、關以東には則室師禮あり。

梁田美邦景鸞曰、兩伯陽、華音を善くし、綜博にして藻材あり、其品は物茂卿の下に出でず。

原善公道曰、芳洲の白石を識る者三十年、而して交分

分不協、常謂白石爲其心術不可測、嘗面折一事、白石曰、以如子之言、子疑余、所謂白頭尙新也、又其橋密茶話、自惺窩羅山、至其師順菴及社友凡名一時者、盡舉之以品藻其才行、而獨不及白石。

角田節大可曰、雨森芳洲曰、吾平日祠堂香火、唯有拜謝、不敢爲祈禱之言、蓋器小量狹、願欲易足故也、嘗言吾自飲食衣服、以至宮室爵位、絕無偏好、故聞厨寂寞、家門無事、實諸鬼神而無愧、縱不及老莊、關尹以下蔑如也、唯平生最不堪者有四、一曰詩惡、二曰碁輸、三曰身疼、四曰錢無耳、錦天山房詩話、芳洲嘗論詩云、凡詩出於天才者、藹然有自然之意、讀之使人心爽

協はず、常に白石を謂つて、其心術測るべからずと爲せり、嘗て一事を面折す、白石曰、子の言の如きを以て、子を疑ふ、謂ゆる白頭尙新といふものなりと、又、其の橋密茶話に、惺窩羅山より其師順庵及び社友の凡そ一時に名ある者に至るまで、悉く之れを擧げて以て其才行を品藻す、而して獨、白石に及ばず。

角田節大可曰、雨森芳洲曰、吾れ平日、祠堂香火、唯、拜謝するあり、敢て祈禱の言を爲さず、蓋、器小量狹、願欲足り易きが故なり、嘗て言ふ吾れ飲食衣服より、以て客室爵位に至るまで絶えて偏好なし、故に厨寂寞、家門無事、諸を鬼神に質して愧づるなし、縱ひ老莊に及ばざるも、關尹以下は蔑如たり、唯、平生最も堪へざる者四あり、一に曰、詩惡し、二に曰、碁輸く、三に曰、身疼む、四に曰、錢なきのみ。

錦天山房詩話、芳洲嘗て詩を論じて云ふ、凡そ詩天才に出づる者は、藹然として自然の意あり、之れを讀んで人をして心爽かに神怡ばしむ、若し夫れ安排摹擬、

神怡、若夫安排摹擬、而後得者、雖曰巧妙、終令人厭倦思睡、故予案上所置詩集、以陶淵明爲首、李杜爲第二、韓白爲三、東坡爲二之下、三之上、優游咏吟於其間、不知老之至、一旦瑞鶴祥鸞、幢幡笙簫之從、空而來迎也、其言如此、其自運亦頗近自然、故驟讀之、似不甚佳、然細嚼有餘味。

松浦儀

字禎卿、號霞沼、稱儀、左衛門、播州人、年甫十三、對州侯見而奇其才、使就木下順庵受業、禎卿文學生知、不煩師訓、日弄翰墨、纒纒千言、不甚經思、而文采可觀焉、嘗置詩稿於案上、南部艸壽吟誦不已、既而聞其自作、大驚曰、吾謂抄寫唐人詩也、時

而して後得る者、巧妙と曰ふと雖、終に人をして厭倦を思はしむ、故に、予の案上に置く所の詩集、陶淵明を以て首と爲し、李杜を第一と爲し、韓白を三と爲し、東坡を二の下三の上と爲す、優游として其間に咏吟して老の至るを知らず、一旦、瑞鶴祥鸞、幢幡笙簫の空よりして來り迎へんと、其言此の如し、其自運も亦頗自然に近し、故に驟に之れを讀めば甚佳ならざるに似たり、然れども細嚼すれば餘味あり。

松浦儀

字は禎卿、霞沼と號す、儀、左衛門と稱す、播州の人、年甫めて十三、對州侯見て其才を奇とし、木下順庵に就いて業を受けしむ、禎卿文學、生知にして、師訓を煩はさず、日に翰墨を弄し、纒々千言、甚思を經ず、而して文采觀るべし、嘗て詩稿を案上に置く、南部草壽吟誦して已まず、既にして其自作なるを聞き、大に驚いて曰、吾謂ふ唐人の詩を抄寫せりと、時に年僅に十四歲、祇南海と同年に生る、業、二妙を推す、學既に通じ、州書記と

年僅十四歲、與祇南海同年生、衆推二妙、學既通、爲州書記、韓人屢稱之。

兩森東伯陽曰、霞沼與余同寓雉塾、少於我八歲、最喜成翠虛賦、富山、浮空積翠、開煙鬢句、吟賞不已、一日問余、杜詩中何者可意、余答以「萬里蒼茫水、龍蛇只自深」、時霞沼十四五、今已將近六十歲矣、追而想之、天稟所資、敏鈍迥別、有如此者可笑。

祇園雅伯玉曰、霞沼少壯之作、太邇盛唐、但恐字句雷同、譬唐人臨二王帖、晚年常與韓人對、不覺氣格流入、彼調。

石原學魯

字貫卿、號鼎庵、又號梓山、長崎人、少從杭僧沈一心、越游、精醫工書、及壯、東遊學於

爲、韓人屢之、れを稱す

兩森東伯陽曰、霞沼余と同じく雉塾に寓す、我より少きこと八歲、最、成翠虛の富山を賦す、空に浮ぶ積翠、烟鬢開くの句を喜び、吟賞已ます、一日、余に問ふ、杜詩の中、何者か意に可なると、余答ふるに、「萬里蒼茫の水、龍蛇只自ら深し」を以てす、時に霞沼十四五、今已に將に六十歳に近からんとす、追ふて之れを想ふに、天稟の資する所、敏鈍迥に別なること、此の如き者あり、笑ふべし。

祇園雅伯玉曰、霞沼少壯の作、太だ、盛唐に邇し、但字句雷同するを恐る、唐人の二王帖を臨するに譬ふ、晚年常に韓人と對す、覺えず氣格流れて彼の調に入る。

石原學魯

字貫卿、鼎庵と號す、又梓山と號す、長崎の人、少くして杭僧沈一心越に従ひて遊ぶ、醫に精しく、書に工なり、壯に及んで東遊し、木下順庵に學ぶ、順庵特に其才を愛す、志、通逸靜退に存し、人間を樂しまず、元祿戊寅

木下順庵、順庵特愛其才、志存遁逸、靜退、不樂人間、元祿戊寅卒、年四十餘、著有拾翠集。

岡島達

字仲通、號石梁、賀州人、總角善書、長有經術、學於木下順庵、憫其宦游不遂、老母在鄉、○按、岡上疑、
脫、順庵二字、薦之賀州侯、因得北歸、居數年、喪母、哀毀踰禮、未幾而沒、實寶永己丑六月也、享年四十四、無子。

岡田信威

名文、以字行、號竹圃、江戶人、其祖朝鮮王京人、垂髫值壬辰變、爲我兵所掠、風神秀整、蓋非寒族也、其人無子、收養爲子、居東數年、略通國語、屢問家姓、竟不言、及長、冒

卒す、年四十餘、著に拾翠集あり。

岡島達

字は仲通、石梁と號す、賀州の人、總角にして書を善くす、長じて經術あり、木下順庵に學ぶ、其宦游遂げずして、老母の郷に在るを憫み、之れを賀州侯に薦む、因て北に歸るを得たり、居ること數年、母を喪ふ、哀毀禮に踰ゆ、未だ幾くならずして沒す、實に寶永己丑六月なり、享年四十四、子なし。

岡田信威

名は文、字を以て行はる、竹圃と號す、江戶の人、其祖朝鮮王京の人、垂髫にして壬辰の變に値ひ、我兵に掠めらる、風神秀整、蓋寒族に非ざるなり、其人子なし、收養して子と爲す、東に居ること數年、略、國語に通ず、屢、家姓を問ふ、竟に言はず、長ずるに及んで、岡田氏を冒

岡田氏信威則其孫而有文謹愷人也學於木下順庵順庵認其才行因禰原希朝薦之紀藩。

堀山順之

名輔以字行號環洲江戶人質直有志操年二十餘始學於木下順庵刻苦讀書行義甚修嘗從仕京師未幾東歸家唯四壁并日而食晏如也後復從仕泉州。

梁田邦美 卷三 十六

本名邦彦字景鸞號蛻巖稱才右衛門江戶人生而穎悟幼學人見鶴山漸長才識高遠尤工詩才既絕倫而鑽研至老不止初介鶴山見白石白石不妄容人獨異其才與之交肫肫見中底又與室鳩巢三宅

す、信威は則其孫なり、而して有文謹愷の人なり、木下順庵に學ぶ、順庵、其才行を鑑とし、禰原希朝に因て之れを紀藩に薦む。

堀山順之

名は輔字を以て行はる、環洲と號す、江戸の人、質直にして志操あり、年二十餘、始め木下順庵に學ぶ、刻苦書を讀み、行義甚修る、嘗て京師に従仕す、未だ幾ならずして東歸す、家、唯四壁のみ、日を并せて食ひ、晏如たり、後復た泉州に従仕す。

梁田邦彦 卷三 十六

本名は邦彦、字は景鸞、蛻巖と號す、才右衛門と稱す、江戸の人、生れて穎悟、幼にして人見鶴山に學ぶ、漸く長じて才識高遠、尤詩に工みなり、才既に絶倫、而して鑽研老に至りて止まず、初め鶴山を介して白石に見ゆ、白石妄りに人を容れず、獨、其才を異とし、之れと交はり、肫々として中底を見はす、又、室鳩巢三宅、觀瀾、桂山、彩巖、安積、澹泊、雨森、芳洲、益田、鶴樓と友とし、善し、少時

觀瀾桂山彩巖安積澹泊雨森芳洲益田
鶴樓友善少時專談武說兵每評古之勇
將戰士論議慷慨言或及赤壁淝水桶間
戶石川中島等事則扼腕按劍躍如色飛
當世儒生目爲翽儒後年覃思經業師心
而自振遠樹立一家年四十八事赤石侯
且夕教授邑人士侯禮待甚優後致仕寶
曆丁丑卒年八十六爲人泛愛博納樂易
好善旣爲伊洛學又信此邦神道又博讀
釋典恆謂宜聖之學東方之道乾毒之教
鼎足不相悖遍與一時知名之士交雖兵
家劍客書畫琴棋俳諧者流相驩莫逆所
著蛻巖集答問書行於世。

室直濟師禮曰梁子學博而材富以詩鳴東

專ら武を談じ兵を説く毎に古の勇將戰士を評し論
議慷慨言或は赤壁淝水桶間戸石川中島等の事に及
べは則腕を扼し劍を按じ躍如色飛ぶ當世の儒生目
して翽儒と爲す後年思を經業に覃くし心を師とし
て自ら振ひ遠く一家を樹立し年四十八赤石侯に事
へて且夕邑の人士を教授す侯禮待甚優なり後致仕
し寶曆丁丑卒す年八十六人と爲り泛愛博納樂易に
して善を好む旣に伊洛の學を爲し又此の邦の神道
を信ず又博く釋典を讀む恆に謂ふ宜聖の學東方の
道乾毒の教鼎足して相悖らずと遍く一時知名の士
と交はり兵家劍客書畫琴棋俳諧者流と雖相驩して
逆ふ莫し著す所蛻巖集答問書世に行はる。

室直濟師禮曰梁子學博くして材富む詩を以て東都に

都、其詩大抵陶鎔雕刻、變幻百出、發於抵掌笑噱之餘、動輒累數百言、觀者目駭而魂褻、欲與之抗衡、方軌于通衢大街之中、而莫之及也、然其爲人不矜、細行、任俠、談諧、自快於鄉曲之間、詩愈巧而身愈窮、名愈擢而志愈逸、以此時論沸興、毀譽相半。

新井君美在中曰、景鸞少以材聞、歷事列國、官游不遂、身在窮阨、文甚富。

江村綬君錫曰、蛻翁天才巧妙、前無古人、後無繼者、少時負才不閑、小節、故筮仕數、跌屢遇困阨、家徒四壁、而意氣不少撓、嘗以不能買書爲頹、其末句曰、惠車鄴架滿、天地誰信空拳猶突圍、余謂爾時東都雖、人才如林、除白石南海外、諸子長鎗大戟、

鳴る、其詩大抵陶鎔雕刻、變幻百出し、抵掌笑噱之餘に發し、動もすれば輒數百言を累ぬ、觀る者目駭いて魂褻はる、之れと抗衡せんと欲し、軌を通衢大街の中に方ぶ、而して之れに及ぶなし、然るに其の人と爲り、細行に矜らず、任俠談諧、自ら鄉曲の間に快くし、詩愈、巧にして身愈、窮し、名愈、擢にして志愈、逸す、此を以て時論沸興し、毀譽相半はす。

新井君美在中曰、景鸞少ふして材を以て聞え、列國に歷事し、官游遂げず、身窮阨に在りて、文甚だ富む。

江村綬君錫曰、蛻翁、天才巧妙、前に古人なく、後に繼者なし、少時才を負みて、小節に閑はず、故に筮仕して數、跌く屢、困阨に遇ふ、家徒、四壁、而して意氣少しも撓まず、嘗て書を買ふ能はざるを以て頹と爲す、其末句に曰、「惠車鄴架滿、天地に滿つ、誰か信ぜんや空拳猶圍を突くと、余謂へらく爾の時東都、人才林の如しと雖、白石南海を除く外、諸子長鎗大戟、恐らくは景鸞の空拳に敵し難し、蛻翁詩體屢、變じ唐と爲り、宋元と爲り、初明と爲り、七子と爲り、徐文長と爲り、袁中郎と爲り、鍾

恐難敵景鸞空拳、蛻巖詩體屢變、爲唐、爲宋元、爲初明、爲七子、爲徐文長、爲袁中郎、爲鍾譚、贈余弟詩、有我初御風翔、晚而履平地之句、而亦唯畢竟爲一蛻翁之詩云、余謂凡作者患在才者、不動敲推、動者未必有才也、蛻巖有天縱才、而極力鍛鍊、何以知其然也、蛻巖與余兄弟交、稱忘年、贈答殊多、是皆蛻巖赤石稅駕之後、考其年紀、蓋六十以後矣、厥後蛻巖集出、就而閱之、則往往改二三字、而改者更有理致、乃知八十老翁、孜孜兀兀、潛思字句、宜其能造詣精微、今讀其集、譬猶上崑崙之邱、步步是玉、入枏檀之林、枝枝是香、詩至於此、宜無遺論、而猶有未盡善者、何也、蛻巖用

譚と爲る、余が弟に贈る詩に、「我初め風に御して翔り、晚にして平地を履むの句あり、而して亦唯、畢竟一蛻翁の詩と爲ると云ふ、余謂ふ、凡そ作者の患は才ある者は敲推を勤めず、勤むる者は未だ必しも才あらずるに在り、蛻巖は、天縱の才ありて、極力鍛鍊す、何を以て其然を知や、蛻巖、余の兄弟と交り、忘年と稱す、贈答殊に多し、是れ皆蛻巖、赤石稅駕の後なり、其年紀を考ふるに、蓋六十以後ならん、厥後蛻巖集出づ、就いて之れを閱するに、則往々二三字を改む、而して改むる者、更に理致あり、乃ち知る八十の老翁、孜孜兀々、思を字句に潛む、宜なり、其能く造詣精微なるを、今其集を讀むに、譬へば猶崑崙の邱に上り、歩々是れ玉、枏檀の林に入る、枝々是れ香あるがごとし、詩、此に至りて、宜しく遺論なかるべし、而して、猶未だ善を盡さざる者あり、何ぞや、蛻巖才を用ふる太過なるのみ、張茂先、陸士衡に謂つて曰、人は常に才の少きを恨む、而して子は更に其多きを患ふと、余、蛻巖に於て復云ふ。

才太過耳張茂先謂陸士衡曰人常恨才少而子更患其多余於蛻翁復云。

原善公道曰蛻巖以詩豪壓一時而意見屢改格調數變皆足以驚人自言初學宋歐蘇而旁放翁簡齋中年學唐祖彌李杜緣飾以錢劉諸家又退學明甘爲王李銀鹿亡幾爲袁中郎爲徐文長而遂以初盛唐爲表準弇州濟南爲門戶復鳴歸德書云一旦大夢覺宿醒解乃斷然以開天爲關七子爲引陽春白雪每奏彌高斗文紫氣每望彌昌季子裘敝猶可改呂虔刀鈍尙可磨寧爲王李取履不敢辭遂使雨血之鷲爪化爲食楮之柔吻也又嘗小集賦詩有一人以石見國如視求對苦思皆未

原善公道曰蛻巖詩豪を以て一時を壓す、而して意見屢改まり格調數變す、皆以て人を驚かすに足る、自ら言ふ、初め宋を學ぶ、歐蘇よりして、旁ら放翁簡齋、中年、唐を學び、李杜を祖彌し、緣飾するに錢劉諸家を以てし、又退いて明を學ぶ、甘んじて王李の銀鹿と爲る、幾もなくして、袁中郎を爲し、徐文長を爲し、而して遂に初盛唐を以て表準と爲し、弇州濟南を門戶と爲すと、鳴歸德に復する書に云ふ、一旦大夢覺め、宿醒解け、乃斷然として開天を以て關と爲し、七子を引と爲す、陽春白雪、奏する毎に彌高し、斗文紫氣、望む毎に彌昌くなり、季子裘敝れて猶改むべし、呂虔刀鈍るも尙磨くべし、寧ろ王李の爲に履を取るも敢て辭せず、遂に血を雨らすの鷲爪をして、化して楮を食ふの柔吻と爲さしむるなり、又嘗て小集に詩を賦す、一人あり、石見の國は視の如し、を以て對を求む、苦思皆未だ得ず、蛻巖忽ち朗吟して曰、竹生島は筵に似たりと、四座驚歎す。

得、蛻巖忽朗吟曰、竹生島似筌、四座驚歎、
角田簡大可曰、蛻巖詩才高妙、變幻百出、
奇正互用、而極力鍛鍊、兀兀不休、自少至
老、詩體屢變、嘗與湖玄侑書云云、蓋實錄
也、爲文尖新、亦如其詩、少時抱才不遇、厄
窮殊甚、書篋中除四子外、有詩韻一冊、徐
文長集半部耳、適會大雪、憶文長詠雪詩、
乃綴五十八韻、幽苦險澁、不讓文長。

錦天山房詩話揚此抑彼、入帝出奴、專持
門戶之見、牢不可破、此古今詞人之通弊、
而享元之際、爲特甚矣、故當時鉅匠之著
選、非無可觀者、然十篇以外、使人生厭倦、
何也、由少變化也、獨蛻巖泛愛博納、出入
諸家、不固守一格、愈變而愈妙、不唯採材

角田簡大可曰、蛻巖詩才高妙、變幻百出、奇正互に用ふ
而して極力鍛鍊、兀々として休まず、少より老に至る
まで、詩體屢變ず、嘗て湖玄侑に與ふる書に云云、蓋
實錄なり、文を爲る尖新、亦其詩の如し、少時才を抱い
て不遇、厄窮殊に甚し、書篋中、四子を除く外、詩韻一冊、
徐文長集半部あるのみ、適、大雪に會ひ、文長が雪を詠
する詩を憶ひ、乃、五十八韻を綴る、幽苦險澁、文長に讓
らず。

錦天山房詩話、此れを揚げ彼れを抑へ、入つては帝と
し、出でては奴とし、専ら門戶の見を持し、牢として破
る可らず、此れ古今詞人の通弊にして、而して享元の
際、特に甚しと爲す、故に當時鉅匠の著撰、觀るべき者
なきに非ず、然ども十篇以外は、人をして厭倦を生ぜ
しむ、何ぞや、變化少なきに由るなり、獨、蛻巖は泛愛博
納、諸家に出入して、一格を固守せず、愈變じて愈妙、
唯に材を古に採るの廣きのみにあらず、其、友を當世

於古之廣、其取友於當世、亦然苟有可取、則不問門徑之異同也、是以木門譚園之徒、以至曲藝小技之流、皆與之交善、此其所以蒼萃衆美、而能成偉觀矣、今閱其集、諸體俱佳、就中七言古詩五言長律最極其巧妙、惜夫古風韻法頗疎、近體聲調失粘者亦復不少、諸如是類、此編率屬割愛、但全首甚佳、而微有瑕疵者、一二間亦登載焉、如詠雪五十八韻、亦在刪除之例、然構思之苦、命辭之險、當世未見其比也、以一管掩大德、亦所不忍、故姑存之、使世之好奇者有以考焉。

桂山義樹卷三
十八

字君華、號彩巖、又號天水漁者、初稱三郎

錦天山房詩話上冊

に取るも亦然り、苟、取る所あれば、則、門徑の異同を問はず、是を以て木門譚園の徒より、以て曲藝小技の流に至るまで、皆之れと交り善し、此れ其の衆美を蒼萃して、而して能く偉觀を成す所以なり、今、其集を閲するに、諸體俱に佳なり、中に就いて七言古詩五言長律は最其巧妙を極む、惜ひかな古風の韻法頗る疎なり、近體の聲調失粘する者、亦復少からず、諸是の類の如きは、此編率ね割愛に屬す、但、全首甚佳にして、而して微しく瑕疵ある者は、一二間、亦登載す、詠雪五十八韻の如き、亦刪除の例にあり、然るに構思の苦、命辭の險、當世未だ其比を見ざるなり、一管を以て大德を掩ふは、亦忍びざる所なり、故に姑く之れを存し、世の奇を好む者をして、以て考ふることあらしむ。

桂山義樹卷三
十八

字は君華、彩巖と號す、又、天水漁者と號す、初め三郎左

左衛門、後改稱三郎兵衛、江戸人、其先甲斐源氏、武田晴信第三子信貞、稱葛山三郎、其子義定、稱桂山三郎左衛門、義樹即義定之玄孫、幼而聰慧、穎悟明敏、七歲客有過其父、而肆談時勢得失、君華進曰、先聖不謂乎、不在其位、則不議其政、客大奇之、既長、受業於林鳳岡、精究理學、沈默不競、自信甚厚、元祿九年、以鳳岡之薦、解褐大府、寬保三年、奉旨、重訂武德大成記、以其居鷺遠、命僦居林鳳岡家、以卒、其業、前後賜金者數、累遷至祕書監、有旨許覽祕府書、於是學益博洽、傍綜衆藝、尤巧草隸、又善樂律、性謹嚴、不妄交、其所親善者、唯高瀬學山、梁田蛻巖、中村蘭林三人耳、常

衛門と稱す、後改めて三郎兵衛と稱す、江戸の人、其先は甲斐源氏、武田晴信の第三子信貞、葛山三郎と稱す、其子義定、桂山三郎左衛門と稱す、義樹は即義定の玄孫、幼にして聰慧、穎悟明敏、七歳のとき、客其父に過ぎり而して肆に時勢の得失を談するあり、君華進んで曰、先聖謂はずや其位に在らざれば、其政を議せずと、客大に之れを奇とす、既に長じて業を林鳳岡に受け、理學を精究し、沈黙競はず、自信甚厚し、元祿九年鳳岡の薦を以て、褐を大府に解き、寬保三年旨を奉じ、重ねて武德大成記を訂し、其居の鷺遠なるを以て、命じて林鳳岡の家に僦居し、以て其業を卒ふ、前後金を賜ふこと數、累遷して祕書監に至る、旨あり祕府の書を覽ることを許す、是に於て學益、博洽、傍ら衆藝を綜ぶ、尤草隸に巧みなり、又、樂律を善くす、性謹嚴、妄りに交らず、其親善する所の者、唯、高瀬學山、梁田蛻巖、中村蘭林の三人のみ、常に稱す、希は精嚴得當、景譽は雄爽、流暢、深藏は奇秀、超逸、皆得難きの才なりと、寬延二年、年七十一にして卒す、遺言して曰、我れ德學なし、又官績なし、謹んで墓碣碑銘を修し、以て虚譽を要する無れと。

稱希樸、精嚴穩當、景鸞雄爽流暢、深藏奇秀超逸、皆難得之才也、寬延二年、年七十一而卒、遺言曰、我無德學、又無官績、謹無修墓碣碑銘、以要禮譽也。

室清師禮曰、彩巖其行敦篤、而立誠、其材浩濬、而雄峭、挺然於埃壘之表、文采風流、足推倒一世。

江村綾君錫曰、余在赤石、梁景鸞、數稱彩巖詩律精工、因知其作家、後信州湖玄岱亦盛稱之、乃益知其作家、於是歷閱諸選所載、僅五首、其他無見、京攝年少、往往不知桂祕監爲何人、蓋數十年來、東都藝文、播傳于京攝者、特覆園諸子、其他雖鸞鳳吐音、寥乎無聞、亦可見一時風氣之偏、而

室清師禮曰、彩巖其行敦篤、而して誠を立つ、其材浩濬にして雄峭、埃壘の表に挺然たり、文采風流、一世を推倒するに足れり。

江村綾君錫曰、余の赤石に在る、梁景鸞、數、彩巖の詩律精工を稱す、因て其作家なるを知る、後、信州の湖玄岱も、亦盛んに之れを稱す、乃益、其作家なるを知る、是に於て諸選に載する所を歴閱するに僅に五首、其他見るなし、京攝の年少、往々桂祕監の何人たるを知らず、蓋、數十年來、東都の藝文、京攝に播傳する者、特り覆園の諸子のみ、其他は鸞鳳、音を吐くと雖、寥乎として聞ゆる無し、亦一時風氣の偏を見るべし、而して彩巖は重厚にして名に近づかざる者亦徴すべきのみ。

彩巖重厚不近名者、亦可徵耳。

東條辨子藏曰、彩巖天資超脫、加旃以篤實謹嚴、貫串經史、淹雅博通、至氣局濶達、神韻卓絕、則非復時流所企及、實曠世之偉才、設使與當時諸儒馳騁詞壇、有意建立門戶、顯赫一世、不必讓物牛門服赤羽等、世人稱之者、日以詩人、徒談其宏詞精華、以謂雄渾高潔、殆不在源白石梁蛻巖下、是何足言。

錦天山房詩話、彩巖詩、整麗近源白石、高華過服南郭、跌宕似梁蛻巖、圓秀勝林退省、足以領袖一時、宜乎其自視甚高、不屑比南郭、願諸選家多不甄錄、唯稱矢鳥懷古作、何也。

東條辨子藏曰、彩巖天資超脫、旃れに加ふるに篤實謹嚴にして經史に貫串し、淹雅博通なるを以てす、氣局濶達、神韻卓絶に至りては、則復時流の企及する所に非ず、實に曠世の偉才なり、設し當時の諸儒と、詞壇に馳騁し、門戶を建立し、一世に顯赫するに意あらしめば、必しも物牛門服赤羽等に譲らず、世人の之れを稱する者、目するに詩人を以てし、徒に其宏詞精華を談ず、以謂へらく雄渾高潔、殆んど源白石梁蛻巖の下に在らずと、是何ぞ言ふに足らん。

錦天山房詩話、彩巖の詩、整麗は源白石に近く、高華は服南郭に過ぎ、跌宕は梁蛻巖に似、圓秀は林退省に勝る、以て一時に領袖たるに足る、宜なるかな、其自ら視ること甚高く、南郭に比するを屑とせず、願ふに諸選家多く甄録せず、唯、矢鳥懷古の作を稱するは、何ぞや。

湖岳

字玄侑、號松江、信濃松本人、少時從學桂山彩巖、能詩善文、兼工書、襲父仕、松本侯、玄侑尙氣節、歎食糈於方技、侯察其意、使嗣子玄室代爲侍醫、更命爲儒學教授、蓋特恩云。

細井知慎

卷三
十八

字公謹、號廣澤、京師嵯峨人、或曰、遠江懸川人、居播磨明石、年十一、如江戶、事甲侯吉保、大見擢用、形貌魁岸、方質而有氣、甚口善談、纏纏乎若、錚錚屑、性不甚嗜酒、酒間或及一義節事、輒忼慨激烈、怒髮逆植、目光炯炯也、議論守法、矯矯不阿、遂以此中口語致仕、而行隱居青山、家甚貧、或餽

湖岳

字は玄侑、松江と號す、信濃松本の人、少時桂山彩巖に從學し、詩を能くし、文を善くし、兼ねて書に工なり、父に襲いで松本侯に仕ふ、玄侑、氣節を尙ぶ、糈を方技に食むを歎づ、侯、其意を察し、嗣子玄室をして代りて侍醫たらしめ、更に命じて儒學教授と爲す、蓋、特恩と云ふ。

細井知慎
卷三
十八

字は公謹、廣澤と號す、京師嵯峨の人、或は曰、遠江懸川の人、播磨明石に居る、年十一、江戸に如く、甲侯吉保に事へ、大に擢用せらる、形貌魁岸、方質にしてあり、甚口にして善く談す、纏々乎として錚錚を露するが若し、性甚酒を嗜まず、酒間、或は一義節の事に及べば、輒忼慨激烈、怒髮逆に植ち、目光炯々たり、議論、法を守り、矯々として阿らず、遂に此を以て口語に中り、致仕して行て青山に隱居し、家甚貧し、或ひと餽るに數金を以てす、會、客來りて奇窘を語ぐ、心に之を憫み、其獲る所の金を出し、悉く之を推與す、少くして書を好み、北

以數金會客來語奇筭心憫之出其所獲金悉推與之少而好書學北島雪山至是居間益自刻苦著紫薇字樣篆體異同歌觀鶯百譚撥鐙神詮奇文不載酒字林長歌列侯往往延致大見貴重焉後遭大府登用初治程朱學又悅陽明王氏之說通串百家淹雅博聞旁至射騎劍槍之藝天文算數之術莫不兼綜人許以國器而被書名掩君子惜焉享保乙卯年七十九卒子知文字天賜號九臯亦以善書著後坐事削仕籍。

柳里恭

字公美號淇園又號玉桂稱權太夫郡山大夫性豁達豪放不拘小節爲人多才藝

島雪山に學ぶ、是に至りて間に居りて益、自ら刻苦し、紫薇字樣篆體異同歌觀鶯百譚撥鐙神詮奇文不載酒字林長歌を著す、列侯往々延致し、大に貴重せらる、後大府の登用に遭ふ、初め程朱の學を治め、又、陽明王氏の説を悦び、百家に通申し、淹雅博聞、旁ら射騎劍槍の藝、天文算數の術に至るまで、兼綜せざるは莫し、人許すに國器を以てす、而して書名に掩はる、君子焉れを惜む、享保乙卯年七十九にして卒す、子、知文字は天賜九臯と號す、亦善書を以て著はる、後、事に坐して仕籍を削らる。

柳里恭

字は公美、淇園と號す、又玉桂と號す、權太夫と稱す、郡山の大夫なり、性豁達豪放、小節に拘らず、人と爲り才藝多く、文武兼資し、詩を善くし、書畫に工みに、景丹青

文武兼資、善詩工書畫、最精丹青、妙得設色法、寫人物花鳥、一爲設色、水煩擱之不去也、其餘伎藝莫不博綜、其好客不問貴賤賢愚、厚禮引接、日試其能、以爲娛、食客常數十百人、邑入雖多、財資不給而岸然不顧也、嘗從僮僕數人、乘馬而行、偶賸丐女絃歌索錢者、乃操其三絃彈一曲而去、其任達不拘、率此類也。

岡島璞

字玉成、號冠山、又號明敬、稱授之後稱彌太夫、長崎人、始以譯士仕萩侯、尋而家居、專修性理學、嘗應戶田侯聘、來于江戸、受學於林整字、無幾致仕、至浪華、以講說爲事、又至江戸、至平安、尤好稗官學、精華音、

に精し、妙に設色の法を得たり、人物花鳥を寫すに、一たび爲に色を設くれば、水もて之を煩擱するも去らざるなり、其餘伎藝博綜せざる莫し、甚客を好み貴賤賢愚を問はず、厚禮引接し、日に其能を試み、以て娛と爲す、食客常に數十百人、邑入多しと雖、財資給せず、而して岸然として顧みず、嘗て僮僕數人を從へ、馬に乘りて行く、偶、丐女の絃歌し錢を索むる者を賸る、乃、其三絃を操り、一曲を弾じて去る、其任達拘はらざる、率ね此の類なり。

岡島璞

字は玉成、冠山と號す、又明敬と號す、授之と稱す、後、彌太夫と稱す、長崎の人、始め譯士を以て萩侯に仕ふ、尋で家居し、専ら性理の學を修む、嘗て戶田侯の聘に應じ、江戸に來り、學を林整字に受く、幾くもなくして致仕し、浪華に至り、講說を以て事と爲す、又、江戸に至り、平安に至る、尤、稗官の學を好み、華音に精し、從遊甚多し、物徂徠及藤東野、太宰春臺と交る、徂徠、稗史を讀み、

從遊甚多、與物徂徠及藤東野、太宰春臺、
交、徂徠讀釋史有疑、輒質諸玉成、享保十
三年卒、於平安年五十五。

伊藤長原藏曰、冠山子生乎肥、長乎肥、肥
會同之地、故多與關廣吳會之人交、善操
華音。

東條耕子藏曰、冠山云、洛閩諸儒、知天而
不知人、頗類于老莊、近時攻擊洛閩之諸
儒、知人而不知天、差近于申韓、由是觀之、
雖以宋學爲主、非敢墨守之者。

中野繼善

字完翁、號搗謙、稱善助、長崎人、幼而失父、
母大原氏、林道榮之妻、姉妹也、故寓于道
榮家、道榮授之句讀、又授書法、七八歲誦

疑、あれば、輒、諸れを玉成に質す、享保十三年、平安に卒
す、年五十五。

伊藤長原藏曰、冠山子、肥に生れ、肥に長ず、肥は會同の
地、故に多く關廣吳會の人と交り、善く華音を操る。

東條耕子藏曰、冠山云、洛閩の諸儒、天を知りて人を知
らず、頗、老莊に類す、近時洛閩の諸儒を攻撃するもの、
人を知りて天を知らず、差、申韓に近しと、是れに由り
て之れを觀れば、宋學を以て主と爲すと雖、敢て之れ
を墨守する者に非ず。

中野繼善

字は完翁、搗謙と號す、善助と稱す、長崎の人、幼にして
父を失ふ、母は大原氏、林道榮の妻の姉妹なり、故に道
榮の家に寓す、道榮、之れに句讀を授け、又書法を授く、
七八歳にして誦讀既に備し、時々、道榮に代りて講説

讀既徧、時時代道榮講說、談論殆如老成人、聞者駭服、年十九遊江戶、廣交諸名士、篠山侯松平典信、引見而奇之、供衣食、俾益修其業、天和四年、執政關宿侯牧野成貞、辟掌書記、元祿中常憲大君屢臨關宿侯邸、輒召見命進講經、於是從遊益衆矣、元祿^乙侯致仕、世子襲封、後移封參之吉田、完翁謝病而去、居平安、教授生徒、居一歲、侯再聘請、遇之甚優、凡歷事四世、以恪謹稱、享保五年病卒、年五十四。

東條辨子藏曰、爲謙遇太宰春臺甚渥、嘗言吾不敢謂知人之明、但知太宰生、則不讓他人、春臺亦曰、設使完翁得邦家、必將託六尺之孤、寄百里之命於我矣、雖骨肉

す、談論殆んど老成人の如し、聞く者駭き服す、年十九、江戸に遊び、廣く諸名士に交はる、篠山侯松平典信、引見して之れを奇とし、衣服を供し、益其業を修せしむ、天和四年、執政關宿侯牧野成貞、辟して書記を掌らしむ、元祿中、常憲大君屢、關宿侯の邸に臨む、輒、召し見て、命じて經を進講せしむ、是に於て從遊益衆し、元祿^乙侯致仕し、世子封を襲ぐ、後、封を參の吉田に移す、完翁病を謝して去る、平安に居り、生徒に教授す、居ること一歲、侯再び聘請し、之れを遇すること甚優なり、凡そ四世に歷事し、恪謹を以て稱せらる、享保五年病んで卒す、年五十四。

東條辨子藏曰、爲謙、太宰春臺を遇する甚渥し、嘗て言ふ、吾れ敢て人を知る明ありと謂はず、但、太宰生を知るは則他人に譲らずと、春臺も亦曰、設し完翁をして邦家を得しめば、必將に六尺の孤を托し、百里の命を我れに寄せんとすと、骨肉と雖、以て之れに尙ふるなし、終身其の人と爲りに敬服すと云ふ。

無以尙之、終身敬服其爲人云。

水尾安方

字斯立、號博泉、稱平之進、肥後人、幼聰慧、能大書大字、每客至、父屏山必命書之、一日客至、博泉方嬉戲、屏山數召之、乃徑進客前、張兩手、開股而立、客歎其機警、物徂徠聞其夙慧、見肥人託李樂龍太華山記曰、卿歸謂博泉曰、卽席句讀于此記、予則截與雙耳、博泉立爲句讀、一無差誤、其人後又適江戶、見徂徠、請得雙耳、徂徠哂曰、不、神童者不可不與也、但於博泉不與而可、後有罪見罷、不忍困苦、一日如廁、書詩于壁、而自殺。

中根若思

水尾安方

字は斯立、博泉と號す、平之進と稱す、肥後の人、幼にして聰慧、能く大の字を大書す、客至る毎に、父屏山必命じて之れを書せしむ、一日客至る、博泉方に嬉戲す、屏山數之れを召す、乃徑に客の前に進み、兩手を張り股を開きて立つ、客其機警を歎す、物徂徠其夙慧を聞き、肥人を見、李樂龍の太華山の記を託して曰、卿歸らば博泉に謂つて曰へ、卽席に此記に句讀せば、予は則雙耳を截りて與へんと、博泉立どころに句讀を爲し、一も差誤なし、其人、後又江戶に適き、徂徠を見、雙耳を得んことを請ふ、徂徠哂つて曰、不、神童には與へざるべからず、但、博泉に於いては與へずして可なりと、後、罪ありて罷めらる、困苦に忍びず、一日廁に如き、詩を壁に書し、而して自殺す。

中根若思

字敬父、號東里、伊豆下田人、幼爲僧、師事悅山禪師、後謁物徠、學文法、徠徠命讀左氏史漢、徠徠大嗟賞焉、偶讀孟子、有慨於心、於是蓄髮、徠徠聞不悅、若思亦稍厭其學、藤公謹延寓之其室、室鳩巢亦欲引致門下、乃委實事之、從之、加賀、又住東都、居甚貧、與弟叔德、鬻木履及竹皮履、以爲食、人目曰皮履先生、晚好王陽明書、享保延享間、屢往來下毛及浦賀、講學、邑人頗有向學者、性高潔、人有贈者、皆斥不受、明和二年病卒、于浦賀、年七十二、所著有東里遺稿。

柴彦、栗山曰、東里文、雅馴古勁、有左氏國語之遺、而運諸己、能反覆自盡、大異世之

字は敬父、東里と號す、伊豆下田の人、幼にして僧と爲り、悅山禪師に師事す、後物徠徠に謁し、文法を學ぶ、徠徠命じて左氏史漢を讀ましむ、徠徠大に嗟賞す、偶、孟子を讀み、心に慨するあり、是に於て髮を蓄ふ、徠徠聞いて悦ばず、若思も亦稍、其學を厭ふ、藤公謹、延いて之を其の室に寓せしむ、室鳩巢も亦引いて門下に致さんと欲す、乃、實を委ねて之に事ふ、從て加賀に之き、又東都に住す、居甚貧し、弟叔德と、木履及竹皮履を鬻ぎ、以て食を爲す、人目して皮履先生と曰ふ、晚に王陽明の書を好む、享保延享の間、屢、下毛及び浦賀に往來し、學を講ず、邑人頗學に向ふ者あり、性高潔、人贈る者あらば、皆斥けて受けず、明和二年病んで浦賀に卒す、年七十二、著す所東里遺稿あり。

柴彦、栗山曰、東里の文、雅馴古勁、左氏國語の遺あり、而して諸を己に運らし、能く反覆自ら盡す、大に世の謂はゆる古文辭の、奇字を馴し、險句を行り、虛編薄隘、悍

所謂古文辭剽奇字行險句虛騷薄隘悍然不朽自處者之爲也。

伊藤祐之卷三十九

字順卿、別號莘野、京師人、客于賀藩、所著有白雪樓集。

錦天山房詩話、莘野以下若干人、皆瑣尾、固屬鄙以下、其爵里履歷、多不詳者、甚至併名字不可考、然其遺篇往往散見諸選集者、不忍漸滅、故略輯錄焉。

物茂卿卷四

名雙松、有所避以字行、荻生氏、江戸人、其先參河荻生人、本姓物部、自言大連守屋後、稱總右衛門、號徂徠、又號護園、母夢過歲首以松枝挿門而生、故名雙松、父景明、

然として不朽もて、自ら處する者の爲とらに異なるなり。

伊藤祐之卷三十九

字は順卿、莘野と號す、京師の人、賀藩に客たり、著す所白雪樓集あり。

錦天山房詩話、莘野以下若干人、皆瑣尾、固より鄙以下に屬す、其爵位履歷、詳ならざる者多し、甚しきは名字を併せて考ふべからざるに至る、然れども其遺篇往往、諸選集に散見する者、漸滅するに忍びず、故に略輯録す。

物茂卿卷四

名は雙松、避くる所あり、字を以て行はる、荻生氏、江戸の人なり、其先は參河荻生の人、本姓は物部、自ら大連守屋の後と言ふ、總右衛門と稱す、徂徠と號す、又、護園と號す、母、歲首に遇ひ、松枝を以て門に挿むと夢みて生る、故に雙松と名づく、父景明、方庵と號す、大府の醫

號方庵、大府醫官、延寶中坐事竄上總、茂卿時年十四、從父共往焉、幼而有志、雖流落窮鄉、既乏書籍、又無師友、誓拔不群、大異常人、年二十五、值赦還東都、僑居于芝街、時貧甚、衣食不給、鄰有腐家、憐其貧而有志、日饋腐查、及後食祿、月贈米三斗、以報之、時柳澤氏勃興封侯、聞其名聲、羣書記初奉程朱說、後挺然立一家見、痛駁性理、併攻仁齋、又倣明李王、修古文辭、豪邁卓識、雄文宏詞、籠蓋一世、海內人士仰如山斗、自貴介公子藩國名士、至閭巷處士、及緇徒、奔走喘汗、惟恐後焉、藉一字之褒貶、以華衰其業、海內翕然風靡、文藝爲之一新、其學汪洋浩博、自雅樂象胥、至軍

御天山房時話上冊

官なり、延寶中事に坐して上總に竄せらる、茂卿時に年十四、父に従ひ共に往く、幼にして大志あり、窮郷に流落し、既に書籍乏く、又師友なしと雖、誓拔不群、大に常人に異なり、年二十五、赦に値ふて東都に還り、芝街に僑居す、時に貧甚し、衣食給せず、鄰に腐家あり、其貧にして志あるを憐み、日に腐查を饋る、後、祿を食むに及び、月、米三斗を贈り、以て之れに報ゆ、時に柳澤氏勃興し、侯に對せらる、其名聲を聞き、書記を掌らしむ、初め程朱の説を奉じ、後、挺然として一家の見を立て、痛く性理を駁す、併せて仁齋を攻む、又明の李王に倣ひ、古文辭を修め、豪邁卓識、雄文宏詞、一世を籠蓋す、海内の人士、仰ぎて山斗の如し、貴介公子藩國名士より、閭巷處士、及び緇徒に至るまで、奔走喘汗、惟、後るゝを恐る、一字の褒貶を藉り以て其業を華衰す、海内翕然風靡し、文藝之れが爲に一新す、其學汪洋浩博、雅樂象胥より、軍旅法律等に至るまで、精核ならざるは莫し、文を爲るに縱橫馳騁、豪放佚蕩、一時の冠たり、初め柳澤侯の故を以て、屢、常憲大君に見へ、經史を辯論し、賜ふに葵草の衣服を以てす、享保六年、有徳大君、命じて清主の六論衍義を句讀せしむ、成るに及び、亦衣服を賜

二〇七

旅法律等、莫不精核、馮爲文、縱橫馳騁、豪放佚蕩、爲一時冠、初以柳澤侯故、屢見於常憲、大君辯論經史、賜以葵章衣服、享保六年、有德大君命使、句讀清主六諭衍義、及成、亦賜衣服、十二年、大君特召見之、蓋異數云、享保戊申、正月十九日卒、年六十三、是日天大雪、臨終謂人曰、海內第一流人物、茂卿將隕命、天爲使、此世界銀、性好學、看書向暮、則出就檯際、檯際亦不可辨、字、則入對齋中燈火、故自旦及夜、手不釋卷、每自言、熊澤之知伊藤之行、加之以我之學、則東海始出一聖人、所著書數十部、皆行於世。

雨森東伯陽曰、物徂徠余故人也、博覽文

ふ、十二年大君特に之れを召見す、蓋異數と云ふ、享保戊申、正月十九日卒す、年六十三、是日天大に雪ふる、終に臨み人に謂て曰、海内第一流の人、物茂卿將に命を隕さんとす、天爲に此世界をして銀ならしむと、性學を好む、書を見て暮に向へば、則出で、檯際に就く、檯際亦字を辨すべからざれば、則入りて齋中の燈火に對す、故に且より夜に及ぶまで、手に、卷を轉てず、毎に自ら言ふ、熊澤の知、伊藤の行、之れに加ふるに我の學を以てせば、東海始めて一聖人を出さんと、著す所の書數十部、皆世に行はる。

雨森東伯陽曰、物徂徠は余の故人なり、博覽文章、域内

章、域内無雙、第於大綱上、有差、心實慊焉。
 字鼎士新曰、物夫子者、實東方開闢一人、
 其在華夏、亦難其比、而以陪臣、居散職、何
 華夏、卽在國中、不君實於兒童、不司馬於
 走卒、又未泰斗於學者、晚乃稍見仰、然矮
 人觀場、未有實知者、雖然是何足論、其所
 爲發憤、乃摘藻揆天庭、所傳施、不可測也。
 字壘士朗曰、文豈易言哉、綜該古今、包羅
 天地、然後爲得也、今求其人、海内之大、而
 一物先生在焉。

藤統忠大乾曰、嗚呼先生復學於古、歸道鄒
 魯、博窮物、立言修德、崇名垂不朽、莫大焉。
 嗚呼先生出也、如日之升也、乃影之及、無
 所不照、其膝焉、嗚呼實出先生、天意可知。

錦天山房時話上冊

無雙、第、大綱上に於て差あり、心實に慊焉たり。

字鼎士新曰、物夫子は、實に東方開闢の一人なり、其れ
 華夏に在ても、亦其比に難し、而して陪臣を以て散職
 に居れり、何ぞ華夏ならん、即ち國中に在ても、兒童に
 君實せられず、走卒に司馬せられず、又未だ學者に泰
 斗たらざるなり、晚に乃稍仰がる、然れども矮人の觀
 場、未だ實に知る者あらず、然りと雖、是れ何ぞ論する
 に足らん、其爲に發憤する所、乃ち藻を摘り天庭を揆
 ふ、傳施する所測るべからず。

字壘士朗曰、文豈言ひ易からんや、古今を綜該し、天地
 を包羅し、然して後得たりと爲す、今、其人を求むるに
 海内の大にして、而して一の物先生あり。

藤統忠大乾曰、嗚呼先生學を古に復し、道に鄒魯に歸す
 博く物を窮め、言を立て德を修め、崇名不朽に垂る焉
 より大なるはなし、嗚呼、先生の出るや、日の升るが如
 し、乃影の及ぶ、其膝を照さる所なし、嗚呼、實に先生
 を出だす、天意知るべきなり。

也。

原善公道曰、徂徠病中喟然歎曰、吾下世後、遺文必將行、然海内無實知我者、惟有東涯耳、芝三田長松寺徂徠墓在焉、猗蘭侯選碑文、葛烏石書之、工始竣、遠近爭傳、來摸揚之者、日甚衆矣、長松寺號壽命山、自葬徂徠後、一號徂徠山。

錦天山房詩話、建業以來、文運始闢、儒士輩出、絃誦稍盛、至詩文、尙循五山禪衲之陋習、萎茶不振、護老頽邁之資、桀驁之才、刻勵揣摩、別出手眼、首唱古文辭、大聲疾呼、以誇後進、海内風靡、文體爲之一變、其功偉矣、其詩雖粗率、而另有一種通咽痛快處、諸子皆不能及焉、惜夫急於成家、輕

原善公道曰、徂徠病中に喟然として歎じて曰、吾れ下世の後、遺文必將に行はれんとす、然れども海内、實に我を知る者なし、惟、東涯あるのみと、芝三田、長松寺に徂徠の墓在り、猗蘭侯、碑文を撰し、葛烏石之を書す、工始めて竣る、遠近争ひ傳へ、來りて之れを摸揚する者日に甚衆し、長松寺は、壽命山と號す、徂徠を葬りてより後、一に徂徠山と號す。

錦天山房詩話、建業以來、文運始めて闢け、儒士輩出し、絃誦稍盛なり、詩文に至りては、尙五山禪衲の陋習に循ひ、萎茶振はず、齒老頽邁の資、桀驁の才、刻勵揣摩し、別に手眼を出だす、古文辭を首唱し、大聲疾呼し、以て後進に誇る、海内風靡し、文體之れが爲に一變す、其功偉なり、其詩粗率と雖、而も另に一種通咽痛快の處あり、諸子皆及ぶ能はず、惜いかな家を成すに急に於て、輕しく前賢を誣る、動もすれば異説を立て、執拗怪僻の病を免れず、之れに附和する者、又従ひて之れを鼓す、稍、浮夸放蕩の弊を長ず、故に身歿して未だ

証、勳賢、勳立、異說、不免、執拗、怪僻、之病、諸
 附、和之者、又從而鼓之、稍長、浮夸、放蕩、之
 蔽、故身歿未久、攻者四萃、殆無完膚、余謂
 徂徠之於斯文、猶桓文之於周室也、功之
 首、罪之魁、庶幾乎得其中焉。

久しからずして、攻むる者四もに萃り、殆んど完膚な
 し、余謂ふに徂徠の斯文に於けるは、猶ほ桓文の周室
 に於けるがごとし、功の首、罪の魁、庶幾くは其中を得
 ん。

錦天山房詩話

上冊終

日本詩話叢書

三三三